1996年4月1日発行(毎月1日発行)通巻第二十号 1995年3月13日第三種郵便物認可

Japanese Rock Newsmedia

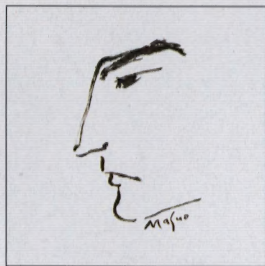
J-ROCK magazine

GLAY
X JAPAN
筋肉少女帯
TWINZER
TOMOVSKY
尾崎 豊
甲斐 よしひろ
佐野 元春

FEATURE

音楽雑誌用語マニュアル

5
300YEN
月刊ジェイロックマガジン
Volume 12
MAY 1996

ため息のかわりに。

“もうおまえしか見えない”をはじめ
未発表曲5曲を含む、全7曲収録。
「尾崎のホワイト・アルバム」と
呼んでください。

3.27 Album Release

/尾崎 豊

TBCL-1001 税込定価￥3,000 （税抜価格￥2,913） 発売元 株式会社トランスビート・マスタートラックス 販売元 ビクターエンタテインメント株式会社

アルバム・タイトル大募集　初回限定特典応募ハガキ封入

■応募要項　本アルバムは、作品の評価／判断をファンの皆様に委ねる意味で、アルバム・タイトルをつけませんでした。そこで、ファンの皆様からアルバム・タイトルを募集します。応募された方の中から抽選で、素敵なオリジナル・グッズをプレゼント。
●アルバムジャケット画より起こした池田満寿夫オリジナル・リトグラフ（応募者全員の中から30名様）
●応募が最も多かったタイトルの入った7曲入り特製CD盤（そのタイトルをお答えいただいた方の中から500名様）
■応募方法　アルバムに同封されている申し込みハガキに必要事項を記入し、自分がふさわしいと思うアルバム・タイトル名を一つ書いて郵送してください。
●締切　平成8年4月26日（金）　消印有効　●発表　5月13日発売「オリコン・ウィークThe Ichiban」誌上にて、最も応募の多かったタイトルとプレゼント当選者を発表。

CONTENTS

5 May 1996
J-ROCK magazine

COVER ARTIST
GLAY

COVER PHOTOGRAPHER
AKIHITO TAKAGI

EDITORIAL DESIGN
HIROSHI SHIRAE
TOMOYUKI OHNISHI

1996年4月1日発行（毎月1日発行）通巻第二十号
発行：株式会社ジェイロックマガジン社
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 8F
PHONE:06-214-1751／FAX:06-214-1761
印刷・製本：株式会社大伸社
発行人：辻村和周　編集長：里居正裕

アーティストニュースを見よ。

本誌は、日本の音楽に焦点を当てていく音楽専門誌としてここに名乗りを上げる。
まず本誌中のJ-ROCK ARTISTS NEWSを見てほしい。基本的に、ここでセレクトしたアーティストたちに注目していくつもりだ。このアーティストたちは、編集部が次の5つの条件を基に際限の無い論議を行い、独断と偏見のもとにセレクトしている。

1. ルーツ（ロックスピリッツ、ブルースフィーリングを持っている）
2. 実力（歌唱または演奏力がある。声に魅力がある）
3. クリエイティビティ（作詞・作曲能力に優れている）
4. パフォーマンス（カリスマ性がある。ライブパフォーマンス、ビジュアルがいい）
5. 生き様（芸能人、タレント化していない）

以上の5項目を有していれば、当然認められるべきで、そうしたアーティストを選出した。

GLAY

"BEAT OUT! '96" MARCH 2ND 1996

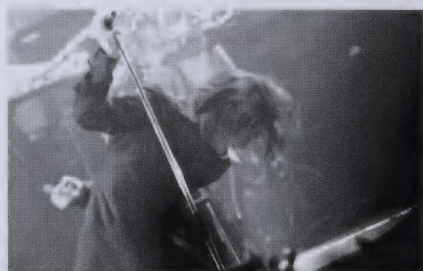
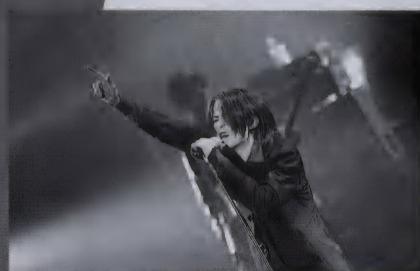
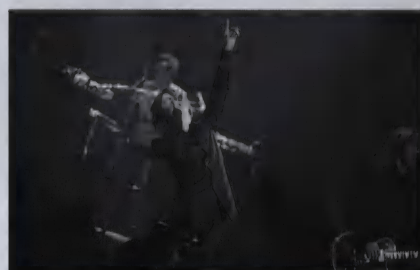
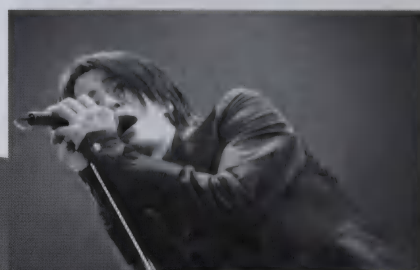
AT AICHI-KEN KINROU KAIKAN

PHOTOGRAPHER JUNICHI SATOH
TEXT BY JUNKO YAMADA

TERU & HISASHI TERU & HISASHI TERU & HISASHI TERU & HISASHI

TAKURO TAKURO TAKURO TAKURO TAKURO TAKURO TAKURO TAKURO TAKURO TAKURO

JIRO JIRO JIRO JIRO JIRO JIRO JIRO JIRO JIRO JIRO JIRO JIRO

HISASHI HISASHI HISASHI HISASHI HISASHI HISASHI HISASHI

GLAY

1996年3月2日愛知県勤労会館

GLAY

定刻より、かなり遅れて開演の時がやってきた。しかし客席で立ち上がっている観客たちに待ちくたびれた様子などカケラも見えない。SEが鳴りやみ、意外と静かに場内が暗転すると、ブルー、グリーン、ピンク…カラフルな照明が、デジタルサウンドに合わせて踊るようにステージ上を舞う。しかし観客の視線と感情は、その奥にこの瞬間にも見えるはずの人影を探し求めていた。“早く会いたい”。意味不明で、行き場のない暴発しそうな叫びがステージに襲いかかる。両手を上げてグレイの4人とサポートメンバーが姿を現したその一瞬、場内の温度が2、3度上昇したのを私の肌が敏感に感じ取った。

「More than Love」のヘビーで厚みのあるリフが、真のオープニングを告げる。観客の熱狂ぶりに比べて、とても落ち着いて見えるメンバー。夜空に冷たく浮かぶブルーの星ほど実はとても高温であることを思い出させるような、クールな熱さという形容が似合う。ライブならではの暴れたりブチ切れたりする姿もいいが、このステージは客席から全身でぶつかっていけそうな大きなスケール感が実に頼もしく、自分たちの音楽を大切に、自信を持って聴かせていることがまっすぐに伝わってくる。

「96年は強く生きていこうということで、この曲が生まれました」TERUのMCで始まった「生きてく強さ」。さっきにも増して観客が元気だ。必死の形相で一緒になって歌っている姿を見て「この歌が好きなんだなあ」と思いながら自分まで口ずさんでしまう。一つになるこの瞬間を重ねたくて、アーティストはライブを行い、観客は足を運ぶ。損得のない、この場でしか体感できない空気とにおい。テクニックとかクオリティーだけではない、あふれ出る気持ちが作り出す空間。彼らが歌う“生きていくための強さ”は、こんな空間でこそ得ることができるのだ。

グルグル回る何本ものライトがステージを鮮やかにメイクして、一つのストーリーが幕を開ける。ドラマチックなD・I・E・のシンセサイザーに、HISASHIのギターが泣き出し、それをなだめるように永井利光のドラムが刻み始める軽快なビート。突然JIROのベースが低く流れる暗雲のように勢いをつけて駆け出し、同時にTAKUROのギターがD・I・E・、永井、HISASHIのサウンドをつないで走っていく。力強くTERUが歌い出した。曲から受けるイメージそのままのタイトルを持った楽曲「原色の空〈Cloudy Sky〉」。グレイのサウンドの幅を見せつけながらその厚みで客席を圧倒し、感情を吐き出すように音や声を存分に聴かせる。さらに新作『BEAT out!』でも感じた、ボーカルを支える楽器隊ではなく、一人ひとりの音や声の絡みがバンドを面白くしていることを実感させてくれた。

時を足早に刻むSEと、D・I・E・のキーボードの悠々とした音色が、タイムスリップしたような錯覚に落とし込む。「BABY BABY BABY TALK～」繰り返されるフレーズに観客の顔が一段と輝き出し、メンバーのステージングも一気にヒートアップする。髪を振り乱しながら、ギターをかき鳴らすTAKURO。HISASHIと向かい合って座り込んだりステージの高台へ駆け上がったりして、ツインギターの見せ場も生み出している。気持ちよいリズムに合わせながら前へ前へ出てくるJIRO。マイクを手にステージを動き回って元気に歌うTERU。時を越えた空間は、熱気を振りまきながら日常とは別の速度で進み、限りある時間の存在を忘れさせる。

ソロタイムを挟み、今では少し懐かしくさえ思える「LOVE SLAVE」「Freeze My Love」などのナンバーをリアルタイムのグレイのフィーリングで聴かせ、ゴールのない全力疾走を続けるメンバー。息が切れようともだれも遅れることはない、だれも置いてきぼりにされない、場内にはすべてを一つに結ぶ大きなリボンがかけられている。彼らは今後このリボンをどんどん長く、そして強いものにしていくのだろう。

「今日は良いライブになりました。この日を絶対に忘れません」そんな言葉で迎えたラストナンバー「軌跡の果て」。TAKUROのエレクトリック・アコースティックギターが切なく温かい。控えめだがとても力強いサウンド、TERUの伸びのある表情豊かな歌声、そしてクリーム色のライトに包まれて、素直で温かな気持ちがゆっくりと全身に広がっていく。観客と共に歌い続けるTERU、TAKUROを残し、去っていくメンバー。引き止めようと悲鳴に近い声を上げる観客の意識を、ステージに残る2人が歌声とギターだけで引きつける。一つになる歌声をすべて受け止めるかのように、TERUは両手を広げた。「ありがとう!!」。永遠に続くような気がした歌声に、彼はそのひと言でピリオドを打つ。去っていったメンバーが色彩を持ち去ったかのように、急速にセピア色に変わるステージ。観客は、再び彩りを与えようと、かれかけた声を振り絞って叫びだした。「アンコール、アンコール…」

約2時間に及んだグレイのライブ。彼らのライブがメリハリをつけ気持ち良く展開する要因として、スピード感あふれるナンバーからバラードまでを聴かせられることがとても大きい。ただ今日のライブにおいて、「みんなにこの曲をずっと大切にしてほしいと思います」という言葉で始まった「INNOCENCE」、D・I・E・の美しいピアノが奏でられた「Together」のバラード2曲は、残念ながらMCや曲中に観客のかけ声が何度も上がり、彼らがまだ自分たちの音楽にすべての観客を巻き込めていないことを感じさせた。しかしその歓声以上に、多くの観客が一緒に歌い、あるいは黙って聴き入り、曲の終わりには温かい拍手がわき起こっていたことが、とても印象に残っている。グレイに反応するだけではなくグレイが作り出すその音楽に溶け込んで、自分の感情を開放する観客たち。その割合は、今後どんどん増えていくだろう。そしてグレイの音楽でしか、ライブでしか生まれない独自の一体感で埋め尽くされたライブを、彼らは必ず見せてくれるはずだ。私の意識の底には、そんな次のライブへの期待と今後への予感めいたものが確信に近い形で存在している。

［文・山田純子　撮影・佐藤潤一］

COLLECTION GLAY

TEXT by Miki Aoki

COLLECTION GLAY COLLECTION GLAY

60年代ごろのグループ・サウンズ(GS)ブームに始まり、海外のロック&ポップスに大きな影響を受けながら育ってきたJロック。ピュアなその血を受け継ぐグループを生み出す土壌はちゃんと出来上がっていたのか? そんな疑問にようやく答えてくれそうなバンドに出会えた。それがグレイである。サウンド、ビジュアル両面にわたって、スタイリッシュでカッコいい彼らの音楽に言及する。

〈バンド・ヒストリー〉

グレイの誕生は88年。当時高校生だったTAKURO(G)とTERU(Vo)を中心に結成。地元北海道函館市のライブハウスを拠点に活動を始める。髪を逆立て、派手なメイクを施した過激なビジュアルで、パンクロック指向のオリジナル曲を演奏していた。活動を始めてすぐに、TAKUROの同級生、HISASHI(G)が加入。ライブ会場でのデモテープ無料配布などが人気を呼び、固定ファンも増えた。

バンドは結成2年で、早くも地元の小さな貸しホールを満員にできる程の人気バンドに成長。グレイの顔TERUは、結成当時ドラマーとして参加していたが、途中でボーカルへ転向。その思い切った判断は間違いではなかったものの、以降ドラマーが定着しないジンクスを抱え込むことに…。 90年、高校卒業を機に、TAKURO、HISASHI、TERUの3人が上京。当時の他のメンバー(Ds・B)はバンド活動に対する価値観の違いや、親の反対を理由に上京を断念。新生グレイは仕事とバンドの両立というハードな生活に追われつつ、都内やその近郊のライブハウスで活動を行っていたが、順風満帆とはいかなかったようだ。ドラマーだけは決まらず、半年に一度の割合で交代が繰り返されていたという。

しかし、そんな障害を乗り越え2年間で自主制作カセット3本を発表し完売させる。関東一円での人気も定着して来た92年、地元北海道での後輩バンドのメンバーであったJIRO(B)が加入。そのころのグレイの音楽性やビジュアルを好んでいなかった彼の提案で、バンドの改革が行われた。ケバい化粧を落とし、髪を黒く染め直して現在のようにスタイリッシュなビジュアルへと変ぼう、まだ未開拓であったライブハウスの門をたたき、活動はさらに加速した。

そして、 93年、運命の風向きが変わった。Xジャパンのヨシキが主宰するインディレーベル、エクスタシー・レコードのスタッフがたまたまグレイのデモテープを入手。それを聴いて彼らの可能性を感じたYOSHIKI自らがお忍びでライブを観に訪れ、契約話を持ちかけた。その契約は成立し、同年暮れよりアルバムの制作を開始する。

翌94年にはソールドアウトのライブを続出させ、L.A.にてYOSHIKIプロデュースのデビューシングルを録音。5月25日、YOSHIKIが新しく設立したメジャーレーベルからデビューシングル、そしてインディーズでアルバムを発表、異例のメジャー&インディ同時デビューを飾る。始めての全国ツアーも体験し、活動のフィールドもグンと広がり、最も成長を遂げた1年となった。上り調子で迎えた95年3月にはインディシーンを卒業。メジャー1stアルバムをリリース、発売2週目には売り上げ10万枚突破を記録した。その直後、当時のドラマーNOBUMASAが脱退したが、レコーディングもこなせるサポート・ドラマー永井利光を迎え、4月から全国ツアーをスタート。なんと10公演すべてが即日ソールドアウトに! その後もCMタイアップ曲やTV番組テーマ曲となるシングルを次々とリリース、ファン層の厚みを膨らませながら、メジャー街道を猛スピードで駆け巡っている。

〈アルバム&シングルヒストリー〉

グレイのレアコレクションと言えば、デビュー前のデモテープの数々だろう。私はJIROがバンドに参加した後に、自主制作した『GREATEST SHADOW』(92年ごろ)を聴いてみた。タイトなビートロックやバラードなどバラエティーに富んだ6曲入りカセットだ。アマチュア時代後期のグレイの力量は十分とは言えないが、かなりのレベルに達していたようだ。多少勢い余ったプレイも聴かれるし、レコーディングを意識しすぎたのか演奏にコシが感じられない。メンバー個々が守りのプレイに走っていて、音楽的な深みを探れないままサウンドが置き去りになってしまっていたのも残念だ。しかし、粗削りながらアレンジの構成力に可能性が見られる点や、楽曲をしっかりと組み立てて形にできる才能をそのころから持っていたことを強烈に印象付ける。当然ながら現在は入手不可能な音源だ。

J-ROCK ORIGINAL CHART

THE MONTHLY CHART OF [J-ROCK ARTIST CD 50]

本誌3月号アンケートハガキによる読者投票と全国32局で放映中の本誌協力テレビ番組「J-ROCK Artist Count Down 50」の2月9日~3月1日（4回）オンエア分の投票による月間総合順位をお届けする。次回締め切りは4月26日、さあ、キミの投票でチャートを変えよう。本誌とじ込みのアンケートにセレクトアーティストの名前を1名書いて送ってほしい。抽選で毎月30名様にオリジナルステッカーをプレゼント！

	ARTIST	得票数
31	ZYYG	256
32	GARGOYLE	241
33	甲斐よしひろ	234
34	Mr.Children	222
35	MANISH	218
36	奥田民生	215
37	PERSONZ	198
38	DEEP	182
	D.T.R	
40	NOKKO	171
41	Valentine D.C.	158
42	DREAMS COME TRUE	144
43	SLY	142
44	斉藤和義	141
45	nuvɔ:gu	129
46	生沢佑一	125
47	JUN SKY WALKER(S)	121
48	THE MODS	118
	小沢健二	
50	SUPER JUNKY MONKEY	114

	ARTIST	得票数
11	X JAPAN	542
12	氷室京介	509
13	大黒摩季	487
14	CRAZE	461
15	ZARD	453
16	THE STREET BEATS	446
17	DEEN	423
18	布袋寅泰	411
19	modern grey	395
20	FEEL SO BAD	382
21	筋肉少女帯	377
22	DER ZIBET	361
23	THE MAD CAPSULE MARKET'S	354
24	BLANKEY JET CITY	346
25	SIAM SHADE	322
26	PAMELAH	305
27	JUDY AND MARY	296
28	FIX	281
29	CHARA	275
30	media youth	274

1ST	LUNA SEA	1138
2ND	L'Arc~en~Ciel	1005
3RD	WANDS	880
4TH	B'z	832
5TH	黒夢	723
6TH	THE YELLOW MONKEY	711
7TH	T-BOLAN	665
8TH	Eins:Vier	608
9TH	BUCK-TICK	578
10TH	GLAY	557

佐野元春

ライブ'96

February 12th 1996 at Osaka Festival Hall

INTERNATIONAL
HOBO KING TOUR
featuring
The international
Hobo King Band

SANO MOTOHARU

1996年2月12日大阪フェスティバルホール

〝佐野元春の音楽っていいな〟。ライブを見終わった瞬間、私の心にこんな当たり前そうでいて、なかなか実感することのない気持ちが自然にわき出てきた。彼と今回からのツアーバンドであるザ・インターナショナル・ホーボ・キング・バンドの総勢12人が見せ、聴かせたステージは、音楽の純粋な気持ち良さがいっぱい詰まった〝遊園地〟のよう。デビューして10年以上がたつアーティストに対して、こんな言い方は失礼かもしれないが、ステージ上の彼は、まるで少年が無邪気に音楽と遊んでいるようにさえ見えた。

大阪フェスティバルホールの2デイズの2日目。大阪でのライブが実に2年ぶりという会場は、立ち見が出るほどのにぎわいだ。しかし、そこには緊張感など全くなく、なんだか久しぶりに友人と会ううれしさでワクワクしている、そんな雰囲気が漂っている。観客は、待ち時間さえも楽しんでるみたい。

94年に佐野元春は、デビュー以来14年間ずっと彼をサポートし、メンバーとも言える存在であったザ・ハートランドとの別れを決意し、新たにスタートを切ったのである。この出来事は多くの音楽ファンに衝撃を与えると共に、その後の彼の動向が注目されていた。約1年の沈黙を破って発表したシングル「十代の潜水生活」は、ポップセンスあふれるいつもの彼らしいサウンドに新鮮な〝勢い〟をのぞかせている。そのバックを務めているのが、今夜お目見えするザ・インターナショナル・ホーボ・キング・バンド。ちなみに、このバンドのホーンセクションは、スカパラ・ホーンズの5人だ。スカパラ・ホーンズと言えば、今いろんな所で引っ張りだこ。特にライブでのステージングに定評ある彼らだから、楽しみだ。

ザ・インターナショナル・ホーボ・キング・バンドの演奏に導かれ、佐野元春は真っ赤なシャツ、真っ白なジャケットに身を包み、満面の笑顔で登場だ。観客の弾む手拍子と親しみの込められた歓声の中で始まったオープニングナンバーは「約束の橋」。不思議なもので彼が一声を発した途端、〝そうそう、この声この声〟という安心感から、いや応もなく独自の世界が広がる。さすがに彼のボーカリストとしての存在感はすごい。佐野をバックで盛り上げるバンドは、まだ数回しかライブを共にしていないとは思えないほど、余裕を持ったステージングだ。

ポップ、ファンク、ロックンロール、リズム&ブルースなど様々な音楽ジャンルを織り交ぜながら和やかに陽気に進んでいくステージに、観客はごく自然に手拍子をし、歓声を上げて反応している。合間を縫って発せられる佐野のMCは、まるで歌っているようにリズミカルで、時には客席に笑いを取るユーモアさえあった。

中盤へと差し掛かる「コンプリケーション・シェイクダウン」「ワイルド・オン・ザ・ストリート」で、会場はたちまちディスコティックに早変わり。ラップ調に歌う佐野の歌声に合わせて聴かせるバンドのすべての音は、一気にはじけて踊り出す。スカパラ・ホーンズが、ホーンを吹きながら自由自在に動き回り、ダンサー顔負けのアクションを披露する。観客も、ただ感情の赴くままに身体を揺らせている。

佐野がエレキギターからアコースティックギターに持ち換えてスタートした「君を連れてゆく」。バラードナンバーのこの曲では、ドラム、アコーディオン、ピアノ、エレクトリック・アップライトベース、スチールギターで、しっとりと聴かせ、静かな音の中で響く彼の歌声に、力強さと共に温かさが見え隠れする。

会場を再びダンスの渦へと巻き込んでいった後半、ストリート感覚たっぷりの「99ブルース」、ギターのカッティングと生きのいいホーンがカッコいい、スカ調の「インディビジュアリスト」、軽快なポップナンバー「So Young」を次々に披露し、ステージと客席という壁をとっぱらった開放的でアットホームな空気を漂わせた。

「この曲を書いたのは、もうずっと前のことになります。僕は10代の時の思い出を、その歌の中にいっぱい詰め込みました。……この曲は僕が書いて、みんなが受け取ってくれて、そして、みんなの中で日に日に大きくなっていきました。僕はその様子を見て、とてもうれしかったです。一緒に歌いたいんだ」。佐野の言葉とともに流れ出したイントロダクション。沸き起こる拍手と歓声の中、名曲「サムデイ」は聴く者それぞれの心に秘められた懐かしい感情を解き放つかのように届けられた。客席から聴こえる大合唱を受け止めながら、佐野の歌声にもいつしか力が込もり、大きなエネルギーとなってこの上ない感動的なシーンを生む。このシーンの一部だった私の身体は、何度も何度も震えを感じた。本編ラスト「悲しきRadioメドレー」では、ピアノをフィーチャーしてボーカリスト佐野元春をじっくり聴かせる場面があったり、一転してノリノリのサウンドになると観客を数人、ステージに上げ、彼を先頭にステージ中を行進するといった楽しいハプニングもあり、会場を大いに盛り上げる。そのグッドバイブレーションは、アンコールを終えて彼がステージを後にするまで消えることはなかった。

ステージから飾り気もポーズもなく思い切り自身をぶつけてくる彼の姿を目の当たりにした今日のコンサートだが、若いファンが少ないことに若干の悔いが残る。彼のライブには、若い世代の人たちの心をくすぐる〝新鮮さ〟や〝面白さ〟がいっぱいあふれていた。そして、彼の音楽に対する情熱は、ベテランだからと変に落ち着いてしまうようなこともなく、はち切れんばかりのパワーにあふれ、今でも彼のハートが14年前にプロとしてスタートした時のままだと納得させてくれるのだが…。

音楽に年齢がないように、表現するアーティストの音楽の接し方にも年齢はない。ステージで、そこにいるだれよりも無邪気に音楽と遊んでいた佐野元春は、それを教えてくれた。

[文・村田圭子　撮影・高木昭仁]

PLAY LIST

1 約束の橋
2 International Hobo King
3 十代の潜水生活
4 ハッピーマン
5 ニューエイジ
6 新しいシャツ
7 コンプリケーション・シェイクダウン
8 ワイルド・オン・ザ・ストリート
9 ストレンジデイズ
10 (You make me feel like) A Natural Woman
11 君を連れてゆく
12 ナポレオンフィッシュと泳ぐ日
13 99ブルース
14 インディビジュアリスト
15 So Young
16 サムデイ
17 楽しい時 -Fun Time-
18 悲しきRadioメドレー

encore

E1 ぼくは大人になった
E2 NIGHT LIFE

encore

E3 彼女はデリケート

甲斐よしひろ
WELCOME TO THE "GUTS FOR LOVE" TOUR
February 15th 1996 at Osaka FESTIVAL HALL
SECRET LIVE
February 16th 1996 at Osaka BANANA HALL

1996年2月15日、開演前の大阪フェスティバルホール。BGMでこれでもかってぐらい〝アメリカ〟な空気を演出するのは〝今〟のフィーリングをたっぷり注ぎ込んでアレンジし直された、映画『荒野の七人』のテーマ。ニューアルバム『GUTS』の「王道のアメリカンロック」というコンセプトが過ぎるぐらいストレートに結び付くこの雰囲気に、オープニングから一本取られた気がしていた。

BGMが客電と共に去るとステージ床から光の柱が数本伸び、スリリングな時の始まりを告げる。暗闇を切り裂くように飛んだ天井のスポットライト。その光がとらえたドラムセットから、聴く者の気持ちを高揚させる、耳をつんざくリズムが打ち出され、これにベースの生々しいグルーブ、そしてキーボードの浮遊感漂う音色が重なる。オープニングナンバーは「ダイナマイトが150屯」だ。わき起こった歓声と、その叫びをもかき消してしまうほど大きな拍手がぶつけられたステージに飛び出してきた甲斐よしひろ。彼がその声で情熱という名の粉じんをまき散らし始めると、客席からの熱気と共鳴し合い大きなうねりへと姿を変えていく。「絶対・愛」「きんぽうげ」、間髪を入れず披露される往年のホットなナンバーの先制パンチをモロに食らってしまった僕は、「冷静にレポートを」という思惑を早くも過去のものとしようとしている。

『GUTS』からの2曲を挟んで、バイオリンのリリカルなアンサンブルに導かれた「スマイル」。「となりのトトロ」のサントラも手がけた久石譲が24人編成のフルオーケストラを使ってアレンジしたというテープをバックに、この別れの曲を1人ステージ上に立って歌う甲斐の声は、力強さの中に、もの悲しい響きを持ち、弦楽器のハーモニーに溶け込む。

感動の淵に深く沈んでいた場内のギアを、シンバルのカウントから鳴り出したギターが一気にトップに入れた「ポップコーンをほうばって」、存在感のある強いフレーズを刻むベースの音に体がつき動かされる「観覧車'82」では、暗転したステージの天井を、満天の星空を思わせるいくつもの照明が支配する。そして、1人イスに腰掛けた甲斐がエレクトリックアコースティックギター(エレアコ)とハープで演奏する「安奈」のメロディーが静かにホールを包んだ。

「安奈」の余韻が残る中で「明日、バナナホール辺りでライブをやろうかって思うんだけど」とアンプラグドスタイルのシークレットライブをやることが告知される。ただ、幾度かの冗談の後で信ぴょう性が低いようで、その反応は半信半疑といったところだったが。

まだ「本当?」という戸惑いがざわめいている場内に「キーボーディスト河野選手を紹介しよう」と甲斐。登場した河野陽吾は何とエレアコを手にしている。すでにスタンバイしていたギタリストであり、『GUTS』の共同プロデューサーである鎌田ジョージの3人編成で届けられるアンプラグドスタイルの「メタモルフォーゼ」はその一音一音が胸を打つ。明日はたっぷりこのサウンドにひたれるというわけだ。

メンバー紹介から甲斐と4人のサポートミュージシャンがステージのフロントに一列に並び、後半に向けて、上がり切っているオーディエンスのテンションをさらに押し上げようとするかのように「破れたハートを売り物に」が披露される。ショルダーキーボードを持った河野とサポート・ドラマーの田中一光がコーラスに参加して届けられるきらびやかなステージは、思わず踊りだしたくなるほど軽やか。その勢いのまま突入した「マイ・マイ・マイ」では鎌田がZO-3(ゾウさんの愛称で知られるアンプ内蔵のミニギター)を持ち出して、アメリカンロックのフィーリングをたっぷり含んだ、ワイルドなソロを聴かせる。

先月号で、インタビューに答えてくれた甲斐は、〝シンプルでストレート、かつ、エンターテイメント性があるもの〟という表現者としての理想を、プロレス技「足4の字」に置き換えて熱く語ってくれたのだが、このライブが甲斐よしひろ流「足4の字」だと思うと、うまく言ったものだとほくそ笑んでしまう。アコースティカルな曲はもちろんバンドスタイルでのR&Rナンバーでも、今夜の甲斐のサウンドは必要以上に音が詰め込まれることはなく、その分、ストレートに伝わってくる。しかもだ。こういった音を詰めないサウンドというやつは、気を抜いた演奏ではスカスカしたすき間が気になるチープなものになり下がってしまうし、逆に演奏を重視し過ぎれば〝観せる〟というエンターテインメント性が欠如してしまう危険にさらされているのだが、そんな危うさの片鱗(へんりん)さえ見せることなくライブは突き進んでいるのだ。

ドラマチックにギターが鳴る「嵐の季節」。心に響くピアノの音色とタイトなドラム、フィンガーピッキングのまろやかなベースの組み合わせのニューアレンジで届けられる。甲斐バンド時代のナンバーの時の流れと共に進化した姿を体感できるのも、甲斐のライブのだいご味というやつだ。

新曲を軸にしながらも、甲斐バンド、KAI FIVE時代の曲が演奏されるこの「おいしいとこどり」的なプログラムを軽く見る輩(やから)もいるのかもしれない。だが、その目的が「過去の遺物を懐かしむ」っていうセンチなものだと思うのは早計というものだ。リアレンジされた曲もそうでないものも、今の甲斐ならではの感性で歌うってことに意義がある。甲斐のアーティストとしてのヒストリーのほぼ半分をリアルタイムでは知らない僕の血が騒いでいるし、20代だとか50歳を超えているだとか年令なんて関係なしに、フェスティバルホールの汗ばむまでに室温を上昇させている観客たちがそのことを証明しているじゃないか。

「もう一曲やろう」。2度目のアンコールに応えた甲斐がエレアコ1本で「らせん階段」を演奏した後、観客に向かって静かに言った。流れ出したイントロが「港からやって来た女」だと告げる。ライブの空気にのぼせながら僕の脳裏では「明日のアンプラグドライブではどんな熱さを見せてくれるんだろう」ってことがよぎっていた。

[文・大西智之]

＊掲載されている写真はすべて2月16日大阪バナナホールで撮影されたものです。

「ライブハウスの魅力って何だろう？　「ステージとの距離が近い」「アーティストを身近に感じられる」「音に迫力がある」…などと説明しようとしても、どうも適当な言葉が見つからない。これぱっかりは「一度体験してもらえば分かる」としか言いようがないだろう。とにかくアーティストと観客を取り巻く雰囲気がとてもいいのだ。特に普段は大きなホールでしか見られないアーティストの演奏を、ライブハウスで目の当たりにしたときなどは、格別な感動が胸に残るものである（ライブの内容にもよるが…）。

それを改めて感じたのが、大阪バナナホールで行われた甲斐よしひろのシークレットライブ。前夜のライブ中にいきなり発表され、チケットの入手方法もその日の23時からの電話予約というシビアな条件だっただけに、客入りが心配されたが、場内は熱狂的な甲斐ファンによって埋め尽くされていた。

定刻を少し回って落とされた客電。これから始まる貴重なライブへの期待に胸を躍らせる観客は、人けのないステージを一心に見つめている。そんな観客の人と人との間をかき分けるようにスタッフに囲まれた甲斐が楽屋入り（バナナホールの楽屋はステージの横にあり、客席を通らないとたどり着けない）。予想外のところからの甲斐の出現に驚く観客のざわめきの中、アコースティックギターを持ち、ハーモニカホルダーを付けた今夜の主役がステージに現れた。1曲目は「愛と呼ばれるもの」。甲斐の声が威圧感を持ち、研ぎ澄まされた言葉が突き刺さるようなメッセージとなって聴く者の胸へと届けられる。アコギ一本でも、これほどまでに曲の威力、ロックというものを痛いまでに感じさせるのはさすがだ。続けてプレイされた「らせん階段」では、20年も前に発表された曲とは思えないほど、リアルな危機感を今の時代に警告する。3曲目からはツアーメンバーでもある鎌田ジョージと甲斐バンドのドラマーだった松藤英男が加わり、優しくも痛みのあるナンバー「新宿」をしっとりと聴かせた。そしてその後は甲斐を中心としたこの3人によるアコースティック・ライブが繰り広げられたのである。

「プレイがうまくても、人間の相性が良くないとハーモニーは響かない。このメンバーは練習しなくても大丈夫」と語り、ブレッド＆バターやチューリップ、加藤和彦や大沢誉志幸のカバーなど、この雰囲気の中で歌いたい歌や、自分のお気に入りの歌を歌う甲斐。いい意味で前夜のような緊張感がなく、とてもリラックスしているようで、それがまた観客との距離を近づけている。また、1曲の演奏が終わる度に、加藤和彦のアンソロジーを作りたいと思っていることや、このバンドが結成されたいきさつ（ちなみにバンド名は〝害バンド〟だそうだ）、デビュー前の博多時代の懐かしい話などを聞かせ、アーティストと観客の関係がさらに親密化していく。

この日、開演時間が21時だということもあって観客の年齢層は高く、会社帰りのサラリーマンやOLが中心だ。「今日は甲斐バンドの初期の曲が多い」というMCに大きな歓声が上がったことからも、リアルタイムで甲斐バンドを体験したファンが集まったことがうかがえる。懐かしいナンバーがプレイされると、とてもうれしそうな表情を浮かべ、自然と歌詞を口ずさんでいるファン。〝この人たちは今、どんな思いでトリップしているのだろうか？〟と共通体験を意識しながらそんなことを考えてしまう。僕は「テレフォン・ノイローゼ」で、甲斐バンドの解散ツアーのことを思い出していた…。

ラストナンバーの「バス通り」の演奏を終えた3人がステージを去ったとき、時計の針はライブ開始から優に2時間を超えていた。その間、当然のことながら観客は立ちっぱなしである。しかし、疲れた表情など見せずに明るくなった場内にアンコールのハンドクラップを響かせ、スタッフによって終演が告げられるまでアンコールの声は鳴りやむことはなかった。

和気あいあいとした和やかな雰囲気の中で、リラックスしながらもけっしてなれ合うことなくクオリティーの高いライブを見せつけた甲斐、鎌田、松藤。終演後、「この人たちは本当に音楽が好きなんだ」という思いと、貴重なライブを体験できた優越感のようなそう快で心地良い気分が胸いっぱいに広がった。この喜びこそが、ビッグネームのアーティストによるライブハウスでのライブ体験の後に残る格別な感動というものなのである。

［文・樹音檸檬　撮影・浅野順子］

PLAY LIST

2月15日大阪フェスティバルホール

1 ダイナマイトが150屯
2 絶対・愛
3 きんぽうげ
4 時の人
5 風吹く街角
6 スマイル
7 ポップコーンをほうばって
8 観覧車'82
9 安奈
10 メタモルフォーゼ
11 破れたハートを売り物に
12 マイ・マイ・マイ
13 レディ・イブ
14 嵐の季節
15 風の中の火のように
16 翼あるもの
17 漂泊者（アウトロー）
18 HERO（ヒーローになる時、それは今）

encore

E1 GUTS

encore

E2 らせん階段
E3 港からやって来た女

2月16日大阪バナナホール

1 愛と呼ばれるもの
2 らせん階段
3 新宿
4 ブラッディ・マリー
5 やせた女のブルース
6 野生の馬
7 不思議な日
8 千鳥橋渋滞
9 そして僕は途方に暮れる
10 ポスターカラー
11 橋の明かり
12 裏切りの街角
13 メタモルフォーゼ
14 風吹く街角
15 風の中の火のように
16 漂泊者（アウトロー）
17 破れたハートを売り物に

encore

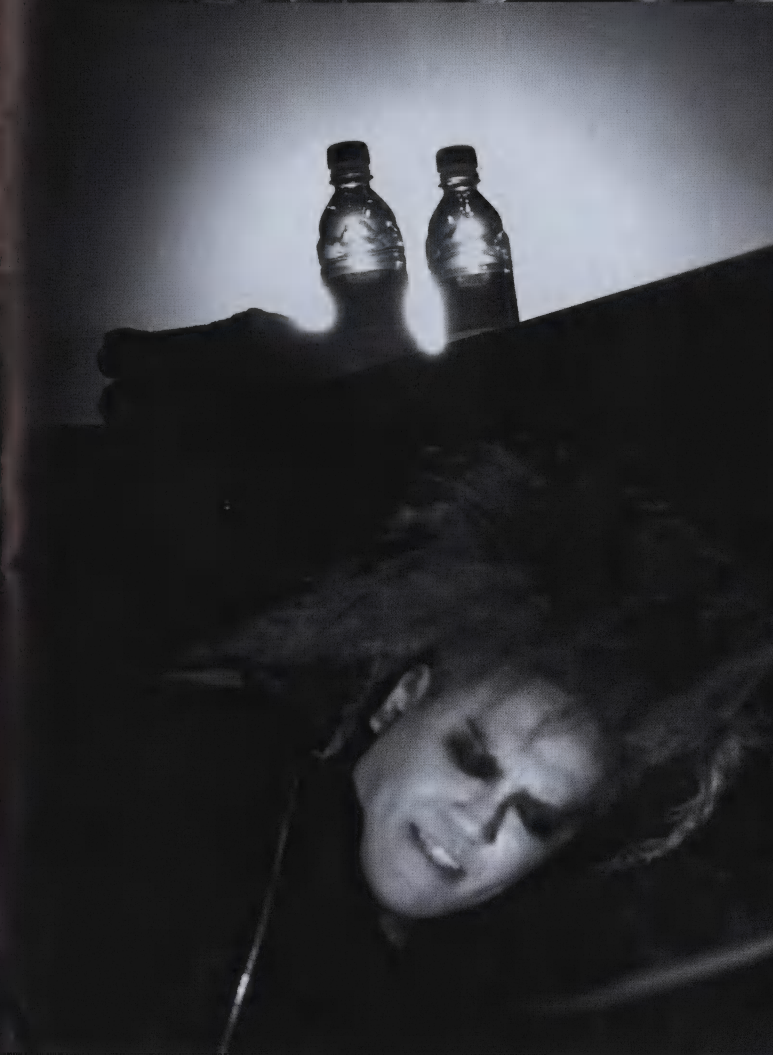
E1 テレフォン・ノイローゼ
E2 バス通り

KING-SHOW

February 21th 1996 at Osaka W'OHOL

筋肉少女帯

筋少リベンジ!および新曲発表会

KING-SHOW

筋少リベンジ!および新曲発表会　1996年2月21日大阪ウォーホール

KING-SHOW

僕が筋肉少女帯のライブを初めて観たのは、彼らがまだインディーズだったころ。当時の音源で知った彼らの奇抜ながらも独創的なサウンドにただならぬ気配を感じ取り、ライブに足を運んだのである。ライブ終了後、対バンが有頂天（インディーズブームを巻き起こしたインディーズ御三家と呼ばれたバンドの一つ）と人生（現電気グルーヴ）というひとクセもふたクセもあるバンドだったにも関わらず、僕の意識の中では圧倒的に筋少の印象が強く残った。もっとも、そのインパクトというのはバンドのサウンドではなく、大槻ケンヂ（そのころは大槻モヨコと名乗っていた）の毒々しいまでのキャラクターから生まれる”イロモノ“的な存在に対してである。当時の社会現象とも言えるバンドブームの中、彼らはメジャー進出を果たし、瞬く間に武道館ライブを行うまでに人気を集めたが、やはりそれもサウンドではなく大槻のキャラクターの強さに引っ張られていたと言っていいだろう。

しかし、バンドブーム以降の筋少は違う。異常発生したミーハーファンがいなくなり、逆にバンドの本質であるサウンドに感化された新しいファンをつかんだのである。サウンドの方も試行錯誤を繰り返しながら、無責任に”イロモノ“などと言えないほどにまでクオリティーを高め、独創性に磨きをかけた。寺山修司、夢野久作、中原中也、江戸川乱歩といった独特の世界を持った文人たちを敬愛する大槻の描く歌詞は、随所にそんな偉人たちの影響を垣間見せるが、大槻ケンヂというこれまた強烈な個性を持ったフィルターを通ることで、比類ない筋少の世界を築き上げる素材へと変わる。そして、彼の描き出す世界を何倍にも際立たせるサウンドは、豊富なアイデアが盛り込まれ、中途半端なプログレやヘビメタバンドなんかよりも、はるかにドラマチックで、テクニカルでスリリング、重量感と創造性を持っているのだ。

昨年、あまり表立った活動がなかった筋少だが、ついに前作『レティクル座妄想』から2年ぶりとなるアルバム『ステーシーの美術』を完成させ、活動を開始。まずは、アルバムリリースに先立って行われた「筋少リベンジ！新曲発表会」と題したツアーで、1年9カ月ぶりに大阪入りしたのである。しかも2日間、場所もライブハウスだ。1日目はツアーの初日でもあり、この日を待ち望んでいたファンが大勢詰めかけ、フロアのステージ前と中央には暴動を食い止めるための柵まで張られていたが、2日目はさらにその数を増し、狭いエリアの中で身動きするのもひと苦労という状態である。また、観客も以前のようなエキセントリックな娘たちばかりではなく、男性ファン、会社帰りのサラリーマンやOLの姿もあり、ファン層の広がりを感じさせる。

突然、入場時から流れていたハードロック系のBGMが鳴りやみ、客電が落とされると、観客のメンバー名を叫ぶ声にブルース・リーの雄叫びが交錯する。最新アルバム『ステーシーの美術』でカバーしている「FIST OF FURY」の原曲（映画「ドラゴン怒りの鉄拳」のテーマ曲）がSEとして使われているのだ。そんな中、本城を先頭にメンバーがステージに登場し、歓声が一段と大きくなるが、黄色くカン高い声ばかりではなく、野太く少々荒っぽい声が多く混ざっているのが頼もしい。

スポットライトがライトハンド奏法を披露する橘高をとらえ、最新シングルとなる「トゥルー・ロマンス」でライブは幕を開けた。ツアータイトルにも「新曲発表会」とあるせいか、オープニングナンバーを新曲が飾ったわけだが、観客のリアクションは良く、そのノリも半端じゃない。昨年、橘高のソロバンドであるユーフォリアや大槻のライブが行われたが、それは筋少ワールドの5分の1の魅力に過ぎなかった。すさまじい橘高の速弾き、腹に響いてくるような内田の存在感あるベース、正確なビートをタイトに刻み続ける太田、MCで観客を引き付ける大槻とプレイで観客をあおる本城。5人そろわなければ（サポートにキーボードが入っているが）、この分厚くハードでちょっとコミカルなサウンドは作れない。それを今、ライブハウスという密接な空間の中で、全身に浴びているのだから、観客は恍惚（こうこつ）とした表情を浮かべ本能の赴くままに体を動かすばかり。そして、最新アルバムの中から発表された「子犬にしてあげる」「星座の名前を言えるかい」「再殺部隊」といった初めて耳にする楽曲も、1曲目の「トゥルー・ロマンス」と同様、新曲だからと耳をそば立てるのではなく、どんなノリなのかと体で様子をうかがい、即座に反応していた。もちろん、「日本印度化計画」「釈迦」といったおなじみの曲では爆発的なノリを見せ、ラストの「ダメ人間」では最上の一体感を生み出し、”熱狂“という言葉がふさわしいライブを繰り広げたのである。

さらに1日目には実現しなかったのだが、2日目はアンコールの声に応え、本城と橘高が背中に”筋肉少女帯“と刺繍（ししゅう）した自前の特攻服姿で登場！　…といってもその勇姿を観客に見せただけで、笑いを取るやいなや、とっとと立ち去ってしまったのだが。

久々の大阪2デイズライブは、家路につく観客にこの日までライブを待たせた欲求を上回るだけの満足感を残したことだろう。彼らのライブに対して、いまだにステージで”笑い“を狙うことに眉（まゆ）をひそめる一部の頭の堅い自称ロックファンがいるかもしれないが、実際に筋少のライブを体験すると、それがあくまでもエンターテイメントとしての要素に過ぎないと確認できるはず。相変わらずステージ上ではボーカリストがヌンチャクやトンファーを振り回し、コップに注がれたビールを一気飲みし、パンツ一丁になるのだが、それはギタリストなどのプレイヤーが持てる数々の高度なテクニックを見せるのと同様、単に大槻のライブパフォーマンスとして完結している。つまりそれだけ、今の筋少のサウンドが大槻のキャラクターを上回るだけの高いクオリティーを誇っているということだ。やはり筋肉少女帯というバンドは、Jロックシーンにおいて今なお特異な存在だと言えるのである。

［文・毛刈松佳　撮影・佐藤潤二］

PLAY LIST

1 トゥルー・ロマンス
2 くるくる少女
3 電波BOOGIE
4 少年、グリグリメガネを拾う
5 僕の宗教へようこそ
6 子犬にしてあげる
7 星座の名前を言えるかい
8 星の夜のボート
9 バトル野郎
10 日本印度化計画
11 サンフランシスコ
12 釈迦
encore
E1 再殺部隊
E2 踊るダメ人間
SE リテイク

内田雄一郎　本城聡章

INTER VIEW
KING-SHOW

INTERVIEWED by AKIRA NISHIHARA PHOTO by JUNICHI SATOH
インタビュアー・西原 朗　撮影・佐藤潤一

昨年はアコースティックライブや学園祭といった活動はあったものの、アルバムリリースがなく、どちらかといえば大槻ケンヂや橘高文彦のソロ活動の方にばかり話題が集まっていた筋肉少女帯。そんな彼らがようやく重い腰を上げ、本格的に動き出した。前作『レティクル座妄想』から2年ぶりとなる新作『ステーシーの美術』を完成させ、さらにアルバムリリース前には「筋少リベンジ!および新曲発表会」と題した東名阪ツアーまで敢行。

ツアー初日の大阪では、エネルギッシュなライブパフォーマンスでバンドの健在ぶりをアピールし、MCでは大槻ケンヂが強引ながらも橘高文彦の同意を得て「年内にもう1枚アルバムを作る」とまで豪語したのである。

翌日、そんなツアー初日のライブの話も絡めつつ、筋少のメロディーメーカーである内田雄一郎と本城聡章に、最新アルバムや筋肉少女帯というバンドについて語ってもらった。

久しぶりの筋少は新鮮で、楽しかった

●今回は「再生、筋少」という言われ方をしているじゃないですか。ということはバンドは何カ月間は死んでいたのかと思ってしまうんですけど…。

本城(G、以下H):別に「再生」ではないんですけどね。ちょこちょこやってましたからね。

●アコースティックライブや学園祭とかやってましたもんね。

H:アルバムを出してないと死んでいると思われるから。

内田(B、以下U):客観的に見ての「再生」ですね。

H:東京でやっているぶんには何も感じないんですけど、これからツアーでいろんな所に行きますけど、そういう場所では感じるでしょうね。約2年ぶりのライブですから。

●筋少のブランクの間にメンバーのソロ活動もありましたが、それが今回のアルバムに生きているという実感はありますか。

U:具体的に「これだっ!」というのは言えませんけど、それはやっぱりあると思いますね。僕らはCD-ROMマガジンにそれぞれがコーナーを持ってまして、そこで打ち込みとかやっていたんで、ライブでバンドでドッカーンというのは「楽ちんだぜ」というのがありますよ。

H:打ち込みで今までと違った感じの曲を作ったが故に、筋少でも違うことがやれたりっていうのはありましたね。

●アルバムのレコーディングに入る前のバンドとしてのテーマというのは?

H:僕と橘高は「とにかく難しいことを考えずに、自分たちがすごくレコーディングを楽しめるようにやろう。もし、それができたら筋少はアルバムをもう10枚作れるんじゃないか」と言ってましたね。それで、レコーディングが終わったときに二人口をそろえて「うん、まだ10枚作れるじゃないか」っていうセリフが出たんで、そんな気持ちの表れが、この髪の毛に(全員爆笑)。

U:バンドとしてのテーマを、特に何かに決めてというのはなかったですね。

H:一応、アルバムのテーマは”再生“ですけど。

●じゃあ、アルバムを作る方法論としては、いつもと変わってないと。

U:変わらないから、「またかっ!」って感じはあったんですけど、久しぶりだったから新鮮で、楽しかったですね。

●筋少のレコーディングってどんな雰囲気なんですか。音を聴くとリズムセクションはノリで録っているような感じがするんですけど、ギターのパートなんかはすごく密ですよね。

H:基本的には自己申告制なんで、自分の好きなようにするんですよ。後は、曲ごとの作曲者がまとめ役になるんです。

U:リズムはノリで、ギターがち密というのは確かにその通りですね。橘高なんかはズルくてリズムセクションを「いいよ」ってうまく口で乗せておいて、リズムを全部録ってから、ギターをずっと10時間ぐらいテケテケと(笑)。

マネージャー(以下M):他のバンドよりも絶対にまじめだと思いますよ。リズム録りするのに全員スタジオにいるんですよ。

●それは、オーバーダビングのためにスタジオに来るのではなくて?

M:ええ、リズム録りも全員で決めてますから。

H:だから、ギターが一番辛いんですよ。最初から最後までいるから。

U:いやいやベースも辛いよ。とりあえずドラムがOK出るまで全力でやらなければいけない。

M:今どき珍しく、全員がブースの中にいますしね。

●今やベテランの筋少が…。

H:それだけは変わらないですね。

U:そうか。普通、そうじゃないんだ。

M:もうこんなバンドいないよ。

今回は筋少史上初、歌詞が曲よりも先にあった

●アルバムタイトルの「ステーシーの美術」というのは、大槻さんが決めたんですか。

H:大槻が書いていた小説のタイトルなんですよ。もう終わったのかな。突然、イヤになって途中で止めたとか(笑)。

M:話が終わったんですよ。

●それをタイトルに持ってきたというのは、何か意図が?

H:あるんでしょうかね。…”再生“なんですよね。

U:う～ん。

●(笑)…昨日は大槻さんがMCで「グレーシー柔術」をもじったと言ってましたけど。

H:それは昨日、突然に思いついたんじゃないですか(笑)。

U:「うむ」と言って、言葉を濁す(笑)。

●その『ステーシーの美術』のラフミックスのテープを聴かせてもらったんですけど、本城さんが言っていた「楽しく」という印象も当然あったんですが、僕は「余裕」「風格」「リラックス」といった印象を強く受けたんですよ。

H:「余裕」ですね。

U:三十路(みそじ)の余裕(笑)。若いころは「あれもやんなくちゃ。これもやんなくちゃ」と詰め込んでアルバム全体がグシャってなってたんですよ。それと比べると「そんなにあわてることはない」と。

●今回のアルバムの作曲者のクレジットを見ると本城さんの曲が多いですよね。

H:たまたまですよ。

U:うちのメイン・メロディーメーカーです。

H:作家様とお呼び!!(笑)不変の筋少テーマ担当の橘高、特攻担当の内田(笑)。そして、常に新たなチャレンジをする本城というように役割が分かれているんですよ。今回、橘高には彼の代名詞と言える”天使に捧ぐレクイエム“と”悪魔に捧ぐレクイエム“を1曲ずつ提供していただいたんで、僕は変わったことをと。大槻がソロを2枚作ったことによって、「こういう歌も、今回は歌えるんじゃないか」と考えながらやってたわけです。

●常に本城さんは、筋少の広がりを考えていると。

H:そうですね。どの曲とは言いませんが、自分で書いた曲に歌詞が乗ったときに、それが曲を作ったときのイメージとすごく合うときと、全く違うものになってしまうと

きが今まで幾度かあったんですよ(笑)。だけど、歌というものは歌詞とそろって出来上がるものだから、常に歌い手とその曲のイメージが合ってなければいけないと考えていて、その中でいつも暗中模索の状態だったんですが、今回は「ああ、よかったなぁ」って感じですね。まあ、今回は筋少史上初の歌詞先があったんですよ。

●あっ、実現したんですね。前回に大槻さんとお話したときに、次の筋少は歌詞先でいくと言ってたんで気にはなっていたんですよ。

H:でも、全部じゃないんです(笑)。それも歌詞の締め切り日というのがあって、その日には全く音沙汰がなかったんですよ。それで、「やっぱりいつもと同じだ」と思って曲を作り出していたら、ある日ファクスがガタガタと音を立ててズルズルズルとイヤになるぐらい長い歌詞が送られてきたんです。

　そういう意味では言葉の字数に縛られてしまって、曲を作る自由度がちょっと減ったと感じているメンバーもいるかもしれないけど、イメージ的なものではいつもよりは楽でしたね。歌詞が先にあることによって、そのイメージで作ったものが「もう変えられるまい」というのがあるから。

●筋少の中での歌詞と曲の出会いというのにすごく興味があるんですよ。大槻さんは、曲を聴いて自分の頭の中でイメージした世界で歌詞を書くわけでしょ。きっと、その中には本城さんが言っていたように、曲を作った人が歌詞を見て「合わない…」と感じるときもあるんだろうなって。

H:「なんで、そこにいくんや」ってのが、たまにあったりしますね(笑)。

●そういうとき、作曲者はどうするんですか。

H:そのままですよ。「頼むよ～」とは言いますけどね。でも、台無しになったとは思ってないんです。「だからこそ、筋少なんだ」って思ってるんですよ。

●曲を作る段階で歌詞があったというのは、作曲者の方からその世界に合わせていく作業だったんですね。

H:だから面白いんですよ。同じ歌詞で、何曲も曲があるわけですからね。大槻が歌詞を書くと、全員のところにガーって長いファクスがいくんですよ。そして、各人がそれに曲を付けていくわけじゃないですか。発表会が楽しみなんですよ(笑)。

U:一つの歌詞に対してタイプの違う曲が3曲あるというのは、曲を作った各人の趣味が出ておかしかったですよ。

H:僕はアバの「ダンシング・クィーン」のようなポップな曲を書いてきたのに、内田は…。

U:なんと、四畳半フォーク(笑)。

H:それで、橘高は発表しなかったんですが、エジプトとか中近東っぽい曲だったという(笑)。

●(笑)その3パターンを収録してミニアルバムでも出してほしいですね。

H:それは、そのうち違う曲になるんですよ(笑)。

太田 明

大槻ケンヂ

●今回のアルバムでのチャレンジというと。

H:前回までは三部作で『エリーゼのために』のときから"三連シャッフル切なモノ"が3曲続いてたんですよ。これは自分に課した「同じリズムで3曲作れるか!」というテーマだったんですけど。それが、前回でひと区切りついたんで、今回は違う"切なモノ(切ないメロディーもの)"を作らないといけなくて…。そりゃあ、産みの苦しみというのはすごいですよ(笑)。そして、そこにファクスで「星座の名前を言えるかい」の歌詞が送られてきたんですよ。「よし、これだ!」って。その時、僕の中では「ダンシング・クィーン」だったんですよ(笑)。もうファクスから歌詞が出てきた瞬間にイントロが出来てた。そして、これで新たな"切なモノ"が出来て、もう今回は"三連シャッフル切なモノ"はなしでいいんだと思っていたら、シングルにもなった「トゥルー・ロマンス」が出来て、まだやるのかって(笑)。

U:僕は曲じゃないですけど、毎回、きれいな本城ポップスに、いかに下品なベースのフレーズを弾くかというのが…。

●それは思います。筋少の曲ってポップだと思ってても、その後ろでひずんだベースが鳴っていますよね。

U:それをいつもテーマにしているんですよ。今回は、一番うまくいったかなと思ってます。

H:僕のライフワークの"切なモノ"には、常に内田の極悪ベースが入っているという(笑)。

●曲を作るときに本城さんの中では、もう内田さんのベースがイメージされているんでしょうね。

H:ありますね。橘高はこんなのを弾くだろうとか、大槻がこう歌って、太田はこうたくだろうとか。

U:極悪も、極悪の仕方が産みの苦しみです(笑)。

H:今回は「おもちゃやめぐり」が新たなチャレンジでしたね。橘高に「これは大槻には歌えん」と最初に言われて、「いや大丈

夫だ」という固い意志のもと、出来上がってみたら大丈夫だった。いつもほどとがっては新しいことではないんですが、筋少の中で新しいことができたかなと。
　ポップス担当として言うのはなんですが、ちょっと今回の僕はポップ過ぎたかもしれない。ポップスものが多くなりすぎちゃって。だから、その分内田がハードロックを作ってくれたんですけどね。
●ハードロックじゃないですけど、「子犬にしてあげる」というかわいい曲は内田さんの曲ですよね。僕はあれを聴いていてT-レックスがカントリー&ウエスタンをやっているような感じに思えたんですよ。
H:ああ、そうとも聴こえますね。僕は「贈る言葉」をイメージしましたけど(笑)。いろんな人にいろんなことを言われるんですよ。ティン・パン・アレイとかね。彼はオリビア・ニュートンジョンの「ジョリーン」だと言い張っているんですよ(笑)。
U:「ジョリーン」とか、60年代安保のころの「いちご白書」のような感じが出せたらいいなと。メロディーにちょっと小椋桂が入っているんですけどね。
H:でも、どこかにあるんですよ。T-レックスとかいろいろ聴いてきたものがやっぱりね。

年内にアルバムをもう1枚？ まだ10枚作れますから大丈夫

●昨日の「筋少リベンジ!および新曲発表会」ツアーの初日は、どんな印象でしたか。
U:一夜明けてみて…、体がくたびれてました(笑)。「あれっ、なんでこんなに肩が痛いんだろう」と思ったら、夕べライブだったと。
H:(笑)うちのバンドは、そういう感想ばっかりです。筋少のライブは特殊ですからね。大槻のライブをやってても、次の日に体が痛いってことはないでしょ(内田に問う)。
U:そんなにないですね。
H:筋少はどういうわけか、翌日になると体のあっちこっちが痛い。
●他で手を抜いているわけじゃないんだけど、やっぱり筋少としてステージに立った瞬間に特別な気合が入ってしまうと。

橘高文彦

H:そうですね。久々の筋少のライブだったんでどうかなと思ってたんですけど、体が勝手に筋少モードに入りますね。
●やはり、ステージに上がるまでは不安があったんですか。
H:考えるとダメですね。曲もそうですけど、新しくやる曲とか、久しぶりにやる曲とかって「忘れちゃってるかもしれないな」と考えると忘れますからね。でも、何よりも昨日の不安は、金髪になって初めてのライブだったこと(笑)。その不安と緊張が異様にありました。
●(笑)昨日は大槻さんに昔のバクチク呼ばわりされてましたよね。
H:本人はタカラヅカっぽいと思っていて、"ジェンヌ"と呼んでほしかったんですけどね(笑)。
●昨日は筋少としては久々ステージだったんですが、何か新しい発見のようなものはありましたか。
U:個人的に筋肉少女帯ではロック色を出していきたいと思っているんですよ。すたれていくロックというものを、出すことのできるいいバンドだと思ってまして、今回のアルバムでも軽快なロックナンバーを書いたわけなんです(笑)。それで、考えてみたら筋少ってライブでも堂々と恥ずかし～いロックなことが平気でできる貴重な存在のバンドなんじゃないかと。そういうバンドにいるというのは、やっぱり楽しいですね。昨日は、それが再確認できました。
H:5月にもツアーをやるんですけど、それもオールスタンディングの会場を多く選んでいるんですよ。それはなぜかというと、かしこまった席でライブをやるとスタンディングの会場と比べて、どうしてもお客さんから与えられるパワーというのが少ないから。昨日は、お客さんのパワーを肌に感じてそれを2倍にして返してあげて、それがまた2倍になって返ってきてという、やりとりを実感しながらやれてよかったです。
●ニューアルバムから4曲やってましたが、「新曲発表会」とツアータイトルにも付いているから、もっと聴けると思ってたんですけど。
U:結構、やっている方だと思いますよ。
M:今回、サービスいいよね。エンディングにテープで1曲流してるしね。
H:実は、7分ぐらいの長い曲をエンディングに流した後、アンコールの声がまたあったらもう一回出るつもりだったんですよ。そのために橘高と二人で特攻服まで自前で作って、頭固めてリーゼントにして、橘高もちゃんとヤンキーの化粧をして、それで楽屋の裏で待機してたら、「客はもう10分の1ぐらいしかいませんよ」だって(笑)。寒～い空気が楽屋に吹いてましたねぇ。
●(笑)それは悲しすぎる。
H:せっかく、みんなを喜ばそうと思って、東京で刺繍(ししゅう)屋さんに「二日で作ってくれ」って電話までして作ってもらったのに、甲斐ないですよ。
M:橘高はしきりに怒ってましたよ。「最近のファンはアンコールのやり方を知らない」って。
U:あんな長い曲かけるからだよ(笑)。
H:よく分かりましたね、うちのお客というのが(笑)。もう、きっとクタクタなんですね。
●じゃあ、演奏した新曲へのお客さんの反応はどうでしたか。
U:新曲なもので割と一生懸命弾いてたんで反応を見てなかったんだけど、「子犬～」は反応が良かったと橘高が言ってました。…頭の「トゥルー・ロマンス」は盛り上がりましたね。前に武道館で1曲目に新曲で「リルカの葬列」を初お披露目でやって、「ちょっと失敗したかな」って(笑)。その時は、頭に新曲をやるのはまずいかなと思ったんですけど、今回はうまくいきました。
●昨日のライブで大槻さんと橘高さんが年内にもう1枚アルバムを出すと言ってましたが…。
H:言ってましたねぇ。恐ろしいことを。
●メンバーの間ではそんな話はないのに、いきなり大槻さんと橘高さんが口走ったんですか。
H:でも、まだ10枚作れますから大丈夫ですよ(笑)。
●じゃあ、期待していいんですね(笑)。
H:きついこと言いますね(笑)。まあ、やれと言われれば。
●最後に、今後の筋肉少女帯というバンドに対する意欲を聞かせて下さい。
H:いつまでも熱くたぎるものがなくならないように、やっていきたいですね。
U:わしは、極悪ベースを弾き続けるのみじゃ(笑)。
H:ベテランバンド頑張ります(笑)。

INTER
TWINZER
VIEW

INTERVIEWED by AKIRA NISHIHARA PHOTO by JUNKO YAMADA
インタビュアー・西原 朗　撮影・山田純子

Jロックシーンに、本当にボーカリストと呼べる声やフィーリングを持った本物の"歌うたい"が何人いるだろうか。今回、話をする機会を得たTWINZERのボーカリスト生沢佑一は、少なくともその中に数えられるべきアーティストだ。キャリアが何年だとか、どんなヒットがあるのかという"ハク"の話ではない。純粋にその質に圧倒的な説得力があるという意味でだ。

野性的な熱さとバッグンの表現力を兼ね備えた彼の歌は、その声が欲しいと、B'z、大黒摩季、WANDS、T-BOLANなど数々のアーティストのレコーディングに参加を要請されることも数え切れず、TWINZER以外のたくさんの作品でもバック・ボーカリストとして、その声の持つ存在感で楽曲を的確にバックアップしながら、自らも主張している姿を聴くことができる。

前作『Feel All Right』から約1年半ぶり、TWINZER充実の3rdアルバム『STRANGE BLUE』の話題を軸に、ボーカリストとして、コンポーザーとして、彼が抱いている音楽への真摯（しんし）な思いをのぞいてみたい。

ボーカリストは声とフィーリング

●僕自身、生沢さんの声にすごく魅力を感じてるんで、まずボーカリスト生沢佑一の話を聞きたいんですよ。生沢さんの声って言葉で表現すると薄っぺらになるんですけど、感情的でソウルのあるすごい声だと思うんです。その声やボーカルのフィーリングっていうのはどこから来たものなんですか。

生沢佑一（以下Ｉ）：ボーカリストとして影響を受けたのは、フリーのポール・ロジャースでしょうね。本当に原点の部分の、例えば小学校の時に聴いていた音楽とかっていうのは根底にあるかもしれないですけど、自分が「ボーカリストとしてやっていきたいな」と思ってコピーをしたのは、ポール・ロジャース。白人のボーカリストでも、わりと黒っぽい人たちが好きだったんですよね。後はウィルソン・ピケットとかの黒人系ソウルシンガーや、CCR（クリーデンス・クリアウォーター・リバイバル）のジョン・フォガティ、それに初期のロッド・スチュワートとかね。

●生沢さんの声って、生まじめな練習だとか、忍耐とか、努力とかいう次元を越えたところにあるんじゃないかって思うんですけど。

Ｉ：（笑）勉強してる人たちにはすごく悪いんですけど、僕の場合、基本的に練習とかってやったことがないんですよ。昔、自分では遊んでる感覚で、1日に何回もライブハウスのステージに立ったりしたぐらいで。

●生まじめに練習する人って、テクニックのレベルはどんどん上がっていくと思うんですけど、フィーリング的にはマイナスの方向にいくような気がします（笑）。

Ｉ：（笑）ギタリストとかプレイヤーっていうのは、ある程度極めていくものだと思う。でもボーカリストってのは、声とフィーリングなんですよね。だから今の日本の音楽シーンにしても、全然ヘタなんだけど声に魅力があるって人が多いじゃないですか。やっぱりフィーリングなんでしょうね。基本的にある程度のレベルっていうのは必要でしょうけど、どんどん感性を高めていくことが重要じゃないかなと思います。

●生沢さんって、マイクの前に立って「今から歌うぞ」っていう時、どういう精神状態なんですか。

Ｉ：無になるというか、無心になって何も考えてないですね。自分ではあまり意識してないけど、周りから見れば本当に同じ人物かというぐらい変わるみたい（笑）。とにかく集中だけして、今までの自分自身をとりあえずこっちに置いておく。後はもう感性任せっていうか（笑）。

●そうやって無になって出てきたものが、納得できない場合もあります？　そんな一種ギャンブル的な面もあるとか…。

Ｉ：それはやっぱりありますよ。僕なんかレコーディングもそうですし、特に音楽を作る時がそうなんですよ。たぶん作曲家としては、練って練ってこれはこういう風に作ってというメロディーの作り方がベストなんだと思うけど、僕の場合はある程度作ったら後は自分のフィーリングを基本にするんですね。

●レコーディングの時って、何回もテイクを取るんですか。

Ｉ：僕はね、基本的に歌は4本しか取らない。1回目2回目で慣らして、3回目4回目で取るんですね。だいたい3、4本目が、その日のベストなんですよ。その時に自分のサイクルとポンって合うんでしょうね。以前にダラダラやったこともあるけど、それに勝るのは自分の中ではなかったし、そう何回もインスピレーションって来るわけじゃないから。

●生沢さんの場合、テイクにOKを出す基準って具体的にありますか。

Ｉ：自分自身でゾクっとする感じってあると思う。それがそのままですね（笑）。

●それはリズムやピッチ（音程）が正確だとかいうレベルではなく、さっきから何度も出ているフィーリングの部分で。

Ｉ：そうですね。フラットしたとか、こっちの方が良かったとかいう本当に細かい部分での違いは、ディレクターの判断に任せますけど、おおざっぱな部分での判断はフィーリングですね。

●細かいことですけど、パンチイン（録音されている音の一部を差し替えたりする編集テクニック）とか嫌いじゃないですか。

Ｉ：基本的にはあんまりしない。よっぽど「このフレーズはこっちの方がいいな」というのがある時ぐらいです。

●理想はそれなんですよね。

Ｉ：だからそれまでの作業は、とてつもなく長い（笑）。作ってる作業の中で、自分の中にイメージが出来てくるというか。

自分が表現したいものを素直に表現したい

●詞やメロディーには、どんな風に感情を込めて歌ってるんですか。

Ｉ：僕の場合、音符というのは紙の中にはないんですよ。自分の頭なのか心なのか分かんないけど、音楽が出来上がった時に自分の中に音符っていうのが自然に出来てるんですね。それを自分の声を通して伝えてるだけで、紙の中で表現してるわけじゃないんですよ。だから一つの音符でも微妙な音程や一拍の取り方がいろいろあって、限りなくニュアンスや歌い方があると思うけど、それは到底紙の中では表現できないと思うんです。だからそれを自分で自動演奏してるような感じでしょうね（笑）。

●じゃあ詞に没頭していく時はどういう感じなんですか。やっぱり作っている段階から感情的に入り込んでいくって感じ？

Ｉ：詞の内容については、自分であまり意識しないようにしてるっていうか、あまり考えてないっていうか（笑）。例えば本番に入る時には、その曲が、楽しいのか、悲しいのか、不幸なのか、そんな全体的なイメージぐらいで。多分作ってる時にそれも感じてるんでしょうね。詞って英語の場合は「I LOVE YOU」とか言ってもすごくサラッといけるけど、日本語で「愛してるよ〜」とか歌うとすっごく臭くなるでしょ（笑）。何か恥ずかしいって言うか（笑）。もっと普通に「愛してるよ」って歌えればいいけどね。あまりにも詞に感情を入れ過ぎると、自分が聞く立場として恥ずかしくなるんで、詞を見てはいるけど、感情はあんまり入れてないですね。

●そういう話を聞いていると、日本語でロックをやるというのもなかなか難しいことですよね。

Ｉ：難しいと言えば難しいんですけど、最近はあんまり気にしなくなりましたね。一時は英語の曲しか知らなくて、日本語の歌詞を乗せようとしたときに、乗り辛いとかすごくギャップがありました。でも今は日本の音楽シーンもそれをうまく改良していってるんで、全然違和感がなくなってきてるって感じですよね。まあ、僕なんかも違った意味で日本語をうまく乗せていきたいなあと。自分の中ではまだまだ完ぺきじゃないけど、どうなるかなっていうことも含めてね。

●じゃあ、全般的に見て、ロックに日本語を乗せるという作業にはまだまだ可能性があると思っているわけですね。

Ｉ：可能性はすごくあると思う。どうしても日本って偏ってしまうけど、もっともっといろんなジャンルや歌い方、メロディーの付け方ってあると思うんですよね。そういう意味ではTWINZERとしても、そういうこ

とをどんどんやって作品を残したいし、表現していきたいなあと思ってるんですけど。TWINZERっていう一つの枠を、ロックバンドとしてあれだこれだと決めつけずに、自分として感じたままに表現したいなというのもあるし。ただこれはセールス的には難しいのかもしれない（笑）。

●日本のロックバンドって、相変わらず「ボーカリストが看板だ」みたいなところがあるんですけど、最近はその歌が看板じゃなくなってるボーカリストが増えているのが気になるんですよ。それはとても悲しいことですよね。そんな中で生沢さんが注目している日本のボーカリストっていますか。

I：う〜ん、まあ昔からボーカリストとしてすごいなあと思うのは井上陽水さんとか。後は……、う〜ん、あんまり日本に目を向けなかったので（笑）。

●この前、新作のアレンジャーである明石昌夫さんと話をした時に、「日本のボーカリスト・ベスト3はだれか」っていう質問をしたんですよ。そしたらB'zの稲葉浩志さん、元バウワウの人見元基さん、そして生沢さんの名前が出たんです。どうです？そんな風に言われるのは（笑）。

I：そりゃまあ、うれしいですけど（笑）。それこそボーカリストとしてやり続けてきた部分でしょうかね（笑）。まあボーカリストだけで本当にやり続けられるっていうのはなかなか少ないでしょうし、たまたま居残ったという感じですが（笑）。

だけど例えばアメリカなんかだと、ちゃんとボーカリストっていうジャンルが存在するじゃないですか。でも日本の場合は演歌という枠の中では歌手っていうかボーカリストっていうのがいると思うけど、ロックやポップスのシーンの中ではなかなかいない。ほとんどの人が作詞・作曲をしないと、ボーカリストというかアーティストとして認められない部分が多々あって。ボーカリストの意識っていうのがちょっと少ない…。全体的な雰囲気とか見た目とか、そっちの方にどうしても行ってしまうと言うかね。少しずつは変わってきてると思うけど、もっと本当のボーカリストというジャンルが確立されてもいいんじゃないかなと。細かいことで言えば、ボーカリストとしてだけで食べていけるようなね（笑）。

●そうですね。でもそういう風潮があるからこそ、曲、演奏は当然のことながら、声でも勝負してるTWINZERのアルバムが、若い人たちに認知されてほしいし、認められるべきだと思うんですけど。

I：その点の一番大きな問題点って、たぶん本人だと思うんですよ。そういう大衆に認められるとか、聴いてほしいってことに対して、本人に関心がなかったというか。それが確実にTWINZERのセールスとかに出てたと思う。でも今少し変わってきたのは、やっぱりある程度のセールスがないと出し続けられないっていうのが分かってきて（笑）。百万、二百万じゃなくても、いいアルバムを作るためにセールスを上げるっていうのは必要だなあということを、少し感じてきましたね（笑）。

●僕もあんまりセールスには関心ないんですけど、単純に「これだけのものを作ってるんだから、もっとたくさんの人に聞いてもらうべきだろう」っていう気持ちがあるし。今回のアルバムなんか特に、ガンと行ってもらいたいものですね（笑）。

I：今回のアルバムは特に、今までのTWINZERとか、生沢佑一とか、これからのTWINZERとか、まあ現在、過去、未来っていう三つの要素をグシャと入れてしまった。だからすごく無理な所もある。例えば知らない人が聴くと「何だ、これ。いろんな音楽のごった煮だな」という人もいると思います。自分としてはいいも悪いもTWINZER以前の生沢佑一、TWINZERとして培ったもの、そしてこれからこうなっていくだろうという生沢佑一のストーリーという感じなんです。だから最後には、「僕はもう一回原点に戻りたい」という感じでレッド・ツェッペリンの「ROCK AND ROLL」をカバーしたんですよ。もちろんそれがオリジナルであっても良かったんですけど、たまたま自分の中で表現したいオリジナルがなかったし、プロとして音楽家として進もうと思ったきっかけの曲だったし。でも自分にはオリジナルよりもオリジナルっぽく出来た自信はあります。

●バラバラって感じはないと思いますよ。生沢さんの声で全部つながってるわけですから。今回は「ROCK AND ROLL」があったり、レゲエタッチの曲もありましたよね。ああいう曲を聴いて、逆に僕は「TWINZERが自由になったのかな」と、すごく好意的に思ってたんですけどね。

I：今回はサブタイトルみたいな感じで”自分への開放“というのが一つあって。自分の中にあった「こうでなけりゃダメだ、ああでなけりゃダメだ」ってものをとっぱらって、何でもかんでもってわけじゃないけど、とりあえず自分で表現したいものを素直に表現したいとすごく感じていたんです。だから今回の作品でも自分の原点に戻ったんですけど、次のアルバムではより本当に自分の好きだったころに戻ってもう一回作るってことをしようと思ってます。

その時感じたことが残っていくロックはまさに生き様

●ニューアルバムが完成した今、前作の『Feel All Right』に対してはどんな気持ちを持っているんですか。

I：あのころはまだ一ボーカリストとして、TWINZERとして、どういう風に動いていくのかがすごく不安定な時だった。ちょうどギタリストがいなくなって、たまたま松川”RAN“敏也と一緒にやろうよっていう話になって。彼とはイメージとか基本的な部分で通じ合えるところがあったので、彼にTWINZERの未来を託したっていうのが自分の中にありました。今思えばあの時は、「もっとこういう風にしなくちゃいけなかったのかな」という反省は確かにありますけど（笑）、あの時点ではあれですごくいいなと思ってましたから。

●じゃあ、今までのTWINZERを否定するなんてことはけっしてない。

I：それは全然ないです。すべきじゃないって言うとおかしいですけど、僕なんか一日一日変わっていくタイプなんですよ。例えば曲を作ってても、次の日になったら「いや、もうちょっとこういう風にしたい」って。それは否定するわけじゃなくて、「こういう風に変えていくと、もっともっと良くなるんじゃないかな」っていうね。だから「これだ！」ってパッと感じるまでは、「こっちかなあ、あっちかなあ」って感じです。まあ、写真と一緒ですね。あの時期は『Feel All Right』が、そして今は『STRANGE BLUE』が一番いいって自分で感じてるし。こういうアルバムって、今しか出せないと思います。次にこんなアルバム作ろうと思っても出来ないと思いますから（笑）。だからまさにロックは生き様って感じでしょうね。その時に感じていることが一つの写真のように残っていくという。

●アレンジャーである明石さんの存在もニューアルバムの出来にかなり影響があったんじゃないですか。

I：そうですね。でも今回も基本的には生沢佑一というアーティストが端を発してこういうことをやりたいと言って、それをアレンジとかサウンド面で明石さんがこういう風にやったらって言ってくれる。明石さんはそんな通訳的な存在だったし、それに細かいことではいろんな分野ごとに、「あっ、これはオレが得意だ」っていろんな人達が集まってくれたから、何だか一つの制作集団みたいでしたね。だから今回のTWINZERからは、プロデュースをみんなでやってるって感じ。

●明石さんもかなりのロックマニアですよね。だからレコーディングで生沢さんとワイワイ盛り上がりながらやってる光景を勝手に想像してしまうんですけど（笑）。

I：（笑）そうですね、本当によく知ってますよね。それと年代的にも同じなんで、聴いてきた音楽とかやってきたことがよく分かってるんで、かゆい所にも手が届くって感じでした（笑）。これはすごくラクですよね。明石さんって「こういう感じ」ってこっちが伝えたらすぐにワァーと作ってくれるけど、僕はほとんど感性優先ですから「このフレーズあんまりよくないなあ」とか、「もっとこういう風にしてほしい」とか言って、どんどんいろんなことが入れ替わっていく。そんな自由ないい感じが大切なんですよね。そういう意味では、彼がいなかったらアルバムは完成しなかったかもしれない。

●今回は、レコーディングが途中で一度中断したという話も聞いたんですけど。その辺りの理由っていうのは？
I：今回は松川が病気で、ギタリストがいなくなったっていう大きな問題があったんですよ。でも、やっぱりTWINZERってギターサウンドなんです。僕が曲をギターで作るっていうのもあるし、僕のイメージの中にギターのリフとかが最初入ってるんですよね。だからそれがないと動くに動けないっていうか、表現したくてもできないっていうか。例えばドラムやベースは打ち込みでもいいけど、やっぱりギターがリフをうまく弾いてくれないとなかなかイメージがわいてこない。中断したっていうのは、それが大きかったですね。それで「明石さん、どうしようか」っていうことになって、彼に最低限のギターのリフを弾いてもらって（笑）。そこからまた復活したんですけどね。
●僕はまた曲を作るという段階で、産みの苦しみがあったのかなと（笑）。
I：（笑）そういう意味でイメージがわいてこなかったっていうのはありますけどね。それで何度も「これでいいのかな、これでいいのかな」っていうのがあって、いろんなことがゴッチャになったんでしょうね。そういう意味では、生みの苦しみなのかもしれない（笑）。
●サウンド面では具体的なテーマってあったんですか。
I：今回は、さっきも話したように本当に今までの良いも悪いも培ってきた物を吐き出したいと思ってたし、とにかく「TWINZERでは出せないのかな」とためていた部分をすべて表現したかったんですよ。飾りすぎて、何が本当なのか自分でも分からなくなってきたっていうのもありましたし、原点にも戻りたかったし。「何でおまえらこんなことやるんだよ」って、いろんな批判とかが起こるのは分かりつつも、これは今しか出せないなというのもあって。だからサウンド的にとか部分的には、具体的なテーマっていうのはなかったですね。
●そういう話を聞いてると、やっぱり作品は生き様なんですね。今の生沢さん自身っていうか。
I：そうですよねぇ（笑）。

今持ってるフィーリングやグループをライブでは出したい

●まだ出来上がったばかりで冷静に聴けないかもしれませんが、アルバムに収録された曲の中にすごく思い入れのある曲ってありますか。例えばすさまじい苦労があったとか。
I：「STRANGE BLUE」っていうタイトル曲があるんですけど、あれは小学生の時に見た空と今見た空に対する感じ方が違うという、自分の感受性みたいなものが一つのテーマなんです。大人になるにつれて、いろんなものに対して感動しなくなった…これが自分にとってはすごく大きな問題だったんですよ。これはやっぱり違うんじゃないかなって。だからそれを音として表現するために"自分で自分のゴールを決める"っていう言葉が、自分の中でガーンガーンと回ってる感じにしたかった。普通に回すとグチャグチャになって分かんなくなるんで、それを一個一個バランス良く並べて、自分の頭の中をグルグル回ってるっていうようにする…それが大変だったんです。表現の仕方というか、音的にどうしたら自分の感じたことが表現できるかなってことがね。今、それを実際に聴いたら、多分、7割の人が気持ち悪くなると思いますけど（笑）。調子がいいときじゃないと絶対に聴けない（笑）。
●僕は「Rock Man」のドラムの音が気に入りましたよ。
I：あれなんかは半分ジョークみたいなもんです。王様じゃないけど、僕の場合はオリジナルとしてジョークとして、ディープパープルとか聴いてたことを自分で表現してみたかった。だからやたら古臭い感じはするんですけど（笑）。
●あの曲の最後のシャウトがありますよね。こういうのって生沢さんしかできないよなって気がして（笑）。
I：そういう意味では天然記念物みたいなもんなんですよ（笑）。確かにシャウトやフエイク（メロディーラインにある程度の装飾的な変化をつけて歌うこと）だけは勉強しろと言われて出来るもんじゃないですからね。そういう意味ではフェイクで分かりますよね、積んできたキャリアなり、好きだったことなりが。
●僕は聴いてる人も、そういうことが分かるようになればもっと音楽を楽しめると思うんですけど。
I：そうですよね。特にロックっていうのはフェイクじゃないですか。フェイクとギターの鳴りの絶妙なタイミングというか、それがロックの基本になってると思うんですよ。
●こういうアルバムを聴くと、ライブを見せないわけにはいかないだろうと思うんですけどね（笑）。
I：そうですね（笑）。僕が3年も4年もライブをやってないっていうのは、珍しいことなんですよ。でも、それまでずっとライブをやってきたんで、やっぱり自分の中にある程度のプライドがあって、中途半端なものは見せられないっていうのがありますしね。だから本当にこれでいけるなっていう、自分の自覚や自信を持てるまでなかなか踏ん切れなかった。だけど今回このアルバムが出来て「これだったらライブをやってもいいかな」って感じになったんで、「じゃあ、さっそくやっていこう」と（笑）。そんなに最初からすごいのは出来ないかもしれないし、あとちょっとライブから遠ざかってたっていうのもありますから、これをきっかけにリハビリって感じです（笑）。
●ライブに対するイメージって具体的にありますか。
I：もうインディーズのころやってたように、普通に。今はわりとコンピューターを使ったりしてますけど、極力それは避けたいなあと思ってます。もしかしたらこけるかもしれないけど、自分たちが今持ってるフィーリング、今しか出せないグループっていうものを出したいんですね。まあ、これは当たり前で、基本なんですけど（笑）。とにかくあんまり小細工しないように（笑）。
●その予告みたいな形でアコースティックのイベントがありますね。これは一人で？
I：もう一人ギターかベースぐらいを入れたいと思ってるんですけど。基本はさっき話した原点に戻るって感じなんで、まずは一人から発生したいなって。
●生沢さんの生のシャウトが聴きたかったら、とりあえずそれを見に行けけと。
I：（笑）それでも十分雰囲気は、感じてもらえると思うんですけどね。
●本格的なライブも期待してますね（笑）。

EVENT SCHEDULE

3月31日　タワーレコード心斎橋店
（スペシャルゲスト・明石昌夫）

4月9日　タワーレコード福岡店

S E L E C T E D A R T I S T S

ICE、Eins:Vier、ACTION、THE YELLOW MONKEY、生沢佑一、石田長生、忌野清志郎、Valentine D.C.、X JAPAN、大黒摩季、奥田民生、小沢健二、ORIGINAL LOVE、GARGOYLE、甲斐よしひろ、筋肉少女帯、久保田利伸、栗林誠一郎、GLAY、CRAZE、黒夢、QUNCHÕ、幻覚アレルギー、cornelius、米米CLUB、近藤房之助、ZARD、斉藤和義、坂本龍一、サザンオールスターズ、佐野元春、ZYYG、シーナ&ザ・ロケッツ、sheen、シェラザード、塩次伸二、SION、SIAM SHADE、JUDY AND MARY、JUN SKY WALKER (S)、少年ナイフ、SUPER JUNKY MONKEY、THE STREET BEATS、SPAED、SLY、妹尾隆一郎、ソウル・フラワー・ユニオン、Char、CHAGE&ASKA、Chap Chimes、CHARA、D.T.R、DEEP、T-BOLAN、DEEN、DER ZIBET、DOG FIGHT、TOMOVSKY、DREAMS COME TRUE、永井隆、長渕剛、nuvɔ:gu、NOKKO、PERSONZ、HYPERM∀NIA、BOW WOW、BUCK-TICK、浜田省吾、浜田麻里、PAMELAH、B'z、PIZZICATO FIVE、BIG LIFE、氷室京介、FEEL SO BAD、FIX、BLOODY IMITATION SOCIETY、BLANKEY JET CITY、布袋寅泰、松任谷由実、THE MAD CAPSULE MARKET'S、MANISH、Mr.Children、media youth、modern grey、THE MODS、矢沢永吉、山岸潤史、憂歌団、LOUDNESS、RUFFIANS、LAUGHIN' NOSE、L'Arc~en~Ciel、LUNA SEA、渡辺美里、WANDS

（ニュースは96年3月現在）

No.1

Artist : ICE

1 ICE

ニューアルバム『We're In The Mood』を引っ提げて、4月5日仙台イズミティ21、7日札幌ファクトリーホール、11日名古屋ダイアモンドホール、12日福岡スカラエスパシオ、15日大阪IMPホール、17日東京中野サンプラザでライブを行う。最終日の17日には、カメリアダイアモンドのCMソングとしてオンエア中の「GET DOWN,GET DOWN,GET DOWN」がアルバムよりシングルカット。カップリングには新曲が収録される予定だ。

No.2

Artist : Eins:Vier

2 Eins:Vier

4月22日にミニアルバム『SONG REMAINS THE SAME』をリリース。4月26日札幌ペニーレイン24からはツアーもスタートする。4月29日名古屋ダイアモンドホール、5月1日大阪メルパルクホール、9日東京日本青年館。即日ソールドアウトとなった大阪と東京は、それぞれ5月2日に新大阪メルパルクホール、10日に日本青年館の追加公演が決定している。5月12日ミュージックランドKEY渋谷店、26日三鷹楽器本店ではサイン会も開催。また、Kiss-FM「MIDNIGHT KISS PARTⅡ〜SING YOUR LIFE〜」(月曜・深夜1:00〜)にはレギュラーパーソナリティーとして出演中だ。

No.3

Artist : ACTION

3 ACTION

未定。

No.4

Artist : THE YELLOW MONKEY

4 THE YELLOW MONKEY

3月30日にビデオクリップ集「CLIPS」をリリース。3カ月にわたるコンサートツアーは、5月17日埼玉戸田市文化会館、19日鹿児島市民文化ホール、20日宮崎市民会館、21日熊本市民会館、23日長崎市公会堂、24日山口スターピアくだまつ、26日神奈川県民ホール、27日市川市文化会館、29日神戸国際会館ハーバーランドプラザホール、31日四日市市文化会館、6月1日岐阜長良川国際会議場、3日守山市民ホール、4日京都会館、6日群馬県民会館、7日新潟県民会館、9日石川厚生年金会館、11日宇都宮市文化会館、12日郡山市民文化センター、15日福岡サンパレス、18日山形県民会館、19日秋田県民会館、21日岩手県民会館、23日旭川市民文化会館、24日北海道厚生年金会館、26日仙台サンプラザホール他。

No.5

Artist : 生沢佑一

5 生沢佑一

TWINZERのシングル「HOT TIME」とアルバム『STRANGE BLUE』をリリース。現在は、キャンペーンで全国を回っている。大阪では、3月28日にタワーレコード梅田店でのFM大阪「HEAVEN'S RADIOスペシャル」に生出演。また、3月31日にはタワーレコード心斎橋店でスペシャルゲストに明石昌夫を迎えてのミニライブも行われる。4月9日にはタワーレコード福岡店でも同様のイベントがあり、アルバム収録の「ROCK AND ROLL」など彼の迫力ある歌声が間近で見れそうだ。

No.6

Artist : 石田長生

6 石田長生

3月29〜31日神戸チキンジョージで、劇団リリパット・アーミー第29回公演「レッドネックブルース」(音楽劇)に出演。4月6日は、バナナホールで行われる友人ベーシスト天野翔のユニット「天西ブルースライン」のCD発売記念ライブにゲストとして、7・21日は『春一番バナナホール編』に出演だ。4月12日は神戸チキンジョージで行われるジョニー吉長の2DAYSライブに加部正義とゲスト参加。4月29・30日は京都RAGの15周年イベント"東原力哉十五夜音語り"の2日間に出演。29日はゲストにエンドウミチロウや古村敏比呂が、30日には坂田明をボスとするひかり137号を迎え、京都の夜を熱くする。

No.7

Artist : 忌野清志郎

7 忌野清志郎

快調に進んできた『TOUR 1996 リトル☆スクリーミング☆レビュー』もいよいよ終盤に突入。3月29日クラブチッタ川崎、4月3日CLUB JAVY沖縄、5日宮崎イベントホール、6日大分トップス、8日長崎NIB出島、10日大阪IMPホール、ファイナルは追加公演でもある15日の中野サンプラザだ。4月24日には、ニューシングル「世界中の人に自慢したいよ」もリリース。ライブでも聴けるかも!?

No.8

Artist : Valentine D.C.

8 Valentine D.C.

新作『BRAND V.D.C.』の曲を中心に構成された『BRAND V.D.C. TOUR』。残すは、3月29日市川CLUB GIO、4月5日京都ミューズホール、6日名古屋クラブクアトロ、14日東京オン・エア・ウエストの4カ所だ。メンバー全員がMAC(パソコンのマッキントッシュ)を所有していて、MAC三昧な生活を送っている彼ら。自称"オタクバンド"らしいが、そのコンピューター技術がバンドの音に生かされているかどうかは不明である…。

No.9

Artist : X JAPAN

9 X JAPAN

圧倒的なステージで観客を魅了したコンサートツアー『DAHLIA TOUR 1995-1996』も、3月27・28日の横浜アリーナでファイナルを迎える。新曲「DAHLIA」も絶好調だ。ライブ終了後は、年内リリースに向けて再びレコーディングに戻る。あと少し待とう!

No.10

Artist : 大黒摩季

10 大黒摩季

ニューシングル「あぁ」をリリース。FMノースウエーブでは「ナチュラルウーマン」がオンエアされている。彼女のDJと選曲によるこの番組、地元では大好評で知らなかった人は要チェックだ。

No.11

Artist：奥田民生

11 奥田民生

大規模なツアー『イージューライダー』が順調にスタートした。3月28・29日渋谷公会堂、4月7日アクトシティ浜松、9・10日名古屋市民会館、12日グリーンホール相模大野、15日大分文化会館、16日熊本市民会館、17日長崎市公会堂、19日鹿児島市民文化ホール、22・23日北海道厚生年金会館、5月1・2日福岡サンパレス、4日鳥取県民会館、6日香川県民ホール、8・9日広島厚生年金会館、11日倉敷市民会館、12日愛媛県民文化会館、14日静岡市民文化会館、20日京都会館、21日神戸国際ハーバーランドプラザ、23・24日大阪厚生年金会館、28日宇都宮文化会館、30日大宮ソニックシティ他。

No.12

Artist：小沢健二

12 小沢健二

全国すべてがソールドアウトとなった1996コンサートツアー『レビュー96～ダイヤモンド組曲・甘夏組曲・サファリ98』もいよいよ3月26・27日福岡国際センター、30・31日日本武道館でファイナル。リリースが待たれているアルバム&シングルは、ツアー後の4月よりレコーディングが開始される予定だ。

No.13

Artist：ORIGINAL LOVE

13 ORIGINAL LOVE

新曲のレコーディング中。オリジナル・ラヴ史上最大のヒットソングになったシングル「プライマル」に続く楽曲が、続々と生まれている様子。早く聴きたい！

No.14

Artist：GARGOYLE

14 GARGOYLE

ライブツアーを展開中。3月28日長野J、30日高岡もみの木ハウス、31日金沢バンバンV4、4月4日熊谷VOGUE、6日新潟O-DO、9・10日札幌メッセホール、13日仙台バードランド、16日市川クラブGｰD、17日横浜7thアベニュー、19日名古屋クラブクアトロ、21日神戸チキンジョージ、24日高知キャラバンサライ、25日松山サロンキティ、27日大分徒楽夢TOP'S、28日熊本ジャンゴ、29日福岡DRUMBe-1、5月3日大阪[illegible]ーホール、4日京都ミューズホール、7日岡山ペパーランド、8日広島ネオポリスホール、ファイナルは5月12日東京日清パワーステーションだ。

No.15

Artist： 甲斐よしひろ

15 甲斐よしひろ

3月27日の仙台ビーブベースメントシアターで、ツアー『オルタネイティブ スター☆セット「GUTS」』もファイナルを迎えホッとひと息。今後は、4月から5月にかけて次回レコーディングの創作に入る。また、昨年好評だったライブ『ロッキュメントⅡ』が6月28・29・30日、7月・12・13・14日に東京日清パワーステーションで決定！ 彼ならではの、ストレートでクオリティーの高いロックを聴かせてくれる。

No.16

Artist :筋肉少女帯

16 筋肉少女帯

5月3日新宿リキッドルームから『ステーシーの美術TOUR』がスタート。ニューシングル「トゥルー・ロマンス」、アルバム『ステーシーの美術』を聴いて出かけよう。日程は5月4日大宮市民会館、8日福岡スカラエスパシオ、9日広島アステールプラザ、11日名古屋ダイヤモンドホール、13日大阪メルパルクホール、21日仙台青年文化センター、23日札幌ファクトリー、29日東京ブリッツ。また、「ノホホン日記」「ボクはこんなことを考えている」「のほほんだけじゃダメかしら？」（4月26日発売）など、大槻ケンヂの単行本が続々と出版されている。

No.17

Artist：久保田利伸

17 久保田利伸

4月15日にスタートするフジテレビ系ドラマ「ロングバケーション」（毎週月曜・21：00～）の主題歌として、新曲「LA・LA・LA LOVESONG」がオンエアされる。話題のドラマであると共に、この曲にはスーパーモデルのナオミ・キャンベルが参加していて、注目を集めること間違いなし。リリースは5月13日だ。

No.18

Artist：栗林誠一郎

18 栗林誠一郎

引き続き楽曲制作を行っている。その中で、昨年末「クリスマス・タイム」が話題になったBarbierのニューシングルの作曲も手掛けている。この曲は、4月より『J-ROCK ARTIST BEST 50』のエンディングテーマとしてオンエアされる。

No.19

Artist：GLAY

19 GLAY

現在進行中のツアー『BEAT out! '96』も3月27日仙台市民会館、29日札幌市民会館の2カ所を残すのみ。5月には『VIDEO GLAY 2』が発売予定で、またまた話題を集めそうだ。

No.20

Artist：CRAZE

20 CRAZE

東名阪ライブ『UP COMIN' CRAZY DAYS』も大盛況のうちに終了。現在はレコーディングの準備中だ。残念ながら、4月5日発売予定だったビデオ『CRAZE FILM CUSTOMIZE』が4月24日に発売延期になった。もうしばらくガマン！

No.21

Artist : 黒夢

21 黒夢

2月にリリースされた「SEE YOU」は、オリコン初登場5位！ 4月26日にはシングル「ピストル」、6月上旬にはアルバム（仮タイトルは『フェイクスター』）をリリース予定。現在は、快調にレコーディングが進行中だ。

No.22

Artist : QUNCHÕ

22 QUNCHÕ

引き続き、L.A.にてレコーディングを行っている。

No.23

Artist : 幻覚アレルギー

23 幻覚アレルギー

展開中のツアー『BOLLOCKS TO EVERYONE 1996 TOUR』もいよいよファイナル。4月4日名古屋クラブクアトロ、5日大阪ウォーホール、8日東京日清パワーステーションの3日間を残すばかりだ。このライブには、新作『「D」のススメ』にも参加したD.I.Eのゲスト出演が決定。より充実した新作のライブテイクが楽しめるはずだ。

No.24

Artist : cornelius

24 cornelius

引き続きオフ・FM802でオンエア中のラジオレギュラー番組「ラブ・オーバータイム」（月曜・深夜2：00～）で、彼の最新情報をチェック。

No.25

Artist : 米米CLUB

25 米米CLUB

先日リリースしたニューシングル「STYLISH WOMAN」に続いて、3月21日にニューアルバム『H₂O』を、4月1日に前回のツアービデオ『OPERA BLUE』を発売。リリースラッシュにファンはうれしい悲鳴を上げそうだ。ホーンセクションBIG HORNS BEEのツアー『FRIDAY NIGHT SPECIAL '96 "BHB FUNK LOVE"』も好評展開中で、3月29日福岡イムズホール、4月12日東京日清パワーステーション、26日大阪ウォーホール、5月10日新宿リキッドルームで行われる。

No.26

Artist : 近藤房之助

26 近藤房之助

引き続きロンドンにてTHE GRUB STREET BANDのレコーディングを、前作と同じくサウンドプロデュースのアレステッド・キャビン・エンジニアのフィル・ブラウンらと行っている。4月末には帰国して、夏前にはリリースの予定だ。

No.27

Artist : ZARD

27 ZARD

シングル「マイフレンド」が好評。カップリング曲「目覚めた朝は…」は、エッジの利いたギターが印象的なロックナンバーだが、坂井泉水がロックへの興味を持つきっかけとなったのは、彼女がクラシックピアノを習っていたところに、クィーンの「ボヘミアン・ラプソディー」を聴いて、そのクラシカルな要素とロックの見事な融合に引かれたからだそうだ。

No.28

Artist : 斉藤和義

28 斉藤和義

ニューアルバム『FIRE DOG』が絶好調。それに伴いまだ忙しい彼は、3月中旬まで全国キャンペーンを行い、後半はコンサートツアーのリハーサルに集中した。ライブツアー「お待ちなさい」は、4月5日福岡クロッシングホール、6日広島南区民文化センター、8日大阪厚生年金会館、9日名古屋ダイアモンドホール。18日札幌サンプラザホール、22日仙台市民会館、23日新宿厚生年金会館。大阪は即日ソールドアウトで追加公演も検討中だ。調子の悪い彼の車は、周りから非難の嵐。「買いかえなよ」「もうダメだよ」と言われてもかたくなな姿勢は崩さないようである。一応車は、ベンツ系のようだが。

No.29

Artist : 坂本龍一

29 坂本龍一

トリオ編成のアルバムを続けて制作中。バイオリンはエバートン・ネルソン、チェロはジャック・モーレンバウム、そしてピアノが坂本龍一で、仕上がりが楽しみだ。

No.30

Artist : サザンオールスターズ

30 サザンオールスターズ

久しぶりに、メンバー全員によるキリンラガービールのCM出演が決定。TVでは元気な顔と共に、新曲も聴ける。現在メンバーは、引き続きレコーディング中だ。

No.31

Artist：佐野元春

31 佐野元春

3月からニューアルバムの制作に入っている。先日終了したコンサートツアーの成果も反映されているであろう待望の新作。完成が待ち遠しい。

No.32

Artist： ZYYG

32 ZYYG

ニューアルバム『Noizy Beat』をリリース。そしてライブが4月4日横浜CLUB24、6日市川CLUBGIO、13日前橋club FLEEZと続く。ブリティッシュビートのテイストを感じさせる彼らだが、意外にもボーカルの高山はARB、THE MODS、シーナ&ザ・ロケッツなど、日本のいわゆるめんたいロックも聴いていたとのこと。ライブではそのARBのカバーも演奏されるらしい。

No.33

Artist：シーナ&ザ・ロケッツ

33 シーナ&ザ・ロケッツ

現在、レコーディングを続行中。5月4日には、大阪服部緑地野外音楽堂にて「春一番」コンサートにシーナと鮎川誠が出演する。また、鮎川誠がインターネットのホームページ『ROKKET WEB』を開設した。URL(アドレス)は、http://www.wellmet.or.jp/~rokket/。一度アクセスしてみよう。

No.34

Artist：sheen

34 sheen

4月2日の大阪バナナホールの他にも神戸や京都でのライブを検討中。現在は、夏ごろに予定しているアルバム制作と並行して、ライブツアーのイメージ作りをしている毎日。思いっ切り踊れるライブになりそうだ。最近TATSUYAのお気に入りのCDは、アウト・オブ・マイ・ヘアーの『ドロップ・ザ・ループ』。UKシーンに突然現れたグラムロックアーティストだ。

待望のオフィシャルファンクラブ『Smilly commune(スマイリーコミューン)』を発足。詳細は、03-5465-7733まで。

No.35

Artist：シェラザード

35 シェラザード

未定

No.36

Artist：塩次伸二

36 塩次伸二

4月12日、26〜28日に高円寺JIROKICHIでライブを行う。26〜28日のライブはレコーディングされ、夏ごろにリリースの予定だ。当日はベースのポール・ジャクソン、ピアノ本田竹広らとブルースセッションを繰り広げる。

No.37

Artist：SION

37 SION

5月にアコースティックライブツアーを予定している。詳細発表をお楽しみに!

No.38

Artist：SIAM SHADE

38 SIAM SHADE

各地でチケットがソールドアウト状態のツアー『スーパーKAZUMA ウルトラ博士の大冒険'96』も3月30・31日、4月1日東京日清パワーステーションを残すのみ。そこで5月25日に日比谷野外音楽堂での再追加公演が決定した。グングン勢いをつけて怒とうの勢いで走っていく彼ら。うかうかしていると、置いてきぼりを食らいそう!

No.39

Artist：JUDY AND MARY

39 JUDY AND MARY

1月から展開してきた『MIRACLE NIGHT DIVING TOUR』も、3月29日那覇市民会館で無事終了。4月からは、2カ月に渡る初めての長期休暇に入る。さみしい人は、シングル「そばかす」で元気を出そう!夏ごろには、3月13・14日の日本武道館でのライブがビデオになるかも!?

No.40

Artist： JUN SKY WALKER(S)

40 JUN SKY WALKER(S)

レコーディングも終了間近。後はリリースを待つのみだ。

41 少年ナイフ
6月に発売予定のシングルが完成間近。アルバムの制作のための準備も順調に進んでいる。

No.41

Artist：少年ナイフ

42 SUPER JUNKY MONKEY
いよいよ4月12日をニューアルバム『地球寄生人／PARASITIC PEOPLE』とライブビデオ『HOLY MOTHER OF MEATLOAF Vol.2 5/14/'95』をリリース。4月6日三軒茶屋HEAVEN'S DOOR、10日渋谷クラブクアトロ、21日新宿リキッドルーム。5月8日盛岡劇場からは、ニューアルバム発売記念ツアーがスタート。5月9日仙台ビーブベースメントシアター、11日新宿リキッドルーム、13日新潟O-DO、14日金沢VANVANV4、19日名古屋クラブクアトロ、20日岡山ペパーランド、22日博多Be-1、23日熊本DJUNGO、25日松山サロンキティ、29日大阪クラブクアトロ他。

No.42

Artist：SUPER JUNKY MONKEY

43 THE STREET BEATS
先日、シングル『GOOD HEART,BIG HEART』に続いてニューアルバム『LOVE,LIFE,ALIVE』をリリースした。4月からは広島FMでのレギュラー番組『週感H.P.～ØKIのCLUB THE RADIO BEATS～』もスタート。4月14日熊谷VOGUEからはツアーも始まる。4月15日新潟O-DO、27日市川CLUB GIO、28日横浜CLUB24、5月10日京都ミューズホール、11日神戸チキンジョージ、13日松山サロンキティ、15・16日広島BAD LANDS、18・19日福岡Be-1、28日札幌ベッシーホール、30日仙台ヤマハプランズ6Fホール、6月7日名古屋クラブクアトロ、8日大阪ウォーホール、21日東京日清パワーステーション。

No.43

Artist：THE STREET BEATS

44 SPAED
ニューシングル「LED MOON」。この曲はボーカルの片山景詞が車で走っている時に見た赤い月（RED MOON）に自らが引き込まれそうであったことにインスパイアされた曲である。現在は引き続きアルバムのレコーディング中。片山をはじめ、メンバー全員が持ち寄る曲は、バラードからブリティッシュテイストの曲まで様々で、夏前の完成を目指している。

No.44

Artist：SPAED

45 SLY
夏ごろリリース予定の3rdアルバムをL.A.にてレコーディング中。新作は今までよりもアグレッシブでプログレッシブな作品になりそうだ。アルバムのリリースに先駆けて、95年のアメリカでのライブを含む、昨年行われたライブツアーのビデオも6月ごろ発売になる。

No.45

Artist：SLY

46 妹尾隆一郎
3月29日京都ラグ、30・31日金沢にて元めんたんぴんの飛田一男とのセッション、4月2日神戸楽屋、6日東中野キングビー（ローラーコースター）、14日大阪震災支援ライブ、18日下北沢CLUB251、23日高円寺JIROKICHI（ローラーコースター）に出演する。

No.46

Artist：妹尾隆一郎

47 ソウル・フラワー・ユニオン
3月のライブを大盛況のうちに終え、現在はキューンソニーにおける2枚のアルバムを基にしたベスト盤（?）を制作中。6月1日発売予定のこの作品の仮タイトルは『ゴースト・ヒッツ』。リミックス3曲、未発表曲2曲、完全再レコーディング曲1曲を含む企画盤だ。

No.47

Artist：ソウル・フラワー・ユニオン

48 Char
昨年より創作活動を行ってきたが、ついに7月発売予定のPSYCHEDELIXのシングルのレコーディングに突入。また、2月に発売されたオムニバスアルバム『江戸屋百歌撰 子 1996／NEZUMI』の参加ミュージシャンによるライブに出演する『Lightning Blues Guitar Fes』と題したライブは、5月31日大阪厚生年金会館（近藤房之助、山岸潤史、石田長生他）、6月16日日比谷野外音楽堂（仲井戸麗市、近藤房之助、山岸潤史、石田長生、ICHIRO他）。『Live Lightning Blues Guitar』と題したライブは、6月7日名古屋ダイアモンドホール（近藤房之助、山岸潤史、石田長生他）で。Charと共に熟練のミュージシャンたちが、熱いライブを見せつけてくれる。

No.48

Artist：Char

49 CHAGE&ASKA
3月21日に、ビデオ『CHAGE&ASKA ASIAN TOUR IN TAIPEI』をリリースした。このビデオには、昨年11月に台湾で行われたステージが2DAYS収録され、東南アジアで大人気の楽曲「男と女」「SAY YES」も演奏されている。台北史上最大の4万人を動員したライブビデオは、画面から飛び出しそうな勢いが伝わってくるはずだ。

No.49

Artist：CHAGE&ASKA

50 Chap Chimes
曲作り、ネタ仕込み中。最近ライブでは、サポートメンバーがどんどん増えている。サックス、パーカッションなど、彼らの音もどんどん広がっていきそうだ。

No.50

Artist：Chap Chimes

51 CHARA
岩井俊二監督の映画の撮影に入っている。

52 D.T.R
未定。

53 DEEP
創作期間中。現在メンバーはミーティングすら珍しい状態で、個々に楽曲を絞り出しているようだ。

54 T-BOLAN
ニューシングル「Be Myself / Heart of Gold 1996」をリリース。共にテレビ朝日系「燃えろアトランタ王」のテーマソングとしてオンエアされている。「Be Myself」は作曲がボーカルの森友嵐士とギターの五味孝氏の共作による、シンプルなロックンロールナンバー。両A面として、ライブではラストに演奏され、多くのファンの心に焼き付いている名曲「Heart of Gold 1996」が新たなアレンジで収録されている。

55 DEEN
4月15日にニューシングル「ひとりじゃない」をリリースする。フジテレビ系アニメ「ドラゴンボールGT」のエンディングでも流れているこの曲は、彼ららしい、さわやかな中にもボトルネックギターがさえるアメリカンテイストのナンバーだ。現在は引き続きアルバムのレコーディング中。また3月28日タワーレコード梅田店でのFM大阪「HEAVEN'S RADIOスペシャル」にボーカルの池森秀一が生出演する。

56 DER ZIBET
残念ながら4月に予定されていたツアー『アリとキリギリス』がベースHALの急病のため中止になった。しばらくは、先日発売されたばかりのベストアルバム『アリ』&新作『キリギリス』で彼らの世界をたん能しよう。現在ISSAYは、全国でトークライブ『MEET THE キリギリス』を展開中。3月27日名古屋冨士地ビル（18：00〜）、4月3日福岡ソシオデック（18：00〜）、4日大阪アクセス梅田阪急ナショナルルーム（16：00〜）、7日東京BMGビクター本社B1（14：00〜）。また、5月24〜26日には池袋文化座ル・ビリエにてマイム公演が決定した。HIKARUは、参加しているバンドPUGSが日本コロムビアよりメジャーデビュー決定！　先日シングルをリリースし、4月21日にはアルバムが発表される。

57 DOG FIGHT
良い曲を作るために、日々制作活動に励みいよいよレコーディングに突入。メンバーは毎日リハーサルスタジオにて練習を欠かさず、「早くライブがやりたい」とウズウズしているらしい。

58 トモフスキー
ライブがいよいよスタート！　ニューアルバム『ネガチョフ&ポジコフ』を聴いて、4月18日神戸チキンジョージ、19日大阪クラブクアトロ、21日名古屋クラブクアトロ、27日新宿リキッドルームへ出かけよう。また、現在トモフスキーのビデオを無料レンタル中。「見たい！」と思った人はハガキに住所・氏名・電話番号を書いて、〒107 東京都港区赤坂8-5-26 EPICソニー「TOMOVSKYビデオ見たい」係まで。レンタル期間は1週間。返却送料は自己負担になる。先月お伝えしたインターネットは、もう少し待っていてほしいとのこと！

59 DREAMS COME TRUE
4月1日に8thアルバム『LOVE UNLIMITED』と、ドリカムのベストセレクションが16曲収録されている、映画『7月7日、晴れ』のモーションピクチャーサウンドトラックをリリース。5月からは吉田美和のソロツアーも行われる。

60 永井隆
4月7日に大阪グランカフェにてライブ。引き続きアルバムの制作も行っている。また、4月末から3週間ほどアメリカ・ニューオリンズで、毎年恒例となっているブルースフェスティバルを訪れる予定だ。

61 長渕剛
4月8日より、フジテレビ系TV番組『HEY！HEY！HEY！』のエンディングテーマとして新曲「傷まみれの青春」がオンエア。この曲は4月30日にシングルとしてリリースされる。また、コンサートツアー『ライブ96 家族』が5月25・26日の大阪城ホールよりスタート!! どんなステージを見せてくれるのか今から楽しみだ。

62 ニューヴォーグ
いよいよ『Children Coup d'etat 1996』がスタート。3月29日福岡DRUMBe-1、30日広島ネオポリスホール、4月1日大阪ウォーホール、3日名古屋ダイヤモンドホール、5日仙台ヤマハホール、7日札幌メッセホール、11日新潟O-DO、14日東京オン・エア・イースト。各地で ニューヴォーグの嵐が吹き荒れる。

No.51

Artist : CHARA

No.52

Artist : D.T.R

No.53

Artist : DEEP

No.54

Artist : T-BOLAN

No.55

Artist : DEEN

No.56

Artist : DER ZIBET

No.57

Artist : DOG FIGHT

No.58

Artist : TOMOVSKY

No.59

Artist : DREAMS COME TRUE

No.60

Artist : 永井隆

No.61

Artist : 長渕剛

No.62

Artist : nuvɔ:gu

63 NOKKO

ポップでロックな曲から、NOKKO節が聴ける美しいバラードまで様々な楽曲によって完成しつつあるニューアルバム。レコーディングも順調で、一刻も早く届けられることを願うばかりだ。

64 PERSONZ

4月10日には、初めてライブアルバムをリリース。また、ツアーやアルバム、JILLのソロアルバムに参加していた田中詠司が新ギタリストとして加入。4人でレコーディングされたシングルもそろそろ発売される。4月9日京都ミューズホールからはツアーもスタート。10日神戸チキンジョージ、12日高知キャラバンサライ、21日新潟O-DO、26日東京日清パワーステーション、5月1日仙台ビーブベースメントシアター、8日名古屋ボトムライン、9日大阪ウォーホール、11日広島ネオポリスホール、12日福岡DRUMBe-1、16日横浜CLUB24、18日市川CLUB GIO。

65 ハイパーマニア

メンバーチェンジを行い、ライブ活動を再開！ 4月15日渋谷エッグマン、21日川崎クラブチッタでライブの後は、いよいよ『"Together along"TOUR Vol.1』がスタート。5月1日市川CLUB GIO、2日熊谷VOGUE、5日新潟O-DO、6日横浜7th アベニュー、14日大阪ロケッツ。夏にも再びツアーが予定されていて、今後彼らの活動が充実していくことは間違いない。

66 BOW WOW

引き続き、デモテープを制作中。先月号でビッグニュースの発表の告知があったが、残念ながら来月に持ち越し。2カ月分、首を長くして、覚悟を決めて(?)待っておこう。

67 BUCK-TICK

3月5日都内のスタジオにて、96年第一弾シングルの歌入れが行われた。リリースは5月22日の予定。メンバーは引き続きアルバムのレコーディングに集中し、待望のリリースは6月21日の予定だ。リリース前後には、久しぶりにマスメディアへの登場が活発化しそうで、ファンは元気な姿を見ることができそう。現時点では、シングル&アルバムについての内容的なことは明らかにされていないが、とにかく完成が期待される。

68 浜田省吾

2月にリリースされたビデオ『ROAD OUT "MOVIE"』&CD『ROAD OUT TRACKS』が好評。今後の活動は、現在のところ未定だ。

69 浜田麻里

先日3年ぶりのニューアルバム『Persona』がリリースされたばかり。今後の動きに注目だ！

70 PAMELAH

ボーカルの水原由貴は、ニューシングル「I shall be released」の詞を書く上で、メンバーが演奏しながら口ずさみやすいように「私」という言葉を一切使わずに書き上げたそうだ。現在メンバーは、引き続きセカンドアルバムのレコーディングに入っている。

71 B'z

ニューシングル「ミエナイチカラ～INVISIBLE ONE～/MOVE」をリリース。詞について余り多くを語らないボーカルの稲葉浩志であるが、"前向き"なものを、いつものように自分なりにどういう角度から書こうかということは考えていた」そうだ。そしてついに『LIVE GYM'96 spirit LOOSE』ツアーも始まっている。3月29・30日神戸ワールド記念ホール、4月6・7日アスティとくしま、9・10日愛媛県県民文化会館、17・18日横浜アリーナ、23・24日新潟市産業振興センター、27・28日石川県産業展示館、5月2・3日名古屋レインボーホール、8・9日仙台市体育館、11・12日盛岡アイスアリーナ、18・19・21・22日国立代々木競技場、28・29日大阪城ホール、6月1・2日真駒内アイスアリーナ、11・12日大阪城ホール、15・16日名古屋レインボーホール、20・21日日本武道館、25・26日マリンメッセ福岡、29・30日鹿児島アリーナ、7月5・6日沖縄コンベンションセンター。

72 PIZZICATO FIVE

本人たちが出演している日産ミストラル・キャンペーンソング「ベイビィ・ポータブル・ロック」が先日リリースされた。軽快な楽曲は、春にピッタリ！

73 BIG LIFE

3月31日に渋谷エッグマンでワンマンライブを行う。その後は現在のところ未定だが、サポートメンバーと共に彼ららしいライブを展開していくらしい。

74 氷室京介

ニューアルバム&シングルの海外レコーディング中。順調に進んでいるようで、完成を心待ちにするファンの期待を上回る作品になりそうだ。

No.63

Artist :NOKKO

No.64

Artist : PERSONZ

No.65

Artist : HYPERMΛNIA

No.66

Artist : BOW WOW

No.67

Artist : BUCK-TICK

No.68

Artist : 浜田省吾

No.69

Artist : 浜田麻里

No.70

Artist :PAMELAH

No.71

Artist : B'z

No.72

Artist : PIZZICATO FIVE

No.73

Artist : BIG LIFE

No.74

Artist :氷室京介

75 FEEL SO BAD
ニューシングル「いつも心にFIRE」をリリース。3月30日にはライブシーン、リハーサル、ツアーの移動風景からクリップ。そしてそのメイキングシーンまでまるごとパッケージされたビデオ『ENDORPHINE GROOVE』を発売する。現在メンバーは4月末リリースのアルバムレコーディングも佳境に入り、5月16日福岡DRUMBe-1、18日大阪ウォーホール、25日渋谷オン・エア・イーストでのライブに向けてのリハーサルに突入！

76 FIX
ギターのSHOJIプロデュースによる「アムネジア」のイメージアルバムをリリースした。

77 BLOODY IMITATION SOCIETY
ニューアルバム『LOUD MAN』を引っ提げ4月6日熊谷VOGUEよりツアー開始。8日仙台バードランド、10日札幌カウントアクション、12日新潟O-DO、14日大阪ロケッツ、15日岡山ペパーランド、17日福岡DRUMBe-1、20日名古屋ハートランド、22日渋谷クラブクアトロ。現在各方面で「BAD DICTION」のプロモーションビデオが流れているが、この撮影は超ハードなスケジュールのうえ、ボーカルの窪は人込みの電車やエレベーターで歌わされてふんだりけったり。ビデオでは、そのへんもじっくりチェック！

78 BLANKEY JET CITY
3人それぞれのソロ活動が決定！ 現在はデモテープのレコーディングに入っている。バンドやセッションなどの形態で、ブランキーでは出来ない音楽を聴かせてくれそう。より個性が爆発した、面白い作品を期待しておこう。バンドとしての活動は、夏以降になる予定だ。

79 布袋寅泰
ツアーを展開中。3月29・30日名古屋センチュリーホール、4月3・4日福岡サンパレス、6・7日鹿児島市民文化第1ホール、10・11日宇都宮市文化会館、15日石川県厚生年金会館、19日群馬県民会館、24・25日静岡市民文化会館、30日浜松アクトシティー、5月2・3日大阪厚生年金会館、12・13日仙台サンプラザ、16・17日札幌市民会館、22・23日大阪フェスティバルホール、28・29日福岡サンパレス他。

80 松任谷由実
各地で大盛況のツアー『KATHMANDU PILGRIM』 今後は、3月29日アスティーとくしま、30日愛媛県民文化会館、4月1日高知県民文化ホール、2日香川県民ホール、4・5日京都会館、7日福井フェニックスプラザ、8日石川厚生年金会館、12日釧路市民文化会館、13日帯広市民文化ホール、16日青森市文化会館、18日鳥取県民文化会館、20日鹿児島市民文化ホール、22日熊本市民会館他。

81 THE MAD CAPSULE MARKET'S
現在まさにツアー中。3月28日福岡クロッシングホール、31日仙台ビーブベースメントシアター、4月2日札幌ペニーレイン24、4日新潟フェイズ、6日名古屋クラブダイアモンドホール、4月7日大阪IMPホール、29・30日東京赤坂ブリッツ。どの会場もオールスタンディングなので、見に行くときは体を張って根性入れてGO!! ツアーではカッコいいTシャツも販売されているから、チェックしてみよう。

82 MANISH
シングル「この一瞬という永遠の中で」リリース後、アルバムリリースに向けレコーディングを引き続き行っている。

83 Mr.Children
大ヒットシングル「名もなき詩」に続いて、4月10日にニューシングル「花～Memento-Mori～」をリリース。このシングルは、1曲入りで500円だ。

84 media youth
ニューシングル「Damageの甘い罠」を4月15日にリリース。この曲は、ゴールデンウィークに東宝洋画系にてロードショーの「ルパンⅢ世 DEAD or ALIVE」の主題歌だ。東京では、舞台挨拶も予定されている。

85 modern grey
彼らだけの世界が楽しめるニューアルバム『GREEN』の曲を中心に構成されたツアーが、4月12日福岡DRUMBe-1から始まる。4月13日熊本ジャンゴ、21日札幌メッセホール、23日仙台ビーブベースメントシアター、25日金沢AZホール、27日大阪クラブクアトロ、28日名古屋クラブクアトロ、5月17日渋谷オン・エア・イースト。1月に彼らのライブを楽しめなかった人も、やみつきになった人もみんなで行こう！

86 THE MODS
7月にリリース予定のニューアルバムのレコーディングが着々と進行中。5月4日名古屋ダイアモンドホールからはツアー『LIVE ESPECIAL 5』がスタートする。5月6日神戸チキンジョージ、7日福岡クロッシングホール、10日大阪ウォーホール、12日東京赤坂ブリッツ。全会場オールスタンディングのスペシャルツアーは、一見の価値あり！

No.90

Artist : LOUDNESS

No.89

Artist : 憂歌団

No.88

Artist : 山岸潤史

No.87

Artist : 矢沢永吉

No.94

Artist : LUNA SEA

No.93

Artist : L'Arc~en~Ciel

No.92

Artist : LAUGHIN' NOSE

No.91

Artist : RUFFIANS

and more
and more....

No.96

Artist : WANDS

No.95

Artist : 渡辺美里

87 矢沢永吉
4月10・11・13・14日の4日間、日本のアーティストとして初の公開レコーディングを行う。これは今年のニューアルバム収録を、公開でやってしまうという試み。この模様は最終日の4月14日にWOWOWで一部中継されるとのことだ。

88 山岸潤史
引き続きニューオリンズにて活動。4月末から開催される、現地では恒例のブルースフェスティバルにも出演の予定。また、2月にリリースされたオムニバスアルバム『江戸屋百歌撰』にも参加している。

89 憂歌団
4月16日に東京玉川高島屋アレーナホール、29日に京都磔磔でライブを行う。

90 LOUDNESS
高崎晃がいよいよソロアルバムのレコーディングに入った。先月号のニュースで伝えた、6月20日発売のプレイステーション対応ゲームソフト「カート・グランプリ~アイルトン・セナ メモリアル・ソフト~」の音楽制作は、順調に完了。いかにもラウドネスらしい曲からバラード曲、インスト曲など、そこでしか聴けない楽曲が満載されているらしい。

91 RUFFIANS
5月9日に十三ファンダンゴでのライブが決定。

92 LAUGHIN' NOSE
4月1日大阪QOO、2日東加古川STAR DANCE、4日京都ミューズホール、5日大阪ベイサイドジェニー『RHYTHM,RHYME & CORE Vol.4』にてライブを行う。5月から6月にかけては、再び全国ツアーを展開する予定だ。

93 L'Arc~en~Ciel
現在、新曲のリハーサル中。5月には「クリスマス・ボックス・セット」の写真集のみを発売する。ライブ・ドキュメント写真集「heavenly photographs」、ライブビデオ「heavenly~films~」も好評発売中だ。そして、いよいよ全国ツアー『キスミーヘヴンリィ'96』がスタート。4月3日結城市民文化センター、6・7日日比谷野外音楽堂、11日市川市文化会館、14日宮城県民会館、15日秋田市文化会館、17日札幌市民会館、18日旭川市公会堂、23日新潟テルサ、24日金沢市文化ホール、26日大阪厚生年金会館、27日名古屋市公会堂、5月1日京都会館、3日広島アステールプラザ、5日熊本県立劇場、6日鹿児島市民文化ホール、8日福岡市民会館、10日愛媛県民会館、12日岡山市民文化ホール、13日高知県民会館、15日栃木県総合文化センター、16日郡山市民文化センター、21日浦和市文化センター、23日長野県民会館。チケットは君の手元にある?

94 LUNA SEA
ニューアルバムのレコーディングが無事終了。先日リリースされたばかりのシングル「END OF SORROW」も収録されている待望のアルバムのタイトルは『STYLE』に決定。4月22日にリリースされる。

95 渡辺美里
新作のレコーディングもそろそろ終盤。彼女の魅力がいっぱい詰まった充実した作品になりそうだ。

96 WANDS
ニューシングル「WORST CRIME~About a rock star who was a swindler / blind To My Heart」をリリースした。「WORST CRIME」の詞は、ボーカルの上杉がオノ・ヨーコの言葉に刺激を受け、一気に書き上げたものだそう。また、ベストアルバム『SINGLES COLLECTION+6』もリリースされている。未発表曲も含んだ、いわば彼らの記録と言える作品だ。

音楽雑誌用語マニュアル

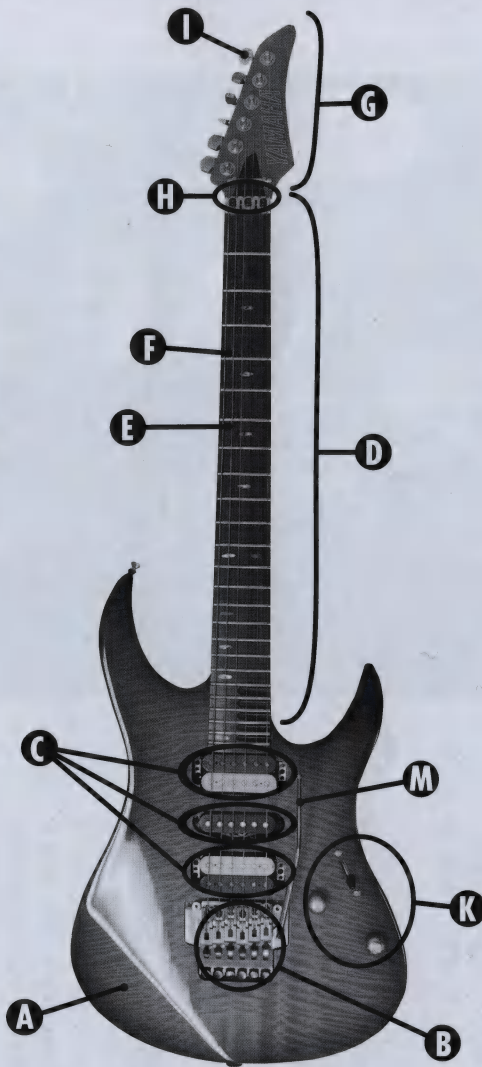
企画・構成・テキスト／ジェイロックマガジン・中伏木 寛（毎日映像音響システム）　イラストレーション／山木俊幸
撮影協力：三木楽器（株）アメリカ村店／（株）エム・バー スタジオ

＊文中カッコ内数字（例 0:00〜）はCDプレイヤーのタイムカウンター数。

音楽雑誌を読んでいるとアーティストのインタビューやライブレポートなどの文中に、日常会話の中では耳慣れない言葉や用語が頻繁に登場してくる。単に知らない英単語だったりする場合もあるが、やはりその大半は音楽用語ではないだろうか？

音楽用語に対しての〝なじみ〟の深さは十人十色。楽器を何年もやっている人と、音楽に興味を持ったばかりの人とでは、知識に圧倒的な違いがあって当然だ。例えば96年2月号の大黒摩季セルフライナーノーツにあった「ディストーションギターにこだわった」という言葉に、「ディストーションギターって何？」や「ディストーションギターってどんな音なの？」と思った人もいることだろう。中には「ディストーションギターってどんな形？」とまで考えてしまった人もいるかもしれない。「ディストーションギター」が「ひずんだギターの音」を意味していると分かっている人には何てことない言葉でも、楽器を手にしたことがない人や、まだ音楽知識が浅い人にとっては意味不明な言葉なのだ。また、これを「ひずんだ音の〜」と説明しても、バクチクの「唄」（0:02〜）で左スピーカーからギュギュワ〜ンと聴こえてくるギターの音やワンズの「Same Side」（0:57〜1:05）のギュウィ〜ンと鳴っているギターの音だと分かっている人は少ないのでは？　そして彼、彼女たちは、そんな理解できない言葉が文中に出てくると文章の前後から意味を推測し、音を頭の中で想像（創造？）したり、あるいは意味が分からないまま読み飛ばしてしまっているのだろう。それではライターがライブの状況を熱く解説していても、インタビューでアーティストが素直に語っていても完全には伝わらず、とてももったいない。

…ということで今月号のフィーチャーは音楽雑誌によく登場する「音楽用語」を解説しよう。ただし、ひと言で「音楽用語」といってもかなり奥が深く、基本的な項目だけに絞っても相当な数がある。そこで今回は「音楽用語」の中でも「楽器関係の用語」に着目し、「楽器の各パーツの名称と役割」「周辺機器」「奏法」を取り上げてみた。

楽器の各パーツの名称と役割

ギター、ベース、ドラムの形なら漠然とでも想像できる人は多いだろうが、その楽器の各パーツの名称や役割まではどうだろうか？　96年4月号のグレイのインタビューにあった「ライブでクルクル回って踊っていたTERUが、目を回してドラムのタムとタムの間にひょこんと座った」という言葉に「“タム”ってどの部分？」と思った人もいるはずだ。それでは、せっかくの面白い話も笑えない。まずは、そんな主要楽器の基本的なパーツの名称や役割を説明しよう。

A ボディ

ギターやベースの胴体部分。このパーツ(部分)が弦の振動に与える影響は大きく、材質や形によって音質は全く違ってくる。例えばジュディ・アンド・マリーの恩田快人のベースに使われているマホガニーという材質なら、中低音域がよく伸び、滑らかな音が出るという特徴を持つ。ボディはステージでプレイする時に一番目立つ部分でもあり、オリジナルモデルではアーティストの個性や好みが最も反映されている。同じベースでもラルク・アン・シエルのtetsu、ザ・イエロー・モンキーのHEESEY、黒夢の人時のベースでは形も材質も色も全然違っていて、比較すると面白い。

B ブリッジ

弦の振動をボディに伝えるパーツ。テールピース(ボディの表面に弦を固定する部分)と一体化していたり、各弦の高さが調整できるように工夫されていたり、ギターによってタイプは様々だが、弦の振動に関わるからこそ音質に与える影響は大きい。

エレクトリックベースは弦が太く、張るのに大きな力が必要なため、ギターよりも頑丈なものが取り付けられている。

C ピックアップ

弦の振動を拾って電気信号に変えるマイクのような役割を果たすパーツ。様々なサウンドを作り出す中枢部分で、エレクトリック(電気)楽器の最大の特徴である。

例えばバクチクの今井寿のギターには、ギターシンセサイザー用のピックアップが内蔵され、彼らのサウンドに欠かせないシンセサイザー音をギターでコントロールすることができる。

D ネック

ボディと一体になった音程を決めるパーツ。弦の張力を支える部分でもあるので、丈夫な材質が使われる。形、長さ、厚さ、ボディとのつなぎ方は様々だが、弾き心地に大きな影響を与える部分なので、プレイヤーに合っていることがとても重要。オリジナルモデルを作る時、ネックにこだわるアーティストも多い。また、ダブルネック(ネックが2本)、ルナシーのSUGIZOがステージで使っているトリプルネック(ネックが3本)という特殊なタイプもある。

E フィンガーボード

ネックの上に張り付けられている、フレットが打ち込まれた板。この板のすべり具合も弾き心地を左右する。

F フレット

フィンガーボードに打ち込まれた、音程を決める棒状の金属。ベースにはフレットのないフレットレスタイプもある。

G ヘッド

ネックの先端部分。通常は、ペグが付いていてメーカーロゴや型番が入っている。ヘッドには、弦の張りの強さを調整するために角度や段差が付けられていることが多い。形は各メーカーやモデルによって様々。また、ヘッドのないヘッドレスタイプもある。

H ナット

ヘッドとネックの境目にあるパーツ。表面に一定の間隔で入っている溝によって弦がずれないように支えているため、チューニング(音の調整)の安定度にも大きく影響する。

I ペグ

ネック上に張られた弦の端を固定する糸巻き。弦を巻いたり緩めたりしてチューニングをするため、正確な音程のサウンドを確保するためには欠かせない。

J ピックガード

ピックを使ってギターを弾くときに、ボディが傷つかないようにカバーするパーツ。

K コントロール

ピックアップで弦の振動を信号に変える時のボリューム(音量)、トーン(音質)などを調節するツマミやスイッチのこと。ギターやベースの機種によって、様々な機能が搭載されているものもある。

L ジャック

ピックアップで拾われた電気信号を楽器から外に送り出すために、コード(シールド)を差し込む穴。送り出された音はシールド線を通ってアンプ(音の増幅機)から音になる。

M トレモロ・アーム

ブリッジと一緒になっている音程を変化させるための装置。アームを前後に動かすことで弦を緩めたり引っ張ったりして、急激な音程の変化や音を震わせたりすることができる。

DRUMS

いろんな音のパーツが組み合わされているドラム・セットは、そのパーツの役割によって音質が様々な上に、一つ一つの音の区別が難しい楽器でもある。ここではパーツの解説と合わせて、実際のそれぞれの音を比較的みんなが持っていそうなCDを使って提示してみた。文中では右利きドラムセットについて述べている。

1 バス・ドラム

ドラムセットを真正面から見たときに、真ん中に丸くデーンと構えている大きなドラム。フット・ペダルをバス・ドラムに設置し、それを右足で踏むことによって音が出る。低音でドンドンとまるで地響きのようなその音は、ビートのベースを刻む重要な役割。たまにハードロック系には、バス・ドラムを2個並べる(ツイン・バス)ドラマーもいて(XジャパンのYOSHIKI、ルナシーの真矢など)、より速い連打を豪快に聴かせたりする。

●ラルク・アン・シエル『heavenly』の1曲目「Still I'm With You」(0:02～0:06)、ギターの後にドンドンドンドンと聴こえるのがバスドラム。2曲目「Vivid Colors」(0:02～0:05)のドン、ドンもそう。

2 フット・ペダル

バス・ドラムを足で打つために設置するペダル。ペダルの先にはフェルトなどで出来た"ばち"が付いていて、足で踏むことによって前後に動き打面を打つ。

3 スネア・ドラム

ドラムセットのイスに座った時に左右膝の真ん前にくるドラム。このドラムの裏側にはスナッピーと呼ばれる響き線が付いているので、たたくとパンッパンッという歯切れ良い音が出る(スナッピーを外すと、タム・タムのような音)。役割としてはビートのアクセント的な存在だ。スネアはセットの中で一番回数多くたたくパーツなので、自分の音の個性を最も主張できるドラムでもある。

●ジュディ・アンド・マリー『MIRACLE DIVING』の3曲目「KYOTO」(0:11～0:19)で、ロール(ドラムの奏法参照)しているスネアの音が聴ける。

4 ハイハット

シンバルが2枚組になっていて、左足でペダルを踏んだり離したりして2枚を開閉させる(踏むと閉じる)。通常は踏んだ状態でチキチキチキチキという音を出し、細かいリズムを刻むパーツ。音的には比較的地味な存在なのだが、このハイハットがキメの部分で使われると非常にカッコいい。

●ルナシー『MOTHER』の2曲目「ROSIER」、9曲目「TRUE BLUE」(0:00)はハイハットから始まる。

5 タム・タム

バス・ドラムの上に付いている小さなドラムのこと。ドラマーによって、その並べる数は様々。低音のメロディー部分とも言えるドラムで、一つ一つの大きさの違いで音程も変わる。従ってタム・タムの数が多ければ多いほど、流れるような、滑らかなフレーズをたたける。タム・タムを簡単にタムと呼ぶ人もいる。

●ルナシー『MOTHER』の10曲目「MOTHER」(0:35～0:36、0:56～0:57、1:03～1:04など)では、何度かアクセント的に使われている。

6 フロア・タム

セットに座った時に右側フロアに置かれる、タムの中で最も大きなドラム。音的にはバス・ドラムの次に低い音を出す。あまり頻繁にたたくドラムではないが、バス・ドラムと一緒にたたいてラウドな感じを強調することがある。

●ビーズ『LOOSE』の3曲目「ねがい」(0:25～0:32)でドンドコドンドコと聴こえるのがフロア・タム。

7 ライド・シンバル

シンバルのパーツは、大きく2種類に分けられる。その内、主にリズムを刻むのが、このライド・シンバル。音的にはハイハットよりも響く感じだ。これもタム・タム同様、ドラマーによって使用する数は様々。

●ザ・イエロー・モンキー『FOUR SEASONS』の8曲目「月の夜」(0:00～0:35)でチキチキと細かいリズムを刻んでいるのがライド・シンバルだ。

8 クラッシュ・シンバル

地味なライド・シンバルに対して、こちらは主にアクセントを強調するパーツ。通常シンバルと聴いて想像するバッシャ～ンという音がこれだ。これもドラマーによって使用する数は様々。

●ブランキー・ジェット・シティ『SKUNK』の5曲目「くちづけ」(0:07～0:08)のバッシャ～ンがクラッシュ・シンバル。

9 ドラム・スローン

ドラムをたたく時に座るイス。180度に動く(特殊な場合を除く)ドラマーのために、座るところは円形で360度回転出来るように作られている。また、手足をすべて同時に動かすため身体が不安定になることが多いので、イスを支えるスタンドの部分は重く、しっかり作られているのも特徴。

10 スティック

ドラムをたたくための"ばち"のこと。通常は木製で、たたく方の先端にはチップと呼ばれるものが付いている。チップは木製になっているものの他に、ナイロン製(木製のものに比べてドラムの音がはっきり聴こえる)のものもある。ドラマーにとっては必需品のこのスティック、ライブを観ているとたまに折れて宙を舞っている光景を見るが、それだけ折れやすいので通常は、予備として数本用意しているのが当たり前。

周辺機器

楽器から出される音に何らかの効果(エフェクト)を加えたり、サウンドを形成するのに必要不可欠な楽器以外の機器を紹介しよう。これも数限りなく存在するので、一般的に使用されているものを厳選し解説する。

●コンパクトエフェクター

1 エフェクター

〝効果〟を意味する名称通り、ギターやボーカルなどの原音を異なった音に変化させる機器のことをいう。エフェクターを見た目で分けると、ギタリストがよく足元に置いて足で踏んで操作しているコンパクトタイプのもの、レコーディングやPAでよく使われるラックマウント型(ラックに組み込まれたもの)がある。格好や音の質は違ってもそれぞれ同じような機能を持っており、次のように分類することが出来る。

①響き・奥行・距離・うねり・広がり感(空間・時間制御系)

●リバーブ…風呂場にいるような残響音が得られる効果。

●エコー、ディレイ…〝やまびこ〟のように何回も繰り返して音が返ってくるような効果。

●コーラス…音を微妙にずらした音を重ね立体感を持たせる効果。

●フランジャー…これをかけるとジェット機の上昇音のような〝ジュワ〜〟という音になる。

●フェイザー…音を回転させたり、奥行を持たせる効果。

●ハーモナイザー…原音のピッチ(音程)だけを変えて出力するので、一人でハーモニーを作れたり、微妙な調整をすれば音を厚くすることができる。

〈例〉

◆ディレイ:グレイ『BEAT out!』の9曲目「グロリアス」(0:00〜0:05)のイントロで左右に動くギターのように何度も繰り返し音が返ってくるような効果。

◆フランジャー:ジュディ・アンド・マリー『MIRACLE DIVING』の3曲目「KYOTO」(0:00〜0:10)の〝ジュワ〜ン〟という効果音は、ギターのノイズにフランジャーをかけた音だ。

②音質・高音・中音・低音変化(周波数制御系)

●グラフィック・イコライザー…高音・中音・低音などの音質を、いくつかの周波数に分けて変化調整することができる。

●パラメトリック・イコライザー…高音・中音・低音などの音質を、いくつかの周波数に分けて、どのぐらいブースト(増幅)、カット(減衰)させるか細かく調節することができる。

●ワウ…ギタリストがよく使うエフェクターで、ある周波数にピークを持たせてペダルの踏み方でその周波数が変わり、ギターの音が〝ワウ、ワウ〟と聞こえる効果を出す。

●マルチエフェクター
(フットタイプ)

〈例〉

◆ワウ:ワンズ『PIECE OF MY SOUL』の1曲目「FLOWER」(3:10〜3:31)のギターソロで使われている。

③音圧・迫力・音を伸ばす・つぶす・切る・左右に揺らす(レベル制御系)

●コンプレッサー…大音量と小音量の差を均一化し、ギターのピッキングやカッティングなどのツブをそろえきれいに聴かせる効果。

●リミッター…大きな音が入ってきても圧縮して押さえる機能を持ち、ギターやベースに使えば一定の音量になって音を厚く長く聴かすことができる。

●エキスパンダー…音を伸張させる効果。

●ノイズ・ゲート、ノイズ・サプレッサー…ノイズをカット・低減する効果。

●オート・パン…音を左右に自動的に動かすことができる。

〈例〉

◆ノイズ・ゲート:大黒摩季『BACK BEATs#1』の一曲目「STOP MOTION」(1:52〜2:02)ドラムのスネアの音の後部分が切れて〝バシ〜ン〟ではなく〝バシッ〟と聞こえ、音を切ることによってリズム感が強調されている。

◆オート・パン:ルナシー『MOTHER』の7曲目「IN FUTURE」(0:10〜0:33)のバックで〝チキ、チキ、チキ〟と左右に揺れる音が次第に速く回る。これが、オート・パンの機能だ。

④音をひずませる・濁す(ディストーション系)

●ディストーション…その名の通り、ひずんだサウンドを作り出す。

●オーバードライブ…アンプが対応できるレベル以上の大音量を送ったときに発生するような、自然にひずんだ音を作り出す。

●ファズ…つぶれた感じのひずんだ音を作り、ハードディストーションとも呼ばれている。

〈例〉

◆ディストーション:ビーズ「MOVE」でディストーションの効いたギターがイントロからさく裂している。

◆ファズ:バクチク『Six / Nine』の12曲目「Kick(大地を蹴る男)」(0:24〜0:28)で2本のギターがファズサウンドでリフを刻んでいる。

⑤その他

●エキサイター…音量を上げないで、ある音の高域だけを持ち上げ、サウンドにメリハリを付ける効果。

●ボコーダー…肉声をロボットのような声に変換する効果。

●マルチ・エフェクター…今までの機能をすべて内蔵しているようなエフェクターでラック・マウント型が多い。

●ノン・エフェクト…すべての音にエフェクターが使われると逆に〝エフェクターなし〟が重要なエフェクトとなる。

〈例〉

◆ボコーダー:氷室京介『SHAKE THE FAKE』の一曲目「Virgin Beat」(0:18〜0:20)で聴ける。

◆ノン・エフェクト:ルナシー『MOTHER』の3曲目「FACE TO FACE」(4:42〜)で、それまでの過激な音から一変してノン・エフェクトのRYU-CHIのボーカルで曲を締めくくっている。ノン・エフェクトが生きる使い方だ。

2 サンプラー

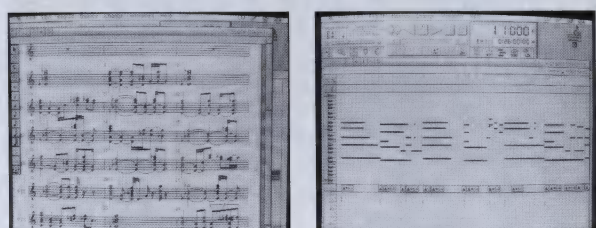
あらゆる音をサンプリング(電気的に録音)し、音源として使える楽器のこと。サンプラーは音であれば何でも取り込めるので決まった使い方はないが、ドラム・パターンをそのまま録音してそれだけでリズム・トラックを作ってリズム・マシーンとして使用したり、一人でオーケストラのようにいろんな音を一度に出したり、ミュージシャンの発想でどのようにも使える。

3 シーケンサー(コンピューター)

シンセサイザーやサンプラーを自動演奏させるために使う機械。以前は音符を数字に置き換えて打ち込むことが多かったことから〝打ち込み〟と呼ばれるようになった。最近はマッキントッシュなどのコンピューターが進歩したお陰で、人間が弾いた演奏をそのまま覚え、楽譜にしてくれる機能まで付いているものが多い。

●シーケンサー画面

4 トランスミッター

よくライブで観たことがあると思うが、ギタリストがコード線(シールド)をつないで腰にぶら下げている小さな箱のこと。ギタリストやベーシストがステージ上で自由に動き回るにはアンプにつなぐシールドが邪魔なため、このようなプレイヤーからアンプまで無線で音を飛ばすワイヤレスシステムが開発された。

PLAY TECHNICS 奏法

ギター一つを例に取っても、95年11月号の筋肉少女帯のライブレポートの中で「ストローク」「アルペジオ」などの奏法が語られているように、オーソドックスにコードを押さえて弾くにしても6本の弦を上から（または下から）ジャ〜ンと弾く（ストローク奏法）以外に、数本の弦をバラバラにつまはじく（アルペジオ奏法）などの奏法がある。ここでは各楽器やボーカルのいろんな奏法や唱法について説明し、具体例が上げられるものは比較的みんなが持っていそうなCDを使って提示してみた。

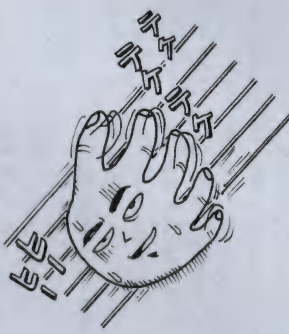
ギターに関する奏法

ギターの奏法にはそれぞれ一応の名前があるが、うまいギタリストはそれらを複合的に一瞬の内に使いこなしながらフレーズを組み立てている。

【ピッキング】
ギターの基本的な奏法、弦をはじくこと。ピックはもちろん、指や爪でのプレイもピッキングに入る。はじく強さ、弦の位置、ピックではじくか指ではじくかなどによってサウンドは大きく変わり、それがギタリストのスタイルとなる。

【ストローク奏法】
手首を振り下げ（上げ）て和音を奏でる奏法。コードを弾き下すダウン・ストロークと、弾き上げるアップ・ストロークとがある。

【カッティング】
ギターをリズム楽器として使う弾き方で、ピック（爪・指でも出来る）などを使って弦と垂直の方向に音を切りながらストロークを行う奏法。よくギターを持ったボーカリストが歌いながら手首をしきりに上下させている、あれだ。
●ビーズ『LOOSE』の1曲目「spirit loose」で全編にわたりエレクトリックギターがジャカジャカと鳴っているのはカッティング奏法によるもの。

【アルペジオ】
和音を一度にジャ〜ンと弾くのではなく、1つ1つの音に分けてバラバラにはじくこと。
●ザ・イエロー・モンキー『FOUR SEASONS』の5曲目「ピリオドの雨」バックのギターはずっとアルペジオを弾いている。

【3（スリー）フィンガー・ピッキング】
親指・人差し指・中指の3本の指で弦を順に素早く弾く奏法。主にアコースティックギターで使用され、美しい響きがする。アルペジオの一種。

【ツイン・リード】
2本のリードギターが合奏することをいう。ギター・バトル、ハーモニー・プレイなど色々なバリエイションがあるがアンサンブルとしてはかなりのテクニックが必要である。
●グレイ『BEAT out!』の「月に祈る」（2:14〜2:27）で左右のスピーカーからTAKUROとHISASHIの短いツイン・リードのハーモニーが聴ける。

【サイド・ギター】
メロディーやソロを取るリード・ギターに対して、バックでリズムを取る役目のギターのこと。リズム・ギターとも言う。

【ハンマリング・オン】
ある音を弾き、その同一弦上にある高音側（ボディに近いほど高音）を、別の指で押さえて音を出す（弦をはじくのではない）プレイの一つで、その名の通りハンマーでたたくように力強く押さえなければいい音は出ない。
●黒夢『feminism』の11曲目「Miss MOONLIGHT」のギターソロの一瞬（2:02〜2:04）で、ハンマリング・オンとプリング・オフを組み合わせたプレイを聴かせる。

【プリング・オフ】
ハンマリング・オンと反対。弦を押さえている指を引っかくように離すことにより音を出す奏法。ピッキングは行わない。
●布袋寅泰『GUITARHYTHM FOREVER VOL.2』の11曲目「GUITAR LOVES YOU」（0:28〜0:30、0:58〜1:00、1:54〜1:57など）の中で幾度となくプリング・オフでフレーズを組み立てている。

【チョーキング】
ピッキングした後、弦を押さえている指を1本押し上げるか下に引っ張って滑らかに音程を変えるロックには欠かせない奏法のこと。1〜4弦は押し上げ、5〜6弦は下へ引っ張る方法が主に使われる。
●ザ・イエロー・モンキー『FOUR SEASONS』の2曲目「Overture〜太陽が燃えている」（3:46〜3:48）で何度もチョーキングしている。

【ダブル・チョーキング】
ロックのギターで2音（2つの弦）を同時にチョーキングすること。
●布袋寅泰『GUITARHYTHM FOREVER VOL.1』の7曲目「さよならアンディ・ウォーホル」（2:52〜2:53）でロックンロールの基本ともいえるこのテクニックをプレイしている。

【チョーキング・ビブラート】
チョーキングをした後に指・腕を使って、押さえている弦を震わせ、音を揺らすテクニック。ビブラートをかける深さ、速度によってギターの"泣き"を表現できる。
●ジュディ・アンド・マリー『MIRACLE DIVING』の1曲目「Miracle Night Diving」での短いギターソロ（2:12〜2:14）は、チョーキング・ビブラートの手本。TAKUYAはこの短い間にダブル・チョーキングとこの奏法を織り交ぜている。

【ハーモナイズド・チョーキング】
複数の弦を同時に弾いて一つの弦だけをチョーキングし、一人でハーモニーを作り出す奏法。ユニゾン・チョーキングとも呼び、独特の分厚い音が出せる。
●ジュディ・アンド・マリー『MIRACLE DIVING』の9曲目「プラチナ」（2:16〜2:17）のソロで一瞬、この奏法によるチョーキングを行っている。

【アーミング】
トレモロ・アーム（ギター図M）を使い、音程を変化させる奏法のこと。音を高低させるトレモロ・アームを使うことで、微妙なビブラート（音を震えさせること）から激しいビブラートまでコントロールできる。チョーキングとは違ってコード（和音）ごとに音程を変えられるのがこの奏法の強みだ。アームの上げ下げをアーム・アップ、アーム・ダウンともいう。
●ワンズ『PIECE OF MY SOUL』の9曲目「Jumpin' Jack Boy」（3:37〜）で曲の最後をトリル（ハンマリング・オンとプリング・オフを素早く連続させる）をしながらアーミングでギュワ〜ンと曲を締めくくっている。

【オープン・コード】
ギターのヘッドに近いところを押さえ、ピッキングするときに押さえていない状態の弦（開放弦）も一緒に弾くコードの事。エレクトリック、アコースティックの両方のギターで使われるが特にアコースティックでは響きが良く、エレクトリックでは重量感を出せる。オープン・ポジション、ロー・コードとも言われる。また、ロー・コードに対して、ボディに近いフレットを押さえる（ハイ・ポジション）コードをハイ・コードと呼び、リズム・カッティングに適している。

【空ピック奏法】
ギターのピッキングは弾き下ろすダウン・ストロークと、弾き上げるアップ・ストロークの両方を使って弾くのが普通であるが、その一定の繰り返しの中でどちらかのストロークを音を出さずに空振りする奏法。16分音符などのリズム（16ビート）はこの空ピックをすることでリズムの乗りを出すことが出来る。
●黒夢『feminism』の13曲目「Happy Birthday」のリズムギター（右スピーカー）がダウン・ストロークを空振りしている。

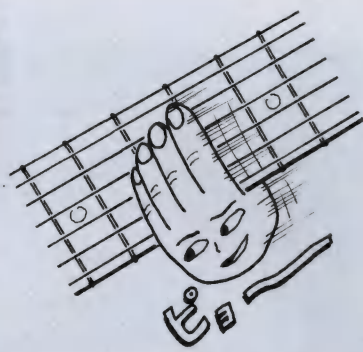
【オクターブ奏法】
ある音のオクターブ（低いドから高いドまでの8音階を1オクターブという）上、あるいは下の音を同時に弾く奏法。
●ビーズ『LOOSE』の1曲目「spirit loose」（0:14〜0:16）で聴ける。

【ミュート奏法】
右手（サウスポーの人は左手）を弦に軽く乗せながら弾いたり、コードを押さえている左手（サウスポーの人は右手）の指を弦から離れない程度に少し浮かせて弾く奏法。右手ミュートは主に音楽の表情を出すために使われ、左手ミュートはコード・カッティングでリズムを強調する時に使われ、ファンクやソウルになくてはならない奏法だ。
●ルナシー『MOTHER』の3曲目「FACE TO FACE」（2:48〜2:48）で聴けるカッティング音は、ミュート音を一つのアクセントとして使ったリズムの強調とはひと味違う手法だ。

【スクラッチ奏法】
弦をピックの縁で弦をなぞる事で独特の"ギュア〜ン"などのノイズを出す奏法。曲の変わり目に効果音として使われることが多い。
●ルナシー『MOTHER』の4曲目「CIVILIZE」のドラムのリズムに重なるギターノイズの降下音（0:02〜0:04）、上昇音（3:13〜3:15）がこの奏法で出した音。

【スライド】

ピッキングした後に押さえている指を、そのまま指板の上から離さずにスーと滑らせて音程を変化させる奏法（”スライド奏法“とはまた別）。

●ビーズ『LOOSE』の3曲目「ねがい」（1：36～1：37）でのギュィ～ンという音。

【ハーモニクス奏法】

フレットに軽く指が触れる程度に当て、ピッキングすると同時にその指を離すことによって”ピーン“と言う美しい鐘のような音を出す。

●ザ・イエロー・モンキー『FOUR SEASONS』の4曲目「Tactics」（0：04～0：06）で聴ける。

●ジュディ・アンド・マリー『MIRACLE DIVING』の11曲目「帰れない2人」（2：56～2：58）ではアコースティックギターのハーモニクスだけの音が3音聴ける。

【速弾き】

言葉の通り、目にも止まらないような速度で弾くこと。

●筋肉少女帯『レティクル座妄想』の5曲目「さらば桃子」で随所に速弾きを絡めたフレーズが聴ける。

【フィードバック奏法】

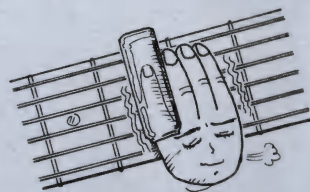
ギターのある音を弾いてギター・アンプに近付けると、ある距離でアンプから出ている音によってギターの弦が振動し、その音をまたピックアップ（ギター図C）が拾い、アンプから出力させるという繰り返しが始まり（フィードバック）、無限の音の伸びが得られる奏法。ギターとアンプの距離をうまくコントロールするとギターが悲鳴を上げているようにも聴こえる。

●ルナシー『MOTHER』の3曲目「FACE TO FACE」（1：43～2：01）で演奏のバックで鳴っている”キーン“という音。

【ボトルネック奏法】

指でコードを押さえる代わりにボトルネック（酒ビンの頭の部分をチョン切って使用したところからこの名前が付いた）などの中空のバー（筒）を薬指・中指・小指のどれかにはめてフレットの真上で弦を押さえて音程を取る奏法。そのまま滑らせて弾くことが出来るため独特のルーズな感じが出せ、スライド奏法とも呼ばれている。

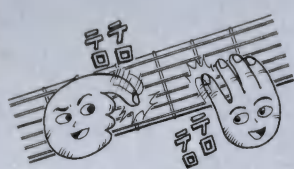
●オリジナル・ラヴ『RAINBOW RACE』の7曲目「ホモ・エレクトス」（0：10～0：19）で粘っこいスライド奏法が聴ける。

【ボリューム奏法】

ギターのボリュームを”0“にしてピッキングをし、それと同時にボリュームを上げる奏法。弦にピックが触れた時に発生するアタック音が聴こえないため、バイオリンのような音が得られる。そんなところから別名バイオリン奏法とも呼ばれている。

●黒夢『feminism』の11曲目「Miss MOONLIGHT」の始まり（0：00～0：02）のギターの音。

【ライト・ハンド奏法】

左手のハンマリング・オンにさらに右手の指のハンマリング・オンをプラスして、左手だけでは出せないフレーズを出す奏法。

●ビーズ『LOOSE』の8曲目「LOVE PHANTOM」（1：41～1：43、2：24～2：27）の驚異的な速弾きはこの奏法なくしては出来ない。

キーボードに関する奏法

ピアノ、オルガン、シンセサイザーなどの鍵盤楽器を通常キーボードと呼ぶ。キーボードの奏法はその構造上、”鍵盤を押す“という操作のみのため、ギターほど数々の奏法があるわけではない。

【グリッサンド】

ある音から1オクターブ以上離れた音へ鍵盤の間を滑らせるように演奏することをいう。高い方から低い方へのプレイをグリス・ダウン、逆をグリス・アップという。

●ビーズ『LOOSE』の13曲目「drive to MY WORLD」（0：05～0：07）では右スピーカーのオルガンがこの間に1オクターブ高くなっている。これがグリッサンドの奏法。

【ピッチ・ベンド】

ある音を弾いた後に、鍵盤の左側に付いている”ピッチ・ベンド・ホィール“と呼ばれるローラー（レーバー式もある）を上下に操作することによって、ギタリストがチョーキングするように音程が変わる効果が得られる。

●筋肉少女帯『レティクル座妄想』の1曲目「レティクル座行超特急」の始まり（0：21～0：22）でキーボードがブーンと鳴っているのはこの奏法によるもの。

【ポルタメント】

シンセサイザーで、ある音から次の音に滑らかに連続的に音程を変える機能のことをいう。

●ミスターチルドレン『Atomic Heart』：6曲目「Cross Road」（0：01～0：11）の笛のようなシンセの滑らかな音の変化も速度の速いポルタメントを働かせたものだ。

ベースに関する奏法

ベースではほとんどギターの奏法が使えるので、ここではベース特有の奏法をピックアップして解説してみたい。

【チョッパー・ベース奏法】

通常のベースは中指・人差し指で弦を弾くが、この奏法は親指と人差し指（中指や他の指を使う人もいる）を使い、親指では主に弦をたたき人差し指では引っかけ打楽器的な音を出す。

●グレイ『BEAT out!』の7曲目「生きてく強さ」（1：34）で”バチッ“という一瞬のチョッパーが聴ける。

【ランニング・ベース奏法】

通常のベースは演奏している曲のコード（和音）に合わせて、その和音のルート音（コードの基礎となる音。例えば”C“のコードでは”ド“）や和音構成音を弾くことが多いが、それを外れてベーシストのアド・リブに任せ繰り返し弾く奏法。テンポが緩やかなジャズではウォーキング・ベースと呼ばれている。

●ジュディ・アンド・マリーの「そばかす」（2：02～2：12）でランニング・ベースが聴ける。

●ビーズ『LOOSE』の3曲目「ねがい」（2：59～3：15）でウォーキング・ベースが聴ける。

ドラムに関する奏法

ドラムはたたくという原始的な楽器であるが、これもまた奥が深い。ここではよく分かる代表的な奏法にとどめよう。

【フィルイン】

メロディーやフレーズの切れ目や、区切りで即興的にプレイすることで、よく”おかず“と呼ばれているのがこれ。

【リム・ショット】

スネアの縁（金属の部分）をスティックでたたくこと。バラードの静かな部分でよく使われる。

●ワンズ『PIECE OF MY SOUL』の4曲目「DON'T TRY SO HARD」（1：17～）でカッツカッツと鳴っているのは、このリム・ショットによるもの。

【ロール】

左右の手に握った2本のスティックをスネアやタムの上で音をつなげるように連打することをいう。

●ルナシー『MOTHER』の2曲目「ROSIER」（4：40～5：17）で真矢のロールが聴ける。

ボーカルに関する奏法

歌い方にはそれぞれの声質・声量によって、つぶやくような歌い方、シャウト型、棒歌い型、だみ声型など分けようと思えば分けられないことはないが、それぞれの個性に負うところが大きい。そこで、ここでは声の使い方を奏法としてとらえてみたい。

【ア・カペラ】

楽器による演奏なしでボーカルだけの合唱形式で歌うコーラススタイル。これには歌唱力と音程の正確さなど高度なテクニックが要求される。

●吉田美和『beauty and harmony』の1曲目「beauty and harmony」で吉田美和の見事なまでのア・カペラが聴ける。

【ヴィブラート】

声帯を震わせて歌うこと。

●大黒摩季『BACK BEATs #1』の12曲目「いちばん近くにいてね」（1：20～1：25）での「いちばん近くにいてね」の「く」と「ね」にビブラートがかけられている。

【シャウト】

”SHOUT“という言葉の意味通り”叫び“。テンションが高まったボーカリストが発している奇声だ。

●ビーズ『LOOSE』の1曲目「spirit loose」（0：23～0：30）での稲葉浩志のシャウトは、かなり切れている。

【スキャット】

ボーカリストが言葉ではなく”ウ～“”ア～“などの音のみでメロディーやアドリブ（即興）で歌うことをいう。

●ザ・イエロー・モンキー『FOUR SEASONS』の4曲目「Tactics」（1：59～2：07、3：31～）でギターと一緒に同じメロディーを歌っている声がそうである。

【ファルセット】

うら声で歌うこと。

●ワンズ「Same Side」のカップリング曲「Sleeping Fish」（1：27～1：32）の「Floating in the air」の「in the air」部分をファルセットで歌っている。

【フェイク】

メロディーラインをそのまま歌わず、ある程度崩して歌うこと。

LIVE SCHEDULE

3月29日　尼崎ライブスクエア・ビブレ
4月20日　大阪ロケッツ
5月3日　大阪ベイサイドジェニー
5月14日　大阪ロケッツ
5月25日　大阪ロケッツ（ワンマン）
5月30日　池袋サイバー

independence

GLAD ALL OVER

2月28日に大阪ロケッツでライブを行った、グラッド・オール・オーバー。初めてのライブだというのに、この日ステージ前には彼らに少しでも近付こうとファンがひしめき合っている。彼女達は、つい1カ月前に解散ライブを行った、ボーカル以外のメンバーが在籍していたバンド「ディヴァージュ」の新たなスタートを観ようと集まったファンたち。この日、北野正人(G、以下K)、玉城心(B)、斉藤真二(Ds)の3人が、ニューボーカリスト庄司〝庄太郎〟直人(以下S)を迎え放ったライブは、ハードさを前面に押し出すビートとギターリフに、キャッチーなメロディーラインをストレートに歌うボーカルを重ね、激しくてポップな楽曲を次々と聴かせる。そこにはディヴァージュのころに見せた変にカッコを付ける3人の姿はなく、庄司を中心に自然に、しかも生き生きしている4人がいた。

「ディヴァージュの活動をしていく中で、徐々に自分たちの自然なスタイルを出そうとはしてたんですけど、見た目を変えてもバンドのイメージ的にビジュアル系だった部分を引きずってしまい、どうしても〝カッコ付ける〟ってことが前提になってしまってたんですよ。でも、あの日のライブでは本当に〝みんなで楽しもう〟っていう感覚になれたんです」(K)

ディヴァージュ・ファンを前に、そのバンドのイメージを真っ向から崩しにかかる勢いで、ボーカリストの庄司は、自分の存在感をステージから思い切りぶつけてくる。

「彼らの中にディヴァージュっていう、ある程度人気もあって、名前も広まりつつあるバンドのイメージが固まってしまっていて、3人共そこから逃げられへんかったと思うんですよ。でも、僕がこのバンドに入る時に、北野くんから『好きなようにやろうよ。自分らで楽しいと思えるような、カッコいいと思えることだけしよう』って言われたんですね。だからもう、素の自分でやろうと。実際、素の自分しか出せないんで(笑)」(S)

前のバンドとは違う、新たな気持ちで初ライブが出来たという3人。しかし、そのメニューの中にディヴァージュ時代の楽曲も含まれていたのは…。

「新たにやるってことで全部新曲にしたんですけど、試しに前の曲をやってみたら、彼のボーカルが入ることで全く別の曲に思えたんですよね。『じゃあ、この曲はここからスタートや』っていうことで。初めは、やっぱり前の曲をやることに抵抗があったんですけど、彼が歌った時にその気持ちが消えたんです」(K)

あえて前のバンドの曲をやることで、グラッド・オール・オーバーに対する意識固めをすると同時に、これから自分たちが表現しようとする音楽の方向性にも目を向けていく。これまでは、作詞・作曲のすべてを北野がこなし、出来上がったデモテープをみんなに聴かせて合わせるという作業を行ってきたが、そのやり方にも変化が見え始めた。

「サウンドにそれぞれのパートの個性を重視したいっていう気持ちが出てきたんです。一応、今まで通り自分なりに完成させたデモテープは作るんですけど、ギターの部分を聴かせてドラムとベースはそれぞれ考えてもらうんですよ。そんな中で出てきたアイデアを実際に試しながら、ベストなものを選びます」(K)

ちなみに北野の曲作りは、異常なほどのスピードで出来上がっていく。

「よくボーッとしてる時に、メロディーが浮かぶんですよ。そのボーッとするのが半端じゃないっていうか、もうしょっちゅうで(笑)。そんな時、鼻歌を歌ってるとパッとメロディーが出て来るんです。例えば、この状態(インタビュー中)でも、もしシーンとなったらボーッとしてフンフンフン〜と(笑)」(K)

そんな彼の〝ボーッ〟から生まれてくる曲に、今は各メンバーの個性が重なってバンドサウンドが誕生するわけだ。そこに、今度は詞が乗ってくる。

「今は基本的に詞は庄司くんに任せてます。僕の書く詞と、彼の書く詞って正反対なんですよ。そういうところに、すごく魅力を感じてるんですね。僕がラブソングを書けば、すごい歌詞になるんですよ(笑)。もう、どこまで行くねんっていう感じの。それとは逆に彼の書く詞は親しみのある感じなんで」(K)

「僕は、自分の身近なことをストレートな歌詞で歌いたいんです。書きたいことはいっぱいあるし、それに対する固定観念もない。ラブソングしか歌いたくないっていうのもないし、自分の嫌いなことも、不満も歌いたいし。だから言葉を選んで作っていきたいっていうのはあります」(S)

まだ始まったばかりのグラッド・オール・オーバーだが、彼らの中で着実にバンドのこれからの構想は出来上がりつつある。平均年齢21.5歳という若い彼ら、音楽に対するどん欲さもさることながら、ライブに対する意気込みも相当なもの。

「〝若さ〟〝勢い〟〝熱さ〟をライブでは伝えたいんですよ。やっぱり、観て肌で感じるものって言えば、僕らが流した汗やったりするから。僕らの今の強みって言えばそれしかないですからね。それを、うまくライブで熱く伝えたい。一時ヴァレンタインD.C.さんのローディーをしたことがあって、あの人たちのライブってすごく熱いでしょ。その時に『お前らに一番あるのは、若さと勢い。それを熱さで伝えられたら、立派なライブバンドや』って教えてくれたんですよ。まだまだ今の自分たちでは理想のところまで出来てないと思うんで、もっともっとライブを重ねて、例えば悩みを持って観に来た人が、僕らのライブを観たら悩みを忘れるぐらいの存在になりたいですね」(K)

ライブでは、まだ勢いだけが先行してしまっている感も否定できないが、彼らは今の自分たちの実力についてシビアに判断する目を持っている。それほど彼らが目指しているレベルは高い。彼らはライブバンドとして、この4人だからこその〝熱さ〟を出し得る可能性を秘めたバンドなのだ。

グラッド・オール・オーバーは、「ブレイクラッシュ・レコーズ」(※)という新しく発足されたインディーズ・レーベルの第一弾として1stミニアルバムをリリースする(4月26日予定)。

「初めてのレコーディングということもあって、今回はスタッフの人に任せっ切りで出来上がったって感じなんです。でも、これからは自分たちがリードするぐらいに、良い意味で〝反発〟していこうと。逆にそういう関係でないと良いモノが生まれて来ないと思うし、それが出来るところなんで」(K)

[文・村田圭子　撮影・佐藤潤一]

※「とにかく楽しけりゃ良い!」「気持ちいい音を出したい!」「カッコいい事やりてぇ!」と思っている愛すべきロッカー達をサポートするレーベルとして誕生。今後どのようなアーティストが出てくるのか注目するところだ。

TOPICS

尾崎豊

18歳でデビューし、26歳の若さでその生涯を閉じてしまったロッカー、尾崎豊。彼の死後4年という年月がたった96年3月、なんと新作がリリースされるという。新作といっても30歳の尾崎が存在するはずもなく、デビュー前の音源が発表されるのだ。オーディションに応募するためにスタジオで録音した4曲、自宅のラジカセで録音した3曲の全7曲を収録し、そのうち5曲が未発表曲という超レアなアイテムである。

しかし、尾崎豊の貴重な作品が発表されると聞くと「どうやって音源を手に入れたのか？」「チンケな便乗商品じゃないのか？」といった数々の野次馬的な疑問も浮かび上がってくるが…。

この作品のディレクターである(株)トランスビートの小林岳夫氏がジェイロックマガジンに語ってくれた“作品が完成するまでのストーリー”は、きっとそんな疑問に答えてくれるはずだ。

僕は元々映像の仕事をしていたんですよ。実は、尾崎さんが亡くなられる4カ月ほど前に、「ぜひ、尾崎さん監督の映画を作りたい」とお話をさせてもらったんです。尾崎さんからも「映画には興味があるし、自分でもやってみたい」と返事をいただき、アルバム『放熱の証』のレコーディングとツアーのリハーサルが終わったら、その映画の話を具体化することになっていたんですよ。でも、ちょうどその時期にお亡くなりになられたんです…。

そんな形で尾崎さんとは断ち切れてしまっていたんですけど、去年行われた「尾崎豊メモリアル展」というイベントのプランナーに、遺族の方からお借りした10代の直筆ノートやテープなどいろいろな資料を見せていただく機会があったんですね。それで僕なりに尾崎さんをモチーフにしたCDを作ってみたいと思い、遺族の方とも相談して、去年「尾崎豊 4.25 REQUIEM」というCDを出したんですよ。その時に今回のテープも聴かせてもらっていたんですけど、やはり世に出ていない曲を勝手に出してしまうのもどうかと思ったんで、1 stや2 ndに入っている3曲だけ、そのCDにシングルとして付けて発表したんです。

その後、『尾崎豊 4.25 REQUIEM』に対する反響がいっぱいありまして、その中でも圧倒的に多かったのが「未発表曲があれば聴きたい」というものだったんですよ。ファンが欲しいのは写真とかではな

く、やはり尾崎豊の曲なんだと実感して、今回の作品の制作にかかったわけです。

今の高校生って、コギャルや茶髪とかがマスコミに取り上げられて目立っているけど、心の中では真剣に悩んで、まじめに人生を考えている人たちがいっぱいいると思うんですよ。でも、今の風潮の中でそういうのを表立って言うのは〝カッコ悪い〟となっているし、音楽シーンにしてもメッセージを持って歌うというのが〝ダサイ〟と思われていますよね。僕はロックというのはメッセージを持っていないといけないと思うんです。その中で尾崎さんというのは、自分なりのメッセージを最初から最後まで持っていた数少ないアーティストですから、今の音楽シーンの中で生きている人間として僕は、そんな尾崎さんの世界というのを大切にしていきたいんです。

ここに収められている未発表曲がクオリティー的に「これは素人でしかないよね」というものだったら、逆に尾崎さんの名に傷をつけたりするけど、僕はいい曲だと思うし、10代の目線で愛とか社会に対するメッセージを素直に投げかけていた彼のいい部分が出ていると思うんです。

唯一、問題となったのは、やはり録音状態。残っていたマスターテープというのが、カセットテープだったんですよ。そのカセット自体も十何年も前のものなんでCD化するに当っては、ノイズを取る機械を使ったり、EQ(イコライザー)で音質を調整したりして、まるまる1週間ぐらいかかったかもしれない。なんとか「これぐらいならオンエアされても大丈夫だな」と思えるぐらいにはなっているつもりなんですけどね。これは余談ですが、自宅録音された曲をよく聴いていると、ヒスノイズの後ろでスズムシが鳴いているんですよ(笑)。

タイトルに関しても、本当にいろいろ考えたんです。でも、尾崎さんの過去の作品って相当な意味が込められているんで、中途半端に付けるんだったらあえて無題の方がいいという結論に達したんです。そして、ファンが思い思いのタイトルを考えてくれればと思って、通称で「ホワイト・アルバム」。それならば、ジャケットも真っ白にすれば良かったんですけど、やっぱり僕らもCDの告知をしたいし、レコ評も載せてもらいたいんで、真っ白だと分かりにくいだろうと(笑)。じゃあ、どんなジャケットにしようかと、いろいろ考えているときに見た池田満寿夫先生のリトグラフがすごく良かったんですよ。それで、断られるんじゃないかと思いつつもお願いしてみたところ、「いいよ」というお返事がいただけたんです。このジャケットには、先生が尾崎さんに対して持っていた〝勝ち気でありながらも繊細で、そして正直に生きようとする若者〟というイメージが凝縮されているらしく、40枚ぐらい描いていただいた中から選んで下さったんですよ。

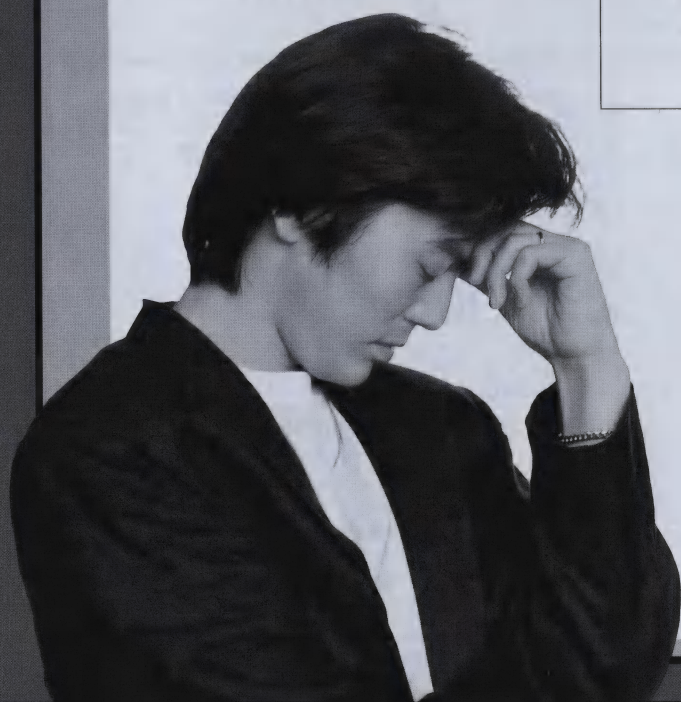
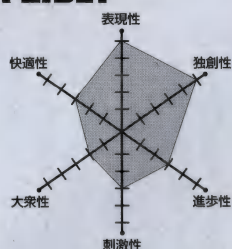
いろんな〝尾崎豊〟という名前を使った便乗まがいの商品がありますが、この作品がどうなのかという判断は実際に手にした人に委ねたいと思います。このCDには彼が10代のころに伝えたかったメッセージが詰まっていると思ってますし、歌詞カードも「この漢字の使い方は、ちょっとおかしい」というところも手を加えなかったりと、彼が10代の時に表現していた形にこだわって作りました。送り手としてはやれるだけのことはやっていますので、聴いていただいた方には一連の商品とは違う作品だと理解してもらえると信じています。

僕が百パーセント彼のテープや音源を把握しているわけじゃないんで断言はできませんが、きっとこのアルバムが尾崎豊の最初で最後の未発表作品集となるでしょう。

そして、僕と尾崎さんとの仕事もこれでやっと完結するんです。

［テキスト・石田博嗣　撮影・大川直人］

ALBUM
「　　/尾崎豊」

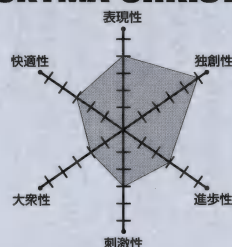
DISC REVIEW

[キリギリス]
DER ZIBET

アーティストの個性が何かに例えられることは多いけれど、デルジベットを表現するならそのバンド名(じゃ香)にもつながる"におい"がピッタリだと思う。一瞬かいだ、とても珍しいにおい。もう一度かぐことが出来れば、何百種類の中からでも探し当てられるにおい。彼らにはそんな不思議で独創的なにおいがあり、作品によって様々な変化があろうとも必ず感じさせてくれる。しかしそのにおいが、彼らの音楽を安定させてしまうことはけっしてない。新作『キリギリス』でも、まずぶつかってくるのは詞における言葉の存在感だ。ISSAYに歌われることによって、独自の鋭角を得る言葉。その言葉にさらに磨きをかけ、光沢と色彩を与えながら突き刺さってくるサウンド。そんな言葉と音の洪水に浸った全身がゾクゾクし、ようやく気づくのが「やっぱりデルジベットだ」という彼らのにおいである。

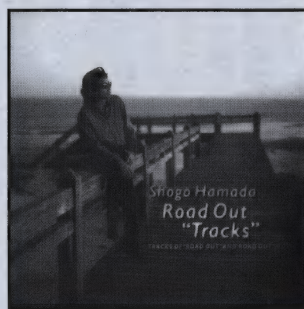
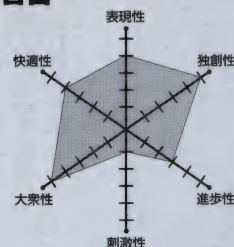
アリみたいな安定なんて全く無縁な世界に生きる、キリギリスな彼らだからこそ完成した新作。今聴いておきたい1枚だ。

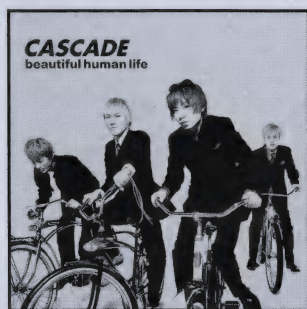
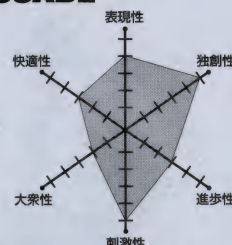
[文・やまだじゅんこ]

毎月リリースされる音源の数は、メジャー、インディーズを含めると膨大な数にのぼる。その中からジェイロックマガジンが紹介できるのはわずか5枚。各スタッフが、どの点に着眼し、そのアイテムを推薦しているのか、ひと目で分かるように6項目5段階のレーダーチャートを添付した。その独断と偏見に基づいた詳細項目についての説明は以下の通りである。

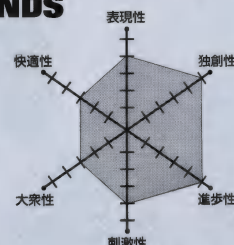
大衆性：世間一般、不特定多数のリスナーに支持される度合い。
独創性：時代の流行に左右されることのないオリジナリティーの追及度。
快適性：全体から得られるそう快度。
刺激性：サウンドや歌詞から受けるインパクト、ざん新さ、またテクニック等の巧拙。
表現性：音楽を通じて表現しようとしているモノの反映度。
進歩性：前作からの成長度。前作がない場合は、次作への期待度。

[Warm Snow]
LA'CRYMA CHRISTI

インディーズバンドの魅力というのは、未完成なバンドが試行錯誤を繰り返し、どんどん成長していくところ。しかし、その過程で方向性を見失ってしまうバンドも多く、実力のないバンドが雑誌広告などのイメージ戦略だけで人気を集めているケースも少なくない。そんなインディーズシーンの中で、地道なライブ活動とファンの口コミによって、着実に人気を高めつつあるラクリマ・クリスティーは要チェックだ。満を持して発表されたミニアルバム『Warm Snow』では、ハイトーンボーカルとツインギターが織りなす幻想的なプログレッシブ・ハードロックを聴かせ、その豊富なアイデアと安定したテクニックによって作り出される流麗な楽曲には目を見張るものがある。ボーカルの表現力などに未完成な部分を残すものの、近ごろ異常発生している歌メロにばかり固執した連中やイメージ先行型のバンドとは、すでに一線を画している。妖艶(ようえん)なジャケットに先入観を持たずに、この彼らの世界に触れてもらいたい。

[文・南出哉稔]

[ROAD OUT "TRACKS"]
浜田省吾

アスファルトとコンクリートに囲まれた都会の雑踏の中で、1日24時間という貴重な時間の大半を使い果たし、昨日と変わらない今日、今日と変わらない明日を迎える予定調和の日々。ニュースが他人事のように伝える小説より信じ難い事実を、単なる情報としてインプットし社会情勢を把握した気分に浸る。そんな生活のサイクルですさんでしまった精神を解放してくれる特効薬の一つが音楽だ。浜田省吾の新作『ROAD OUT "TRACKS"』は、繰り返しの毎日で疲れ切った精神を彼の持つ壮大でドラマチックな世界へと誘ってくれる。ツアータイトルに"ON THE ROAD"と掲げている彼が"ROAD OUT"と名付けているように、今までの表現とは趣向が違ったビデオ作品のサントラなのだが、ベスト盤的な解釈もでき、アルバムとしてのクオリティーも高い。1曲1曲がリアルな表現力を持ち、聴く者の胸の奥で「アメリカのカラっと晴れた空の下に広がる大地」や「エキサイティングなライブシーン」が広がるのである。

[文・石田博嗣]

[beautiful human life]
CASCADE

"今どき"の男の子を象徴するかのようなオシャレでキュートな4人組、カスケード。彼らが聴かせるサウンドは、ポップ色を前面に時折パンク的な要素をのぞかせたりする陽気で元気いっぱいのロックンロールだ。そこに「こんなことしてみようよ!」「ああいうのやってみない?」といった、若い子たちに付きものの冒険心がいろいろ入った、ざん新で愉快なアレンジを散りばめている。そのやんちゃさは音だけにとどまらず、ちょっぴり皮肉の混じった言葉遊び的な詞を、まるで女の子のようなカン高い声でヒョウヒョウと歌うボーカルも負けてはいない。特に詞は、日本語なのに英語のように聴かせてしまったり、いきなり大阪弁が飛び出すあたりのしゃれっ気たっぷりなセンスで超ユニーク。そんなカスケードの音楽は、まるで"おもちゃ箱"を引っ繰り返したような面白さでいっぱい。自分たちの好奇心をそのまま音楽にしてしまう彼ら、まさに90年代後半に現れた"恐るべき子供達"だ。

[文・村田圭子]

[WORST CRIME]
~About a rock star who was a swindler~
WANDS

今、いいぞ、と僕のイケイケ心を痛く刺激してくれるNo.1はワンズだ。シングル「Secret Night」で変ぼうを遂げ、この後の「Same Side」でますますJロック界わいの主流から離れたサウンドを提示する、その武骨なポリシーもさることながら、"マニアック"という、ありがちな自己満足ではなく、"聴く者に何かを訴えるためのワンズ流のアプローチ"をと、もがく姿勢にロックを感じるのが大きな要因だった。

で、この「WORST CRIME」。柴崎は野太いギターで押しまくってくるし、上杉もしゃがれた声で叫んでいたりとハードなことには変わりないんだけど、そのハードさが"こなれ"ていて、ワンズ流のロックを聴かせてくれる。しっかりと詞が伝わってきて、しかもサウンドがその詞のイメージを膨らませている。素直に"らしい"と思わされるエッセンスに満ちており、「体内に取り入れたハードさが血となり骨となった」そんな印象だ。もちろん、ここがゴールでは困るし、本人たちもそうは思っていないだろうが、「WORST CRIME」が今後をさらに楽しみにさせてくれる作品であることに変わりはない。[文・大西智之]

大黒摩季
TWO HALF
MAKI OHGURO
HER FIRST VISUAL AND
PROSE WRITING BOOK
申し込み方法：お近くの書店にない場合は、下記の注文票に所定事項を記入して書店へお申込いただくか、郵便局備え付けのブルーの振込用紙に、住所・氏名・電話番号および「大黒摩季の本」と記入の上、1910円（本体1600円＋送料310円）を下記口座までお振込下さい。口座番号：00980-1-51829　加入者名：（株）ジェイロックマガジン社
お問い合わせ
（株）ジェイロックマガジン社
542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8MACビル8F
TEL 06-214-1751
FAX 06-214-1761
TWO HALF
MAKI OHGURO
大黒摩季
TWO HALF
初のビジュアル散文集
「トゥー・ハーフ」
好評発売中
定価1600円
◎四六判サイズ ◎上製本 ◎144頁オールカラー
注文票
●お名前
●TEL
●ご住所
冊
●書店印
大黒摩季著　トゥー・ハーフ
ISBN4-916019-00-8 C0095 P1600E
●発行
（株）ジェイロックマガジン社
TEL 06-214-1751 FAX 06-214-1761
TEL：
この注文票はコピーでも構いません。

その売り方をみんながへんだなって思ってた…みたい。

●「J-ROCK CD50」内の告知を見てペンを取った。番組の告知を見た限りでは、"小室バッシングしたい奴はハガキくれ!! "と言っているみたいで、あまりいい感じはしなかった。確かに今の日本の音楽シーンでは、小室のプロデュースした曲が売れている。別にそれはそれで、ほっとけばいいことなのではないか。別に私は小室ファンではない。しかし、彼の作る曲はメロディーもよく、だれもが簡単に覚えられるようになっている。彼の"売れる曲"を作る才能は大したものだと思う。必ずしも"売れる曲"が"いい曲"だとは限らないのだが…。
このコーナーにハガキを出す人達(私を含めて)というのは、自分にしっかりと好きなアーティストがいて、自分なりの音楽の聴き方というのを持っている人達だと思う。だから今の音楽シーンをああでもない、こうでもないと真剣に論じることができるんだと思う。しかし世の中には、ただ漠然と音楽を聴いている人達の方が多いのだ。だから音楽に対して大したこだわりもなく、皆が聴いている流行したものばかり聴く。そんな連中に対して声を大にして訴えても、大した効果はないと思う。小室の人気もまだ1〜2年。彼の作った曲が本当にいいものであれば、これから先何年も残っていくはず。
(熊本・勝島健・♂・21歳)

●優れたプロデューサーとは、アーティスト独自の魅力を最大限に引き出し、形にすることができる人のことで、音を聴いただけで「あのプロデューサーだ」と分かってしまう人は、プロデューサーとして最低のランクだ、というだれかの言葉がある。正論だと思う。自分の色しか出せない人は、他人を操らず、セルフプロデュース、つまり自分を使って突っ走ってほしい。
(東京・西尾眞美・♀・22歳)

●自分のやりたいことをやって、それが認められて売れるんだと思う。売れるためにやるのは違う。最近そういうのが多くて悲しくなってくる。
(東京・柴崎君の弟・♂・18歳)

●私は今大好きなBUCK-TICKに会うまでは、TMNが好きでした。TMNの中でも小室さんが好きだったんですけど、今ははっきり言って大嫌いです。何でかっていうと、売れ線を狙ってるプロデューサーだからです。子供が言うのも何ですけど、売れ線狙ってる曲なんて心がないと思います。そんな変なプロデューサーしてるんだったら、TMNを復活した方がいいと思います。
(新潟・小林円・♀・14歳)

●歌ったり踊ったりするだけでも、ある意味でアーティストと言うかもしれないが、CDに声が入っているからには"音楽へのこだわり"を音だけでも十分伝えられるようでないといけないと思う。小室さんは、アーティストを甘やかしすぎ! そうでなければ小室ファミリーは、小室さんに"パフォーマー"として利用されているとしか思えない。
(東京・N.O・♀・17歳)

●あのプロデューサー記事すごかったです。ああいうように私も「どっちみち小室さんが作ったんだからだれが歌っても一緒」と思っていました。でも雑誌で載っているのを見た時は、「ああ、同じこと考えてる…」とうれしくなりました。
(兵庫・D.L.S.M.・♀・15歳)

●プロデューサーがアーティストより目立つというのは、少し許せません。プロデューサーというのは、「縁の下の力持ち」状態でいなきゃいけないと思います。何かアーティストが作ってもらった舞台で踊らされてるも同然じゃないですか。
(山形・TAKU・♀・17歳)

●日本の音楽がおかしい! プロデューサーの名前とか、コミックバンドみたいなのや、ジャニーズなんかが次々に曲を出してヒットするなんて…。絶対に認めない!
(愛知・モンテー・♀・14歳)

●知らなかった…。小室氏にプロデュースされている人々が、"アーティスト"だったなんて…。私はてっきりアイドルだと思っていたのだ。けど、まあ何だかんだと言っても音楽やってる人達は、プロになってしまえば「1にビジネス、2に作品」なんじゃないでしょうか? 売れなきゃ、CDも出せないし、ライブも出来ないんだから…。
(神奈川・M.F・♀・26歳)

●オピニオンのコーナーは衝撃でした。本物のプロのアーティストだったら、「売れる」ことと「音へのこだわり」は、いつも背中合わせでもがいているだろう。そして私は本物の音を見抜く力を養わなければならない。でも本物の音っていうのは、人それぞれだから、いっぱい音楽を聴いてみるつもり。
(静岡・寝子是・♀・14歳)

●「これでいいのか日本のロック」で、小室本人よりそれを受け入れるリスナー側に問題があると言った人。私も同感。あのお笑いタレントのCD は「ミリオンセラーお願いします」から出来たもの。それを買うなんてね…。売れるイコールいい曲じゃないってこと分かってないね。
(奈良・Treat・♀・16歳)

●「プロデューサーはヒットを狙うのが当然」といった意見が多いようですが、私「プロデューサーは、アーティストの良さや眠っている才能を引き出す存在」だと思います。プロデューサーの知名度だけでCDをリリースして、アーティスト(もっともこの場合プロデューサーのあやつり人形というべきだと思うが)がおざなりにされているのはどうかと思う。
(岐阜・安江奈々・♀・17歳)

●結局さ、売れるのに「だれが歌うのか」ってことはほとんど関係ないんだよね。作曲者の名前が売れっこプロデューサーなら。
(静岡・夢追い人・♀・17歳)

●やっぱり音楽というのは、自分で作って自分でやるというのが一番いいですよね。自分でやりたくないという人もいると思うけど…。
(岐阜・みき・♀・16歳)

●私にとっての音楽は、自分の心を動かしてくれるものだと思う。今私はL'Arc〜en〜CielとEins:Vierが大好きだ。でも他の人の曲とかを聴いても感動することがある。オピニオンを読んでいて思ったことは、別にプロデューサーの名前で売れてもいいんじゃないかということだ。確かに腹の立つこともよくあるけど、感動したことをそういうことだけではねつけるのは良くない。みなさんは、そんな曲の中の1曲にだけでも感動したことはないんですか。私は片手で足りるだけならありますよ。
(滋賀・翔・♀・15歳)

●着実に一歩一歩を自分たちの足で進んで行く。それがロックじゃないですか。ペースは速かろうが、遅かろうが、走っていようが、そんなのどうでもいいのよ。カンジンなのは、そのひたむきな姿勢でしょ? プロデューサーの名前で売れてる人達、今はそれでいいかもしれない。でも本当に満足しているのかな? 売れなくても自分たちのやりたい音楽を真剣にやり続ける人の方が魅力的だと思う。そんな姿がロックなのよ。それで応援する人達も、やっぱりカッコイイよね。小室ファミリーって私アイドルだと思ってましたけど…? だってロックしてないでしょ?
(群馬・流那・♀・25歳)

●はっきり言ってプロデューサーの時代なんて全然来ちゃいないと思う。音楽について無知な一部のマスコミが騒いでいるだけ。小室氏も小林氏も織田氏も、プロの職人として臨機応変に仕事をこなしているだけで、要するに完全なビジネス。特に小室氏はTMや渡辺美里以来10年間の蓄積が実を結んでいるだけで、それについて他人がとやかく言うようなものではない。問題は、リスナー達の受け入れ方だと思うし、彼らに判断材料を与えているマスコミの責任も大きい。プロデューサー王国と言われているアメリカで、プロデュースクレジットを見て買うリスナーは皆無ということも覚えておいてほしい。あくまでプロデューサーは、音楽産業の裏方として働く職人なのである。変にカリスマ化しないことだ。
(茨城・やりくりアパート・?歳)

●このページは、最近の音楽業界の風潮を読者の皆さんがどう受け止めているかを反映する企画です。今回は前回の問題提起(売れっ子プロデューサーのパワーだけで売れてしまう音楽についてどう思うか)に対して寄せられた意見をご紹介します。次回、読者からの新たなテーマの投稿をお待ちしています。

それなら、

J-ROCK ARTIST BEST 50

この番組は、視聴者からのハガキ・街頭アンケート・J-ROCK magazineの読者人気アンケートを総合的に集計し、毎週番組独自のJ-ROCK ARTISTのベスト50をいち早く紹介すると共に、ARTISTの最近の活動状況をお知らせする視聴者と一体型の音楽情報番組です。4月から番組名が［J-ROCK ARTIST COUNT DOWN 50］から［J-ROCK ARTIST BEST 50］に変わりました。

だったら、

ロック音楽 ROOTS

すべてのROCK音楽の原点である「ブルーズ」。数年前から関西を中心にブルーズのムーブメントが全国に広がってきています。この番組は、「ブルーズ」から始まりすべての音楽へ広がっていく「音楽ルーツ」を深く探り音楽の素晴らしさ・楽しさを全国へ発信する番組です。

J-ROCK ARTIST BEST 50

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	23:30～	テレビ新潟	金	26:25～
岐阜放送	土	23:30～	テレビ愛媛	木	24:50～
びわ湖放送	金	22:25～	長崎文化放送	金	24:25～
三重テレビ	金	17:15～	熊本朝日放送	日	24:00～
奈良テレビ	土	23:30～	仙台放送	火	24:10～
サンテレビジョン	木	08:00～	テレビ静岡	金	25:05～
テレビ和歌山	金	17:00～	福島テレビ	木	24:50～
岩手めんこいテレビ	水	25:00～	北陸朝日放送	日	24:25～
秋田朝日放送	日	23:55～	山口放送	土	25:25～
群馬テレビ	木	23:45～	日本海テレビ	木	24:45～
北日本放送	日	24:45～	沖縄テレビ	木	25:45～
テレビ埼玉	金	23:30～	高知放送	水	24:45～
千葉テレビ	金	23:30～	テレビ神奈川	日	23:30～
長野朝日放送	日	23:55～	青森放送	金	25:15～
鹿児島読売テレビ	土	25:35～	大分朝日放送	土	25:55～
広島テレビ	水	25:15～	札幌テレビ	火	25:40～

ロック音楽ROOTS

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	24:00～	長野朝日放送	日	24:25～
岐阜放送	土	24:00～	テレビ新潟	月	25:35～
びわ湖放送	金	24:30～	テレビ愛媛	月	25:20～
三重テレビ	火	24:35～	長崎文化放送	土	25:30～
奈良テレビ	土	24:00～	熊本朝日放送	土	24:30～
サンテレビジョン	金	24:30～	青森テレビ	日	24:35～
テレビ和歌山	土	24:10～	テレビュー山形	日	25:15～
岩手めんこいテレビ	木	25:00～	テレビ山梨	火	24:35～
秋田朝日放送	土	24:40～	テレビ高知	土	25:26～
群馬テレビ	土	24:00～	大分放送	月	24:30～
北日本放送	金	25:15～	琉球放送	日	24:50～
テレビ埼玉	金	24:00～	日本海テレビ	金	25:15～
千葉テレビ	日	23:30～	南日本放送	月	25:00～
静岡第一テレビ	月	25:00～	札幌テレビ	日	25:15～
テレビ金沢	日	25:15～	福井放送	火	25:15～
山口放送	土	25:55～			

札幌テレビは4月2日から放送開始

J-ROCK TRIBUNE

MAY Vol. 12

voice

私らしいファンでありたい

4月号のVOICEにあった密室さんの言葉は、心にグサッと来た。それは一番言ってほしくなかった。少し前から抱いていた不安と信じたくなくて打ち消してきた想いと同じだったからだ。

私がBUCK-TICKと出会ったのは、約1年前TVで「唄」を聴いた時だった。私が求めていたのはこれだ、と思ってすぐに好きになった。B-Tの本「LOVE ME」を読んだ時には、彼らのことが少し分かって、一歩近づいたような気がしてすごく幸せだった。でもここ最近、雑誌のインタビューを読んだ後、何だか心に引っかかるものがある。彼らは「ファンはファン。それ以上じゃない」みたいな、うまく言えないけどすごく距離を感じた。ある雑誌のファンへのメッセージでは、「君は君、俺は俺」というのがあった。それってすごく他人行儀だと思う。そりゃ他人なんだから仕方ないかもしれない。それを悪いとは思わないし、アッちゃん自身の言葉だし、それはそれでいいのだけど、寂しく思った。それで密室さんのように「ファンを必要としていない」とは思えないけど、ファンをすごく大切にしているとも思えなかった。密室さんの気持ちも分からないわけじゃない。

ただ全くファンを必要としていない、っていうのはどうかと思う。だって自己満足ならメジャーデビューしないで勝手にやってりゃいい。でもライブをしたりCDを出したりするということは、だれかに聴いてほしい、見てもらいたいと思うからじゃないかと思うし、そう信じたい。もちろん曲は大好きだし、今の私に彼らの音のない生活は考えられない。だから曲だけでなくBUCK-TICK自体を好きでいたいと思う(今だってもちろん好き)。もっとファンを大切にして、近くに感じたがってくれるアーティストもいる。けどBUCK-TICKはこうなんだ、とそのまま受け止めていきたい。そして無理しないで自分らしいファンでありたいと思う。(投稿・千葉・ペンネームLOVE ME・♀・15歳)

voice

怒らずにはいられない

カラオケが普及しまくった今の世の中、ちょいと"音楽"をカラオケの対象としか考えられないおバカさんたちが増えてきてはいませんか? そう思いませんか? J-ROCKの読者たちよ。別にカラオケが悪いって言ってるわけじゃないんだよ。うん。歌うのは楽しいことだし、私だって行くし。しかし、しかしだ。ろくに音楽を聴く(感じる)ことも出来ず、自分がカラオケで歌うためだけに歌を覚えるヤツらに限って、人が愛するミュージシャンをけちょんけちょんにけなしてくれたりする。

よくこんな会話の後に思う(怒る)。「私○○好きなんだ。ライブ最高だったよ」と私が言う。周りで話を聞いていたヤツらが寄ってくる。別に興味がなかったら、流してくれて構わない。ナマ返事でも超OKなのだ。なのに「え〜、あんなののライブ行ったのお」から始まって、キライだ、ダサイだ、言いたい放題言った揚げ句の果てに「顔がヤダ」。テメエらいい加減にしろよ…。何で君たちにそんなこと言われなきゃいけないの。そのアーティストのアルバムを聞いたこともないくせに。ロックのすごさも理解できないくせに(カワイソウな人たち)。ギターとベースの音を聴き分けることも出来ないくせに〜。顔がヤダ? あのね、ミュージシャンはジャニーズを目指してるわけじゃないんだよ。しかもテメエらみたいなブスに言われたくねえよ(私って言い過ぎ?)。そしてこいつらはカラオケで自分が歌いやすい曲だけ覚えて、「音楽っていいよね」とか知ったかぶりをぬかしながら、ロックンロールプレイヤーにさげすみの眼差しを向ける。最悪だ。

何度も言うが、カラオケで歌いやすい曲が悪いと言っているわけではけっしてない。私が許せないのは、自分たちには理解できない音楽(たいていは「カラオケで歌いにくいじゃん」である)を、ダメな音楽と決めつけてけなしまくるという、根性の腐ったバカヤロウたちです。こいつらの口ぐせは、「チャートに入ってないじゃん」。おい、おまえたち。TOP10に入っている10組だけが、カッコイイと認められるべきミュージシャンなのか? それを判断して言い切る君たちは、何様なのですか? (しかも音楽の知識もほとんどないくせに)

はぁ〜。こういう人たち、きっと読者の方々の周りにも一人はいるでしょう? もう最近は、「別に嫌いでもいいよ。ロック嫌いならそれでもいいよ。私は君たちに構わないから。だから君たちも絡んでくるな。知ったかぶりするな。偉そうに語るな」と願う毎日だ。

私はロックを愛する者として宣言するぞ。「ロックをけなすヤツは、だれであろうと許さない。人が愛する音楽を、自分の狭い価値観だけで決めつけて、タチの悪い酔っぱらいみたいにワケの分かんないケンカをふっかけてくるヤツは、宇宙の彼方まで消えうせやがれ!」。あー、スッキリした。

(投稿・宮城・ペンネームマリー・♀・17歳)

●4月にリリースのミニアルバムを制作中のアインス・フィア。スタジオで歌入れ中のHirofumiを訪ねたが、時はまさしく本番直前! Hirofumiは歌詞を読みながら自分を集中させている所で、スタッフが何気なさを装っているものの緊張感が張り詰める雰囲気にこっちまでドキドキ。お酒を飲めない彼にスウィートなお菓子を持参したのだが、彼もこっちもそれどころではなく、2回ほど歌声を聴いた後「頑張ってください!」と言い残して退散してきた。そんな苦労の中作られているミニアルバム、完成が楽しみである。

●大阪ウォーホールでのライブ直前に、楽屋で筋肉少女帯の写真撮影を行った。立ち会ったスタッフの一人は、メンバーとは初対面。メイクをし、気合いを入れて出てきて、カメラを向けるとグッとにらみつける本城の迫力に、「機嫌が悪いのかな」と恐る恐る遠巻きに見ていたらしい。しかし撮影が終わった途端「やった〜、終わった〜」と急にニコニコする彼に「これがプロか」と感心(注:本城さんはやさしくて面白い人です)。その合間も大槻ケンヂは、ライブ中に見せた空手の型の練習を何度も繰り返していた。彼もプロである。

●日曜出勤をすると、なぜか多いのが読者やTVの視聴者からの問い合わせ。「先週のTVのクイズなんですけど忘れてしまって…」「ジュディ・アンド・マリーのベーシストの名前は何て読むんですか」などなど。日曜も、もちろん平日も、編集部が相談室を開いているわけではないので、そのへんご理解をよろしく!

●Xジャパンの取材に行ったときのこと。会場前でライターの到着を待っていたカメラマンにコスプレの女の子たちがカメラを渡して記念撮影を依頼。彼は「俺はプロだ。金もらうぞ!」と思いながら、「ハイ、もっと寄って〜」とひきつった笑顔の兄チャンと化したらしい。写り具合は、いかがだっただろうか?

●大阪で一日中いろんな取材を受けて、最後に本社に寄ってくれたトモフスキー。頭の中は"新作を語る"モードになっていただろうに、本誌の取材は"ラーメン"がテーマで、疲れている頭はなかなか回転しづらかったよう…。何度も「う〜ん、う〜ん」と考え込み、「こんな話でまとまるの?」と心配しながら、ラーメンについて熱く語ってくれた。レコード会社のT氏が言うことには「でも、今日一日の中で一番輝いていた」らしい…。

voice

BUCK-TICK不満論への反証

4月号のVOICEの密室さんへ。たぶんあなたと同じ疑問を、長い間BUCK-TICKを見続け支えてきたファンなら感じたことがあると思う。密室さんは私と同年代だし、あなたのわだかまりもそれなりに共感できる。たぶんB-Tのことを真剣に考え、彼らの音楽と真正面に向き合えば向き合うほど、何か(言葉では表せない)心にガツンとくるものを感じるんだと思う。今まで好きであったB-T像を彼ら自身の手で破壊し、どんどんと先に行ってしまう。私たちファンだけが取り残されてしまう。そんな焦りがあるのかもしれない。でも私はだからこそB-Tの偉大さを痛感させられる。そしてだからこそB-TはB-Tなのだと誇らしく思う。

ある意味でファンに対し、はっきりと自分たちのスタイルを見せつけ、時に批判めいたことを言ってしまうのは、彼らが私たちファンに対して見せかけの偽善を取り除いた本当の姿で向き合い始めてくれたからではないだろうか。ファンサービスをして、ファンを喜ばせることの方が彼らにとってもプラスだし、その方がずっとラクなはず。それをあえてしないのはB-Tがファンに対して、彼らの音楽をもっと真剣に感じてくれと訴えているからだと思う。それだけ自分たちの音楽が、かけがえのないものだからではないだろうか。確かに彼らはプロだし、商業としての自覚に欠けるという批判もあるかもしれない。だけどそこに彼らの純粋なアーティスト性を強烈に感じるのだ。そしてこの確固たるアーティストとしての姿勢が、B-Tを音楽業界の中でも特別な存在として位置づけているのだと思う。そしてそのことは、何より彼らの音楽を聴けば実感できることだ。

密室さんが一番最初に「13、4歳のB-Tファンは、どこが良いと思っているのか」と感じた疑問には同意見だった。それもたぶん同じ理由で。自分の中学時代を考えると、その年代にはB-Tの今の音楽は重すぎるんじゃないかと思ったから。もちろん年齢に関係なく彼らの音楽を好きという人が増えることは喜ばしいことだが。

でも、もしB-Tが私が好きになった「TABOO」と同じような音楽スタイルで居続けたなら、今ファンでいるかどうか分からない。アルバムごとに変化し、ファンを裏切り続けるすごさこそ、B-Tの一番の魅力だからだ。密室さんも「確かに曲はどう考えても好きだ」と書いていましたよね?それだけで十分じゃないですか。いや、それだけなんですよ、B-Tのすごさは。周りのことに振り回されて、一番大切なことをはきちがえないでくださいね。B-Tのファンであるということは、彼らが急変化する度に共にその新境地を垣間見、いろんなことを考え、自分も成長していく。ある意味で、ファンもそれだけの真剣さと度量を要求されるのかもしれない。そしてそれだけすごいバンドなんだと思う、BUCK-TICKは。

(投稿・愛知・ペンネームまだまだ金魚・♀・22歳)

illustration
Asako Tashiro

4月号のTRIBUNEにひと言!

●B'zのセールスが気になるという、ちえみさんへひと言。私もB'zの大ファンで、やっぱりランキングが気になります。でもそれは本当にB'zを好きで応援しているからじゃないかな? オリコンやJ-ROCKのアーティストの人気投票などいろんな所で発表される度にチェックするし、1位だとうれしいよね。シングルやアルバムで週間セールス記録達成を知った時も、B'zを応援してきて本当に良かったと思ったし! 二人を尊敬してるし、私達が二人にできる一つの恩返しだと思って、これからも一緒に応援していきたいな!! (埼玉・B'z中毒・♀・23歳)

●私の好きなバンドはビジュアル系って呼ばれているバンドです。「顔だけってファンも多い」と言ってる人もいるけど、私も最初はそうでした。でも、今は音楽が好きでファンをやっています。だから私は最初好きになるのは顔でもいいと思います。それで音楽を聴いてダメだと思ったら、自然に離れていくと思うし。でも、音楽も聴かないで「ファンや」っていうやつには、すごい腹立つし、私はファンってことを認めません。絶対に…!

(兵庫・紅蓮・♀・17歳)

●ライブでファンの人たちがする"手振り"について書かれていましたが、私はEins:Vierのライブに行くと、心から手を差し伸べてしまいます。メンバーや曲やライブの雰囲気すべてが愛しくて、この気持ちが届いてほしいと思い、手を差し伸べずにいられないのです。私のような人は多いと思います。

(埼玉・お琴・♀・20歳)

●「ベストアルバムが嫌い」というMARIさんへ。私はそうは思わないなあ。シングルを集めたベストアルバムでも、その一曲一曲はそのアーティストにとっても私達ファンにとっても大切な宝物なんだから。音楽って損とか得とかでは計れないものだと思う。「赤丸特価品」なんて言い方、あなたの方がアーティストにとって失礼だと思います。イヤだったら買わなくてもいいやん。私はもうすぐ出るWANDSのベストアルバムを、今からむっちゃ楽しみにしてます。

(大阪・あいびー・♀・17歳)

●4月号で「LUNA SEAのライブにXのコスプレの人が…」と書いていた。私はX JAPANのコンサートに今まで何度も行っているが、毎回LUNA SEAのコスプレの人を見ます。「これはちょっと」どころか…。どんなカッコで行こうといいと思う。大切なのは、中身だよ。

(奈良・ねーひでちゃん?・♀・18歳)

●密室さんのBUCK-TICKに対して思ってる事は、分かるような気もします。でも、ボクはB-Tを大好きになって5、6年たつのですが、今後B-Tがどう変わろうと、この気持ちは変わらないだろうし、ずっと信じていたいと思いました。やっぱりB-Tを好きなことに変わりはないよなっ! (和歌山・タロウ・♂・18歳)

●今までは、カラオケボックスでの発散が多かったが、近ごろはフルボリュームでヘッドホンして音楽聴くのが気持ち良い。音楽だけに集中して時間が過ぎるというのは、とてもぜいたくで良いね! 脳がシビレル。 (福井・zumi・♀・24歳)

●95.12.20~21のX JAPANのライブが中止になってしまった。延期ではなく中止だ。これについてメンバーからのコメントなども出ないし、とてもさみしい。楽しみに待っていたたくさんの人たちの気持ちや、遠方から来た人の高い交通費など、行き場のなくなったものがたくさんある。

(宮城・爆弾マン・♀・19歳)

●売るために作られた曲でなくても、ヒットチャートに出たらその曲は「売るためだけに作られた」だのと言われてしまう日本のミュージックシーン。だけど一体どれだけの人が、本当の音楽を分かってそういう事を語るのだろう。評論家を信じるより、自分の耳とHeartを信じて音楽を楽しみたいものだ。

(兵庫・Nao・♀・32歳)

●1曲違いとか通常盤と限定盤といった形でCDを2種類以上出されると、困ってしまう。全部集めるにはお金もかかるし…。少し売り方が汚いと思う。結局全部買ってしまうけど。

(群馬・紫音里・♀・18歳)

●アーティストと呼べる人が、今の音楽業界にどのくらい存在するのだろうか? 音楽は目に見えないし、形にも出来ない。だけど、聴いた人間一人ひとりの心の中で様々な形を作る。それが夢を追いかける勇気をくれたり、何かを心から信じる純粋さを取り戻させてくれることもある。こんな「感動」を与えてくれるアーティストが、「こいつスゲー。カッコイイ!」とうならせてしまうようなアーティストが、今は少なくなってきてる。退屈なヒットチャートが見たいワケじゃない。真のアーティストパワーを持ったアーティストが、その実力でバトルを繰り広げる。私はそういうものが見てみたい。

(岡山・チィ・♀・17歳)

●私は1年ぐらい前までビジュアル系と言われている人達をヘンケンの目で見ていました。「男なのにお化粧してる」とか「ど~せ、ワケわかんない歌でしょ」って勝手に決めつけていました。けれどGLAYの「生きてく強さ」を聴いて「こんなにいい楽曲聴いたの久しぶりだ~!!」って感動しました。あと、それまで「顔がカッコイイから」ってファンになっていた私が、初めて曲(歌)からファンになれたんです。まだファンになって3カ月だけど、ずっとGLAYを応援していきたいです。

(埼玉・ノア・♀・17歳)

●私はX JAPANのファンですが、コンサートへ行くのは生の演奏、生の姿を見に行くだけじゃなくて、Xのメンバーと同じ時を共有するために行きます。メンバー一人ひとりが小さすぎて見えないと思うけど、私はXのメンバーと過ごした時を一番大切にしたいと思っています。私は会場の広さなんて関係ないと思います。好きな人と同じ時間を過ごせるなんてステキだと思います。

(兵庫・GRACE chan・♀・18歳)

●インディーズバンドって本当にたくさんいますよね。その人達が次の音楽シーンを作っていくんだと思うけど、ライブを見てたら「自己満足なんじゃないの? 何がやりたいの?」ってよく思います。ステージでめちゃくちゃ暴れたり、思いっ切り化粧したりしてバンドの個性をアピールするのはいいけど、肝心の音楽に何も感じられなかったらバンドやってる意味なんてない!! ヘタでもうまくなろうと頑張っている本当に音楽が好きな人達は応援したいけど、「オレはバンドやってるんだ」っていう単なる自己満足な人達は、紛らわしいからライブしないでほしい。少なくてもお金払ってるんだからね!

(東京・インディ・21歳・♀)

●バックナンバーでDEAD ENDが紹介されてて、興味を持って2ndアルバムをレンタルしたんですが、なかなかのものでした! わが家でロックを聴くのは私一人ですが、こういうきっかけででも好きな音楽に行き当たるというのはうれしいですね。

(高知・Mie・42歳・♀)

●新しいドラマを作ろうとする、新しいCMを作ろうとする。主題歌は? CMソングは? 「このアーティストは売れてるし無難だから、今度もこの線でいっとけば間違いないだろう」そしてヒットする…という感じが今の音楽シーンにはあるように思えますが…。もっともっといいものを認めてほしいです。 (滋賀・Tears・♀・33歳)

●3月号のJ-BASSIST特集とっても良かったです。BUCK-TICKのベースの音がどういう音なのかすごくよく分かった。ちょっと音を勘違いしていました。THANK YOU!

(静岡・ﾕｰﾀ!ｲｶｽｿﾞ・♂・15歳)

●よくバンドのメンバーが雑誌で「ファンの子は知ってると思うけど」って言う時があるけど、そのことを知らない時「私ってファンじゃないのかな…」ってカナシクなってしまうの…。

(神奈川・瑠嫣・♀・16歳)

●理科の教科書などで、「上昇」という単語の上と昇の間に「杉」という字を入れて、ちょっとうれしくなってしまうのは私だけだろうか？　いや、絶対に他にもいるはずだ!!　（秋田・渡辺・♀・15歳）

●chatter boxを読んで、初めてビジュアル系だと言って偏見を持っている人もいるんだということを知りました。私はビジュアル系に対して、疑問どころか、特に感想もなかったので、化粧をやめたバンドがいても「化粧するの飽きたんかな」ぐらいにしか考えていなかったのですが。バンドのファンにとっても、そうでない人にとってもビジュアルって大問題だったんですね。今まで全く知りませんでした。（兵庫・中井久代・♀・20歳）

●私はYOSHIKIの生き様が好きです。彼ほど努力しているアーティストは、他にはいないと思います。それなのに、今は口先だけのバンドが多く、そんなに偉そうなことを言うなら行動に移せばいいのにと思ってしまいます。ファッションが地味になってきたのも、別に売れて大衆ウケを狙うためではなく、純粋に音楽だけを聴いてほしいからだと思います。ビジュアルで勝負ができるのは20代のうちだけ、30代はやはり実力勝負です。
（神奈川・野崎和美・♀・24歳）

●最近、王様とか女王様とか洋楽のパロディーもんって言うか、企画モノがハヤってるみたい。最初は面白がって聴いてた一人でしたが、やっぱりパープル、ツェッペリン、クィーンなど、ブリティッシュロック大好きな者としましては腹立たしい感じもする今日このごろ。正統的ロックナンバーを、ああまでもお笑い、イロモノ化してしまう感覚…。果たして、彼らは原曲のアーティストを尊敬してるのだろうか。ライブの余興などでやるのなら良いけど、公のメディアを通して活動するなんて、明らかにアーティストに対する挑戦、もしくは冒とく以外の何物でもない気がするのだけれど…。
（兵庫・どろソース・♀・26歳）

●私はLUNA SEAがすごく好き。最近、LUNA SEAはずいぶんと人気が高まっている。それはすごくうれしいんだけど、逆に「今のLUNA SEAは昔と違う」と言って離れていく人が意外なほど多いのはすごく悲しい。例えばRYUICHIが髪を切ったこと一つをとって「変わっちゃったんだ」とか言うのはどうかなあと思う。私には理解出来ないだけで、それも一つの考え方なのかもしれないけど、曲を聴いてライブを観れば、彼らの本質が変わってないことは分かると思う。ホントに彼らのことが好きならば。ドームすごく良かったです。
（青森・ヨーコ・♀・19歳）

●Eins:Vierのライブは、いつもニコニコしたLünaさんを間近で見られるし、優しく温かいベースラインが心地よいので、ぜひ体感してみてください。
（埼玉・Yukko・♀・22歳）

●黒夢を追っかけ始めて約1年。ライブを見た後、夜行に乗って帰り、そのまま仕事という生活を続けていたため6kgやせた。ついでに最近、清春と同じ髪型にしたが、だれも気づいてくれない。赤く染めたら気づいてくれるだろうか。
（愛知・藤田佳子・♀・23歳）

●最近、私の周りは年下ばかり。でも30になっても、40になってもライブに行ってると思うなあ。コスプレして（笑）。（大阪・祈蘭・♀・22歳）

●最近周りの人に「GLAYの今度の新曲いいよね」とか「この曲だけは好き」と言われる。オイオイ、どーせおまえら「グロリアス」しか聴いたことがないんだろ？ そんな知ったような言い方はやめてほしい（ついでに一発屋というヤツも許せん）。ホメられるのはうれしいけど…。（埼玉・愛・♀・16歳）

●この雑誌の影響か、最近聴き取りにくいベースの音なども意識して音楽を聴くようになった。でもやっぱり稲葉さんの声や松本さんのギターの音についつい耳を傾けてしまって、明石さんのベースの音まで耳が追いつかない（?）んだ。まだまだ未熟なのかなあ。（福井・戮・♀・16歳）

●どうしてみんなジャニーズが好きなんだろう。好きなのはいいけど、どうして私がLUNA SEAやBUCK-TICKが好きだったら変なんだろう。みんながアイドルを好きにならなくてもいいと思うんですけど…。（福岡・バク・♀・13歳）

●あるhydeさんの写真が、うちのお兄ちゃんにちょっとだけ似てたので言ってみると、調子に乗って「オレってラルクのhydeに似てんねん」と友達に言いまくってました。ラルクファンのみなさん、hydeさん、心からお詫びします。
（京都・幻のKIOTO・♀・16歳）

●近ごろTOMOVSKYがとても気になります。私はカステラ時代のトモさんを知らなかったのですが、曲・詞・名前も含め、彼のセンスは飛び抜けたものだと思います。ミトンの手袋でギターを持つ彼が好きです。（東京・ヒロエコス・♀・25歳）

●私、絶対30代40代になってもLUNA SEAのライブに行こう。そのころLUNA SEAがまだ活動してるか？　当たり前っす!!　そう信じさせるパワーがあの5人にはあるんです。本当はそれだけでいいんです。（長野・つるばら・♀・17歳）

●ずーっとビジュアル系のファンの人達って怖い人が多いのだろうなあと思っていましたが、よく考えてみると今の私も一般ではそう呼ばれている（そのアーティスト自身の意識や本質とは違って）アーティストを応援しています。やっぱり良いものは、ジャンルに関係なく良いのだなあとつくづく思いました。こだわるのもいいけれど、私はいろんな人の音楽を聴いて良かったと思っています。
（兵庫・美穂・♀・23歳）

●chatter boxに来るアンケートって、ちゃんと読んでいるのかな。ハガキ出してるけど、一回も載ったことがありません。読んでること信じます。
（三重・PAL・♀・25歳）

●愛されるファンになるってどういうこと？　どうすればなれるの？　何をすれば認められ、許される？　自分が愛してスキになれば、愛されることになるのカナ？　ファンってどこまで許されるの？　最近それが分からなくなってきてしまいました。
（神奈川・美夜・♀・21歳）

●私はイエモンによって、ベース&ドラム&ギターの良さを知った。イエモンを知るまでは、歌の歌詞が良いか悪いかだけで、その歌手やバンドの人達を判断していた。今じゃ洋楽も聴くようになった。これからは、いろいろな人の歌&音楽を聴いていきたい。イエモンに感謝、感謝!
（東京・ミヨ・♀・16歳）

●好きな音楽っていうのは、人によって違うけど、いい加減に聴く人は許せない。人の思いを、伝えたいことを真剣に受け止めなきゃ。ロックな野郎はみんな仲間さっ、フッ。（兵庫・Asaru・♀・16歳）

●今までロックになんて興味なかったんだけど、21にしてザ・ハイロウズにはまってしまった。chatter boxを見ても10代が大半を占めていて私は悲しい…。今度、人生初のコンサートに行くんだ。楽しみだ～!（大阪・ごろー・♀・21歳）

●ファン歴の短い人のことをいろいろ言う人に聞きたいです。ファン歴長いのってそんなに偉いわけ？　長さより愛の深さが大事だと思います。
（新潟・淫壊・♀・17歳）

●Eins:Vier大好きです。夜、寝る前に必ず聴きます。朝起きると必ずEins:Vierの曲が頭をグルグル回ってる。ヒマがあれば写真を見て、Yoshitsuguさんの笑顔を思い出して一人でニヤついています。こんな自分が恐ろしい。あ、でも私はHiroさんファンです。（岐阜・アインス・♀・17歳）

●大好きなバンドが解散して、どれほどの月日が過ぎたんだろう…。あの歌声が春に戻ってくる!! KYO、TUSK、私の大好きな季節に大好きな人が戻ってくる!!　春よ早く来い!!　早く逢いたいよ!!
（滋賀・櫻・♀・19歳）

●娘と私は黒夢の大ファンです。でも先日、娘が10週間のオーストラリア短期留学に行ってしまいました。私は黒夢の事を話す相手がいなくてとてもさみしいです。（香川・黒夢の母・♀・48歳）

●私はLUNA SEAが心の底から大好きです。ライブとかにも行きたいです。でも、まだ一度もライブというものに行ったことがないのです。だから悩みがいっぱいあるんです。まずどんな服で行ったらいいのか？　髪は染めた方がいいのか？　それとたくさんいるファンの人達のノリについていけるか…。くだらない悩みばかりだけど、でもいつか必ずLUNA SEAのライブに行くぞ!!
（岐阜・グリオ・♀・16歳）

●私は今ギターの練習をしていますが、全く上達しません。ラルクのkenさんとかは、やっぱり自分一人でうまくなっていったんでしょうか。それともギター教室へでも？　私はなーぜこんなにヘタなんだー!うりゃあ～。
（大阪・あふろなみへい・♀・16歳）

●ライブへ行くといつも思います。開演時間が過ぎているのに席に着かない人。「アンコール」と言ってくれない人。ゴミを会場に捨てて帰る人。自分がとっている行動を、もう一度考えてみてください。（群馬・グロス・♀・16歳）

●BUCK-TICKのギターは全部マスターしたい。今井寿に近づくために…。
（千葉・ユウタ・♂・17歳）

●まだLUNA SEAファンになりたてのころ。新聞のラジオ欄の9:50～10:00くらいまでの“J”というのを見て、テープまで用意してバッチリだったのに…。ちゃんと“リーグ”ぐらいつけろ!!　紛らわしい…。（大阪・じゅっっっ・♀・16歳）

●THE YELLOW MONKEYのファンになってまだ間もないですが、彼らのファンをしている自分がとてもカッコ良くて大好きです。きっとファンをしているバンドは違ってても、みんな同じ気持ちなんでしょうね。（高知・EMMA・♀・18歳）

●私の周りにはハヤリに流されてる人が非常に多くて、本当にイイ音楽に巡り会えてる人ってごくわずかだと思う。「ハヤリの音楽を知ってないと周りにバカにされる」って思って、どんどんカラオケのレパートリー増やしたり、「ハヤってるから」ってだけでCD買ったりとかして、ずいぶんムダなことしてる人がいるけど、ハヤリだけじゃなく、もっと広い視野で音楽を見てほしいな。
（滋賀・ハイドン・♀・14歳）

●チケット料金の設定が、最近とみにおーざっぱになってきたように思う。特にROCK系!!　ホールクラスならまだしもアリーナクラスまで一律。ドームに至っては、かろうじてS席とA席に分かれていても、一体どこがA席なんだあー!? と思うぐらい限りなくS席が多い。これは単に手間を省くためなのか…。野球観戦用の料金設定は、涙が出るくらい細かいというのに。臨場感のあるなしを、せめて価格ぐらいで納得したいと思うのは私だけ??
（東京・いろは・♀・28歳）

●アーティストのライブに行った時に気軽に声をかけられる人になりたい！　だって同じアーティストがスキなんだから、友達になりたいでしょ。
（埼玉・みづき・♀・17歳）

chatter BOX

3rd FILE

TEXT by Keiko Murata
PHOTO by Makoto Kanehara

SUBculture

**音楽が、それぞれのアーティストの生き方、考え方を音というフィルターを通して伝えているものである以上（時としてそうでないものもあるが…）、彼らの人間性とその音楽を別ものとして考えることはできない。
アーティストたちは日ごろ、音楽以外のどんなことに興味をひかれ、何を感じて、何を考えているのだろうか。このコーナーは、彼らの音楽に対するストレートな思いから、あえてポイントを少しはずし、それ以外の様々なモノやコトに託された強烈な「こだわり」や「思い」を、赤裸々に語ってもらうことで、その人間性を感じる場を提供したいと思う。
ここに語られる心情も、彼らの心から生まれる音楽に触れる一つの貴重なチャンスであるに違いないのだ。**

今回、登場してくれるのはトモフスキー。彼がこだわっているものはラーメンだ。それもインスタントとかカップじゃないラーメン屋のラーメン。ラーメン屋のラーメンとひと口に言っても、お店は全国各地にあるし、味の種類も様々。そんな中で彼は、好きなラーメンについて『ただ単に味が良けりゃ、”おいしいラーメンを食べさせるラーメン屋“っていうわけじゃない』と、味以外にもこだわりがあるようだ。時に怒りまで込め熱く語った彼が、おいしいと納得できるラーメンとは…。

そして、このこだわりと怒りが、どう音楽につながるのか…。

「ラーメン屋を回るのが好きなんだよね。俺は『このラーメンが絶対おいしいと思う』ってみんなに自慢したいっていうかさ。でも今はスープだったらこのお店がおいしいとか、麺（めん）で好きなのはこの店とかって、すごく部分的なんですよ。そうじゃなくて総合的に『これだ！』っていうラーメン屋を探し続けてるの。で、その根本にあるのは一生懸命に作ってるラーメン屋。一生懸命作ってるか作ってないかは、食べたら分かるんだよね。例えばバイトの子がさ、ただマニュアル通りにスープ1、だし2とか、麺を2分ゆでてシャシャシャッ、ポンポンポンって機械的にやっちゃうようなラーメン屋は嫌い。そういうのは絶対おいしくないんだよ。やっぱり作り込んである、手の込んでるラーメンはおいしいんだよな。でも、手の込んだって言っても“高級な”っていうんじゃなくて、材料がいくら安くても俺じゃ作れねえなみたいなね。よく、空港なんかに行ったらお持ち帰りラーメンとかって売ってるじゃん。例えば、九州とかに行ったら“博多ラーメンのお持ち帰り”とか。あれと同じようなやつを出すラーメン屋がたくさんあるんだよ。『あっ、これってお持ち帰り九州ラーメンじゃん』みたいなさ。そういうのはダメです、許せませんね。

あと、店の人の態度とかも気になるの。いくらおいしくて評判でも、注文しても何にも言わず、聞こえてるのか聞こえてないのか分かんないようなラーメン屋は嫌いだしさ。やっぱり『いらっしゃいませ』は言ってほしいよ。……言わなくても、注文したら『はい』ぐらい…、あんだよ～、有名なラーメン屋でさ、なんか態度の悪いのを売りにしてるようなところが。店員の態度の悪いのが、ラーメン屋の頑固さを表してるみたいなさ。

俺の好きなラーメンはね、だしとかスープをその日の朝からちゃんと起きて作ってるやつ。面倒くさがりのラーメン屋って、前の日の使い足しとかしてるから汁がどんどん濁っていくじゃん。それに、ただ豚臭かったらいいんだっていう九州ラーメン屋も多くて、頭にきちゃう。

あのね、俺の住んでる近所に、すごく気になるおじさんがやってるラーメン屋があって。ラーメン自体は特においしいわけじゃないんだけど、そこのおじさん、すごく一生懸命作ってるの。店に入ると『いらっしゃいませ』ってちゃんと言ってくれて。で、注文を書く紙を持って俺の座ってる真正面に立ってね、俺がどれにしようかなって迷ってるのをじっと見てるの。それで『みそラーメン』とかって言ったら、『はい、みそラーメンですね』って。ほんとに一生懸命なんだよ。だからもう、それだけで行ってしまう。だから、味だけじゃないね。でね、おじさんすごく腰が低いから、きっと脱サラしたばっかりでラーメン屋を始めた初心者なんだろうなって思ってたの。なんか麺のゆで方も甘いからさ。ある日、おじさんに『何年ぐらいやってるんですか』って聞いたら、もう20何年やってるって（笑）。ワァ～って感動してね。20何年やってるのに何でこんなに低姿勢なんだろうっていう。人に打たれて、そこのラーメンはよく食べに行くんだよね。だって、丁寧にやってるもん。ただ、麺のピントがズレてんだよね。ほんとにゆで過ぎっていうくらいゆでてるから。それだけ、おじさんが柔らかい麺を好きなんだろうね（笑）。だけど、そこのピントが合ってないだけで、おじさんは一生懸命だからいいの。

結局、ラーメン屋ってさぁ、音楽を作るアーティストと同じなんだよ。そう、アーティストもラーメン屋も同じ。だって、一生懸命に作ってない音楽も聴けば分かるもん。ラーメンも音楽もそうだけど、何を作るにしても手抜きをするやつは嫌い。ダメだよ～、一生懸命作ろうよって感じだね」

profile

TOMOVSKY

トモフスキーこと、オオキトモユキは、曲作りはもとより、ジャケットのイラストも自分で手掛けるマルチアーティスト（バックに写っている絵は彼の作品）。彼が現在までに発表したミニアルバムは、一人で制作した『WALTZ』と、バンド編成による『TEAM』の2枚。どちらも飾り気のない素直な詞と、ほのぼのとしたメロディーラインで彼独自の世界を聴かせている。そんな彼の最新アルバム『ネガチョフ&ポジコフ』では、楽曲によって一人だったり、バンド編成だったりと、いろんなトモフスキーが楽しめるのだ。

撮影協力：タンクギャラリー

単なる音楽ファンである僕は例に漏れず音楽雑誌が大好きだ。当然様々な音楽情報が得られるのが最もうれしいのだが、同時に、聴覚に訴える音楽を半ば強引に視覚的に写真や文字で読者に伝えようとする、"けなげ"で"はかなげ"な姿がたまらなく愛しい。毎月毎月手にする愛すべき様々な音楽雑誌(当然このJ-ROCK magazineも含む)。その数々の音楽記事や雑誌にまつわる出来事を、単なる素人音楽好きの目で観察し、あくなき挑戦に"全く勝手に"一喜一憂してみたい。礼儀知らずな奴、業界のしきたり知らずのバカ者などと攻撃せずに、せっかくだから何とかの独り言と思って一緒に楽しんでもらえたら幸いだ。

●A誌でクレイズの瀧川一郎と藤崎賢一が「ライブは楽しいからやっているのではなく、客を楽しませるためでもなく、自分の歓びや高ぶりのため。ライブを盛り上げるために客を持ち上げて"おまえら最高!"なんて言いたくない。本音でやってこそ、本当に伝わるものが伝わる」といったことを語っていた。「また客に嫌われる」と言いながらも、自分たちの姿勢を本音ではっきりと口にする彼らにはとても好感が持てる。

ライブやファンに対しては「これが正しい」という答えはもちろんないが、だからこそアーティストの考えや姿勢をはっきりと見せてほしいところでもある。「ファンが何よりも大切だ!」と言うのも良し、「ライブは客を楽しませるためにやってる」と言うのも良し。決まりがないからこそ、自分たちがこうだと思う道を突き進んでいってほしい。それがファンのためであり、自分たちのためなのではないだろうか。

●音楽誌を読んでいると、次から次へと出てくるバンド名が妙に気にかかる。コニー・アイランド・ジェリーフィッシュ、XX-ish(イッシュ)、ミッシェル・ガン・エレファント、グニューツール、カスケード…。「いくら何でも…」と感じるものから、思わずうなってしまうものまで様々であるが、何だかんだ言っても、音楽にホレ込み、慣れてしまえば愛着を感じるもの。要は、音楽で頑張ってもらうしかないのだ!

●発売未定状態でファンをやきもきさせた楽曲「JAM」がリリースされることになり、各誌を総ナメ状態のザ・イエロー・モンキー。「JAM」発売までのいきさつを語る中、R誌で吉井和哉が「一番進歩してるのはリスナーであり、消費されるための曲かそうでないかは分かる」「自分たちの音楽をコンパクトにしたり、トゲを削るようなことはしたくない」というようなことを語っていた。彼らだからこそ実感でき、発言できる言葉だろう。

音楽という名で呼ばれるものは幅広いが、その中身は様々。しかし僕たちはその中身を吟味し、選ぶことが許されているリスナーである。その特権は生かされているだろうか。吉井和哉の言う進歩したリスナーであるためにも、耳を肥やし真の音楽を聴き分けていきたいものだ。

●"解散していなかった"というコピーを付けて、O誌に掲載された筋肉少女帯のインタビュー。その中で筋少が長くやって来れた理由として、同年代である彼らの中で懐かしく感じるものや「これってあれに似てるなあ」という感覚が共通しているということが挙げられていた。

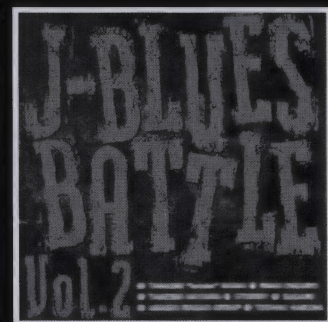
案外バンドが長く続く秘けつってものは、僕たちが友達と付き合うような単純で簡単なことなのかもしれない。例えばどんなによく遊ぶ友達でも、自分の好きなものや良いと感じるものが分かってもらえないと心を閉ざしてしまうように、一緒に音楽を作り出しているアーティストにとってはそんな些細(ささい)なことがさらに大きく影響するのだろう。解散の理由をうまく説明できないアーティストも多いが、実はこんなところに原因があるのかも…。

●C誌に連載されている山下達郎のコラムで取り上げられていたのが、"音楽シーンにおける必然性のない、不可解な流行"。例えばロックのライブでは、1曲目から立って聴くことが当然とか、ステージをスモークで覆わなければロックじゃない…など、実は何も根拠や必然性のないことを、アーティスト、観客、スタッフなどすべての人々が当然のように受け入れてしまっている現実を彼は嘆いている。

そう言われれば、大ホールで行われるロックのライブでは、曲を聴く前からどうして立ち上がるんだろう(まあ、アーティストだって1曲目から静かな曲を持ってくることはあまりない)。そんな行為がロックとどういう関係があるんだろう…。改めて、自分自身も"音楽シーンにおける必然性のない、不可解な流行"を無意識に受け入れ、踊らされていることが分かり大ショック! 他にも気づいていないことはないか、じっくり考えてみたい。

Akira Sueda
末田晃

the roots of rock

本誌は、全国31局のＴＶ放送網でオンエア中の「ロック音楽ROOTS」のスポンサーとして番組を提供している。
洋楽の場合と同様、Ｊロックを語る場合も、ロック・ミュージックのルーツとしてのBLUES（番組内では発音通り「ブルーズ」と言っている）を見つめることで、その本質が見えてくるのではないかと考えるからだ。
番組はBLUESからリズム・アンド・ブルース、ソウルへの音楽的発展の歴史はもとより、それを源流として隆盛を極めたブリティッシュ・ロック、アメリカン・ロックなどをひもとき、現在われわれに身近な「ロック」の正体を提示しようという意欲的な内容となっている。
本誌では、そこからこれまであまりにも不明瞭だった、Ｊロックの将来の道筋が見えてくるかもしれないと考えている。
61ページに放送各局とそれぞれの放送時間帯が一覧されているので、本誌と併せてぜひ番組をご覧いただきたい。

『J-BLUES BATTLE Vol.2』

本欄で以前に紹介したコンピレーションアルバム『J-BLUES BATTLE Vol.1』の続編『Vol.2』が5月下旬に発売される予定とのこと。インディーズレーベルのアイテムながら前回、B'zの稲葉浩志の参加でが然盛り上がっただけに、今回も参加者が気になるところ。さっそくその中身を取材させてもらった。

実のところ現時点では、不透明な部分が多いが、どうやら目玉として大黒摩季が参加するらしい。で、どんな曲を歌うのか？　聞かせて聞かせて、のお願い攻撃で「じゃ、ちょっとだけ」ということになり、テープで耳にした曲は、ココ・テーラーの「Love Me」。

原曲よりさらにハイテンポのファンキーなアレンジ。思わず踊りだしたくなるような軽快さだ。バックにギター、ベース、ピアノに加え、トランペット、トロンボーン、サックスを配し

てノリの良さを前面に打ち出している。

「夏女」のイメージがある大黒は、ハイテンポといえばラテンっぽいアレンジの楽曲が目立つのだが、ここではハイトーンで伸びる歌声を生かし、ブルース色の強い名曲に挑んでいる。

その大黒の参加にあおられてか、もう一人、特別に参加したというのが葉山たけし。最近の大黒のシングル「あぁ」では、アレンジャーではなくプロデューサーとしてクレジットされている、ヒットメーカーの一人だ。何と彼はエルモア・ジェームスの「Dust My Broom」で十八番のギターだけでなく、ボーカルを披露している。バックバンドなし、アコースティックなリズムギターとリードギターだけのシンプルな編成ながら、うまみのあるアレンジに、どちらかと言えばソフトな歌声をはわせている。ギターもいつになくテクニカルに主張し、アーティストとしての存在感が強く感じられる仕上がりだ。やっぱ、ちょっと聞いただけでも心地よさを感じるのは、打ち込みのない生音のお陰だろうかね。エエわ、この手のブルースって。

ナヌ？ もうこれ以上聞かせてくれないの？ ダメ？ あ、そう・・・。ケチ！

というわけで、残念ながら残るインフォメーションは参加アーティスト名だけ。ベテランの永井隆、AMG（明石昌夫グループ）、以下グラン・カフェを拠点とする若手・春名俊希、ストーミーほかとのこと。なお、『J-BLUES BATTLE Vol.2』についての問い合わせはブルージー（06-212-0660）まで。

［文・里居正裕］

J-ROCK ORIGINAL CHART

THE MONTHLY CHART OF [J-ROCK ARTIST CD 50]

本誌3月号アンケートハガキによる読者投票と全国32局で放映中の本誌協力テレビ番組「J-ROCK Artist Count Down 50」の2月9日～3月1日（4回）オンエア分の投票による月間総合順位をお届けする。次回締め切りは4月26日、さあ、キミの投票でチャートを変えよう。本誌とじ込みのアンケートにセレクトアーティストの名前を1名書いて送ってほしい。抽選で毎月30名様にオリジナルステッカーをプレゼント！

	ARTIST	得票数
31	ZYYG	256
32	GARGOYLE	241
33	甲斐よしひろ	234
34	Mr.Children	222
35	MANISH	218
36	奥田民生	215
37	PERSONZ	198
38	DEEP	182
	D.T.R	
40	NOKKO	171
41	Valentine D.C.	158
42	DREAMS COME TRUE	144
43	SLY	142
44	斉藤和義	141
45	nuvɔ:gu	129
46	生沢佑一	125
47	JUN SKY WALKER(S)	121
48	THE MODS	118
	小沢健二	
50	SUPER JUNKY MONKEY	114

	ARTIST	得票数
11	X JAPAN	542
12	氷室京介	509
13	大黒摩季	487
14	CRAZE	461
15	ZARD	453
16	THE STREET BEATS	446
17	DEEN	423
18	布袋寅泰	411
19	modern grey	395
20	FEEL SO BAD	382
21	筋肉少女帯	377
22	DER ZIBET	361
23	THE MAD CAPSULE MARKET'S	354
24	BLANKEY JET CITY	346
25	SIAM SHADE	322
26	PAMELAH	305
27	JUDY AND MARY	296
28	FIX	281
29	CHARA	275
30	media youth	274

1ST **LUNA SEA** 1138

2ND **L'Arc~en~Ciel** 1005

3RD **WANDS** 880

4TH **B'z** 832

5TH **黒夢** 723

6TH **THE YELLOW MONKEY** 711

7TH **T-BOLAN** 665

8TH **Eins:Vier** 608

9TH **BUCK-TICK** 578

10TH **GLAY** 557

順位	名前	バンド
1st	SUGIZO	LUNA SEA
2nd	INORAN	LUNA SEA
3rd	ken	L'Arc~en~Ciel
4th	柴崎浩	WANDS
5th	松本孝弘	B'z
6	菊地英昭	(THE YELLOW MONKEY)
7	今井寿	(BUCK-TICK)
8	HIDE	(X JAPAN)
9	五味孝氏	(T-BOLAN)
10	布袋寅泰	
11	HISASHI	(GLAY)
12	Yoshitsugu	(Eins:Vier)
13	SEIZI	(THE STREET BEATS)
14	星野英彦	(BUCK-TICK)
15	瀧川一郎	(CRAZE)
16	倉田冬樹	(FEEL SO BAD)
17	TAKURO	(GLAY)
17	田川伸治	(DEEN)
19	広瀬さとし	(SPAED)
19	浅井健一	(BLANKEY JET CITY)

VOCALIST 20

順位	名前	バンド
1st	RYUICHI	LUNA SEA
2nd	hyde	L'Arc~en~Ciel
3rd	上杉昇	WANDS
4th	吉井和哉	THE YELLOW MONKEY
5th	櫻井敦司	BUCK-TICK
6	稲葉浩志	(B'z)
7	清春	(黒夢)
8	森友嵐士	(T-BOLAN)
9	氷室京介	
10	Hirofumi	(Eins:Vier)
11	TERU	(GLAY)
12	ØKI	(THE STREET BEATS)
12	TOSHI	(X JAPAN)
14	坂井泉水	(ZARD)
14	大黒摩季	
16	浅井健一	(BLANKEY JET CITY)
17	藤崎賢一	(CRAZE)
18	ISSAY	(DER ZIBET)
18	池森秀一	(DEEN)
18	甲斐よしひろ	

順位	名前	バンド
1st	J	LUNA SEA
2nd	tetsu	L'Arc~en~Ciel
3rd	人時	黒夢
4th	廣瀬洋一	THE YELLOW MONKEY
5th	上野博文	T-BOLAN
6	JIRO	(GLAY)
7	樋口豊	(BUCK-TICK)
8	Lüna	(Eins:Vier)
9	沢田大司	(D.T.R)
10	TAKESHI"¥"UEDA	(THE MAD CAPSULE MARKET'S)
11	HEATH	(X JAPAN)
12	飯田成一	(CRAZE)
13	恩田快人	(JUDY AND MARY)
13	照井利幸	(BLANKEY JET CITY)
13	大橋雅人	(FEEL SO BAD)
16	HAL	(DER ZIBET)
17	栗林誠一郎	
17	中村正人	(DREAMS COME TRUE)
19	TOSHI	(GARGOYLE)
19	八田敦	(DEEP)

1月27日から2月26日の間に寄せられたアンケートハガキを基にチャートを作成した。また、各パート別ランキング・ベスト20のデータを集計した人気者ランキング・ベスト30も併せてご覧いただききたい。

順位	名前	バンド
1st	真矢	LUNA SEA
2nd	sakura	L'Arc~en~Ciel
3rd	YOSHIKI	X JAPAN
4th	菊地英二	THE YELLOW MONKEY
5th	青木和義	T-BOLAN
6	ヤガミトール	(BUCK-TICK)
7	Atsuhito	(Eins:Vier)
8	宇津本直紀	(DEEN)
9	中村達也	(BLANKEY JET CITY)
10	菊地哲	(CRAZE)
11	MOTOKATSU	(THE MAD CAPSULE MARKET'S)
12	MAYUMI	(DER ZIBET)
13	山口"PON"昌人	(FEEL SO BAD)
13	太田明	(筋肉少女帯)
13	樋口宗孝	(SLY)
16	JUNJI	(SIAM SHADE)
17	YUKIHIRO	(元DIE IN CRIES)
18	NAO	(BY-SEXUAL)
19	KATSUJI	(GARGOYLE)
19	五十嵐公太	(JUDY AND MARY)

人気者ランキング

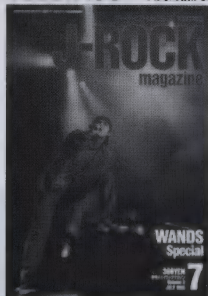
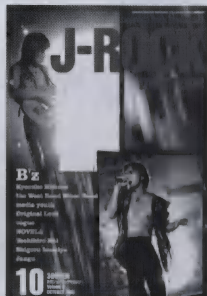
順位	名前	バンド
1st	真矢	LUNA SEA
2nd	J	LUNA SEA
3rd	RYUICHI	LUNA SEA
4th	sakura	L'Arc~en~Ciel
5th	SUGIZO	LUNA SEA
6th	INORAN	LUNA SEA
7th	tetsu	L'Arc~en~Ciel
7th	人時	黒夢
9th	hyde	L'Arc~en~Ciel
10th	ken	L'Arc~en~Ciel
11	柴崎浩	(WANDS)
12	松本孝弘	(B'z)
13	上杉昇	(WANDS)
14	YOSHIKI	(X JAPAN)
14	菊地英二	(THE YELLOW MONKEY)
16	吉井和哉	(THE YELLOW MONKEY)
17	青木和義	(T-BOLAN)
18	木村真也	(WANDS)
19	櫻井敦司	(BUCK-TICK)
20	稲葉浩志	(B'z)
21	清春	(黒夢)
22	菊地英昭	(THE YELLOW MONKEY)
23	今井寿	(BUCK-TICK)
24	廣瀬洋一	(THE YELLOW MONKEY)
25	上野博文	(T-BOLAN)
25	森友嵐士	(T-BOLAN)
27	HIDE	(X JAPAN)
27	JIRO	(GLAY)
29	五味孝氏	(T-BOLAN)
30	ヤガミトール	(BUCK-TICK)

back numbers

1995.1月号～(創刊準備号)

氷室京介 / TERU'S SYMPHONIA / DER ZIBET / 夜来香 / PSYCHEDELIX / 山岸潤史 / 矢沢永吉 / はっぴいえんど / HISTORY OF 松任谷由実

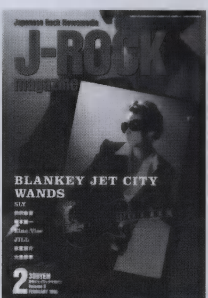
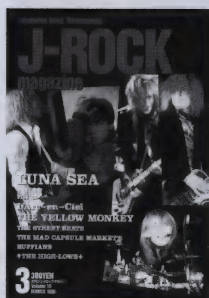
FEEL SO BAD / 大黒摩季 / vogue / BAHO / Valentine D.C. / SUPER JUNKY MONKEY / 渡辺美里 / 筋肉少女帯 / GLAY / HISTORY OF BOØWY

1995.7月号～(書店にてお求め頂けます)

WANDS / GARGOYLE / PERSONZ / Eins:Vier / THE STREET BEATS / 外道 / 近藤房之助 / SOUL FLOWER UNION / DOG FIGHT / HISTORY OF INDIES BOOM

B'z / media youth / Original Love / vogue / the West Road Blues Band / NOVELA / 甲斐よしひろ / 泉谷しげる / Jango / HISTORY OF 氷室京介

筋肉少女帯 /SOUTHERN ALL STARS / BUCK-TICK / BLANKEY JET CITY / FEEL SO BAD / GLAY / BOW WOW/ nuvo:gu / TOMOVSKY / J-ROCK GUITARIST特集

L'Arc~en~Ciel / 大槻ケンヂ / 忌野清志郎 / Eins:Vier / BIG LIFE / ハイパーマニア / BLOODY IMITATION SOCIETY / THE HARPER ST. BAND / VISUAL WORK SHOCK

1996.1月号～

T-BOLAN / 黒夢 / CRAZE / DEEP / THE MODS / CHAGE & ASKA / Chap Chimes / PIZZICATO FIVE / FIX / 斉藤和義 / 明石昌夫グループ / SIAM SHADE / BEST ALBUM特集

BLANKEY JET CITY / WANDS / SLY / 矢沢永吉 / 坂本龍一 / Eins:Vier / JILL / 氷室京介 / 大黒摩季 / THE SPACE COWBOYS / 95年度J-ROCK新聞

LUNA SEA / 黒夢 / L'Arc~en~Ciel / THE YELLOW MONKEY / THE STREET BEATS / THE MAD CAPSULE MARKET'S / RUFFIANS / ♠THE HIGH-LOWS♠ / J-ROCK BASSIST特集

X JAPAN / GLAY / DEEN / 明石昌夫 / CHAGE & ASKA / 甲斐よしひろ / Eins:Vier / THE MAD CAPSULE MARKET'S / ZYYG / GARGOYLE / LAUGHIN' NOSE / 真心ブラザーズ / ALBUM CREDIT特集

上記以外は売り切れです。
95年1月号・5月号は創刊準備号です。書店ではお求めになれませんのでご注意ください。詳しいお求め方法は下記をご覧ください。

定期購読&バックナンバーの申込方法

■本誌の定期購読を希望される方は、とじ込みの郵便払込用紙に必要事項(郵便番号・住所・氏名・電話番号)を記入の上、最寄りの郵便局よりお申し込みください。1年間(12冊)、3300円(税・送料込み)でお届けします。

■「J-ROCK magazine」バックナンバーを希望される方は、下記注意事項をご覧のうえ、とじ込みのバックナンバー専用払込用紙に必要事項を記入し、希望冊数分の本代と送料の合計金額を最寄りの郵便局より振り込んでください。なお、希望されるバックナンバーが売り切れた場合は、返送料を差し引いて小為替または切手で返金させていただきます。ご了承ください。

※注意

◇本の価格は、95年1月号は1冊200円、95年5～96年4月号は1冊300円です。(売り切れもあるのでご注意下さい)

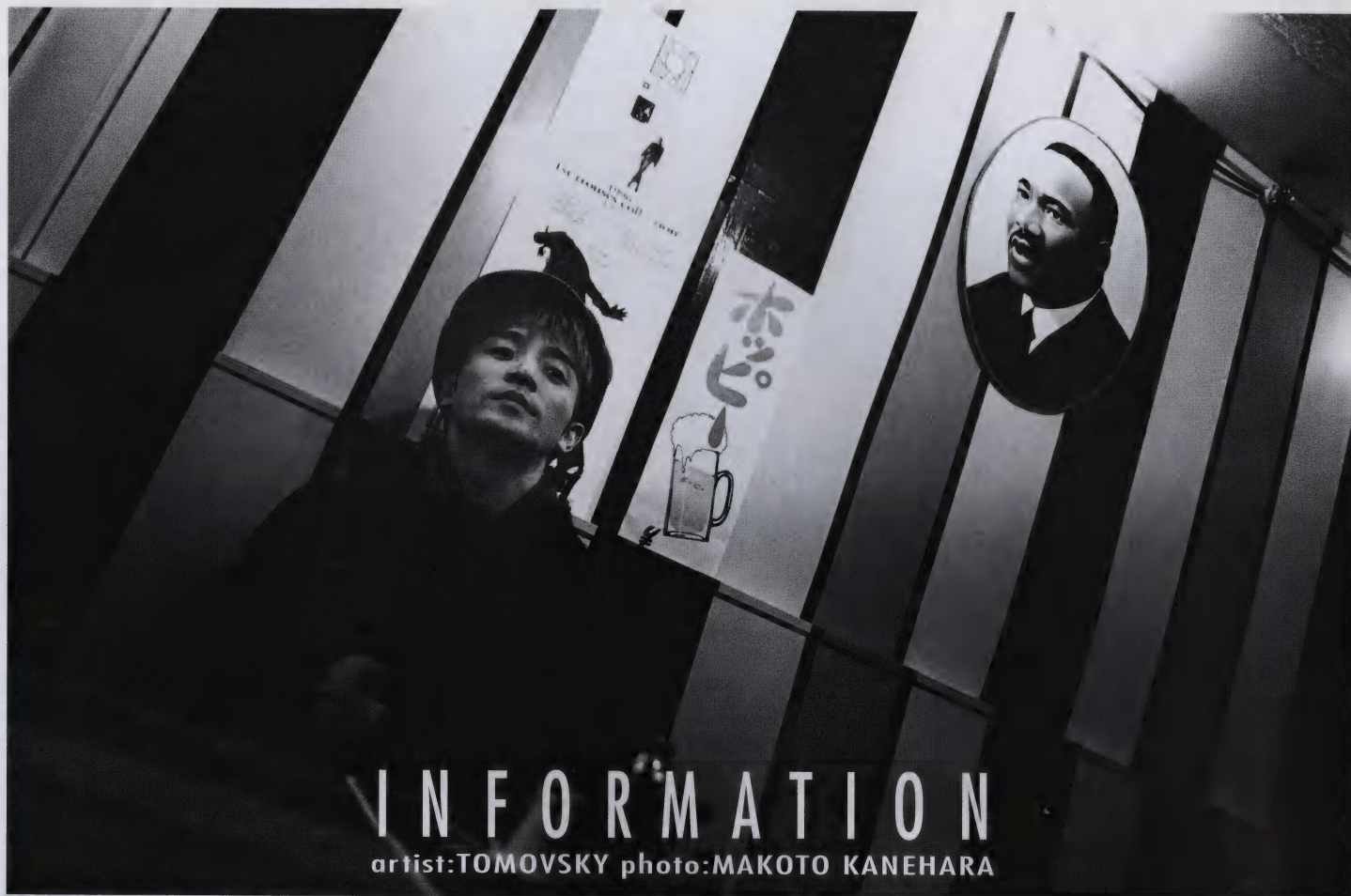
◇送料は、1冊270円、2冊390円、3～5冊700円、6～12冊950円です。

◇希望する号数(必ず何年何月号かを記入)・冊数・郵便番号・住所・氏名・電話番号を必ず振込用紙に記入してください。

◇95年7月号以降は、書店でもお求めになれます。それ以前のバックナンバーは、専用払込用紙でのみお申し込みができます。

ロック音楽ROOTS・J-ROCK ARTIST BEST 50

■TV音楽番組「ロック音楽ROOTS」(J-ROCK magazine提供、全国31局ネット)では、番組に対するご意見・ご要望をお待ちしています。とじ込みハガキにご意見・ご要望・住所・氏名・年齢・職業を明記の上、50円切手をはってお送り下さい。毎月抽選で50名様に番組オリジナルグッズを差し上げます。

■「J-ROCK magazine」は、全国32局ネットで放映中の音楽番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」に協力しています。この番組は、新譜の売り上げチャートではなく、皆さんの投票によって決まるアーティストの人気ランキングを、毎回発表していく番組です。読者の皆さんも番組づくりに協力してください。投票方法は、官製ハガキに投票したいアーティストを1組と、住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88　KBS京都「J-ROCK ARTIST BEST 50」係宛お送りください。投票者には、毎回抽選で番組からの記念品が贈られます。

大募集

■J-ROCK magazineの「INDEPENDENCE」コーナーでは、オリジナリティーを持った意欲あふれるインディーズのバンドやソロアーティストを紹介しています。我こそはと思う人は、編集部まで音源、プロフィール、写真、ビデオなど活動内容が詳しく分かる物を送って下さい。取材をお願いする場合は、こちらからご連絡します。推薦もOKです。

■J-ROCK magazineでは、新企画『PLAYERS FILE』を構想中。この企画は毎月1アーティスト（バンドの場合はその中の一人）に注目し、編集部や読者でそのアーティストを追求しようというものです。そこで今月もアーティストに対する読者の意見を大募集！ 「この人こそは…」と自分が思うアーティストの作詞や作曲、プレイやステージングなどに対しての具体的な意見を送って下さい！ 「○○という曲のこの音、この演奏がスキ」「○○という曲を聴いて、考えが変わった」という素直な意見から、「○○という曲のあの部分は一体どうやって弾いているのか。歌っているのか」などの疑問までアーティストに対するものなら何でもOK。投稿の際は、ペンネームを希望する人も、必ず住所・氏名・年齢を書いて下さい。

■「J-ROCK magazine」では、音楽にこだわりを持ったいろいろな人達が「だれかに伝えたい」と思いながらも、自分の中に葬り去っている「こだわり」「ネタ」「意見」「批判」などを発表する場になりたいと考え、VOICEというコーナーを設けています。ライブレポート、ディスクレビュー、アーティスト評、アーティストへのメッセージなど、どのようなスタイルでもOK。このページ下のあて先まで本音を投稿してください。採用させていただいた方には、CD券（3000円分）を差し上げます。

【投稿規定】
◇文字数：1600字程度まで。
◇原稿用紙での投稿を基本としますが、フロッピーディスク（MS-DOSファイル）、FAXでも構いません。
◇ペンネームも可能ですが、必ず住所・氏名・年齢・タイトルを明記してください。

■視覚的表現から音楽へのこだわりを伝えたいというカメラマン、イラストレーター、芸術家（平面・立体）の持ち込み歓迎します。事前に電話連絡の上、編集部まで作品をご持参ください。

次号予告

J-ROCKmagazine 96年6月号は、4月27日発売。

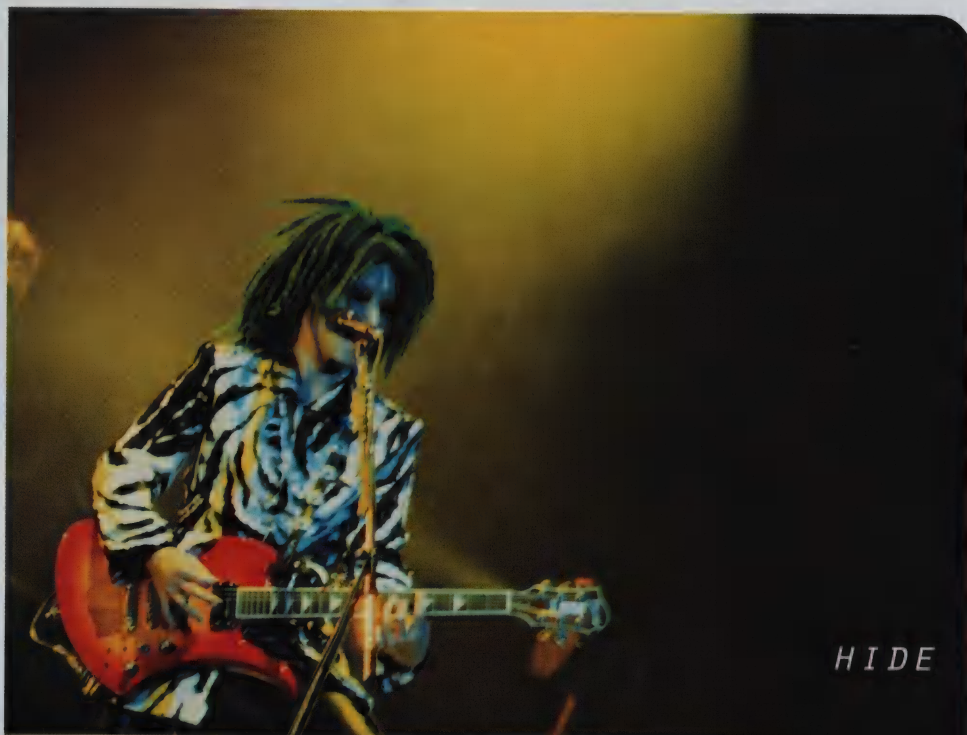
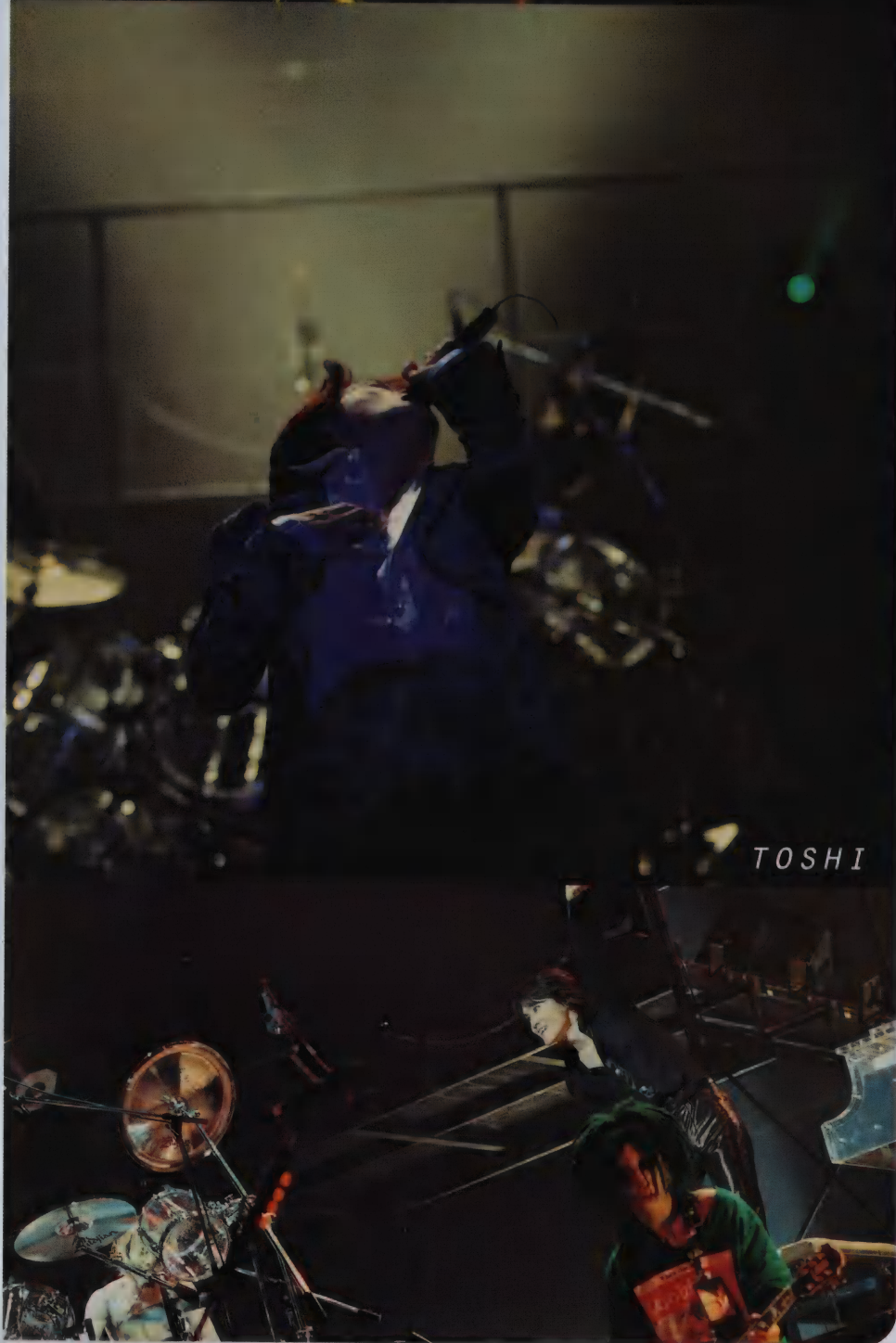
登場予定アーティストは、ルナシー／B'z／黒夢／ジュディ・アンド・マリー／アインス・フィア／布袋寅泰／シャム・シェイド／大黒摩季 他。
なお、次号よりパワーアップを図り、音楽専門誌として、さらに充実した内容をお届けするために、定価を400円（税込）に値上げします。装丁も一新、カラーページを拡大しますのでご期待ください!!

株式会社ジェイロックマガジン社・編集部 〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル8F TEL.06-214-1751 FAX.06-214-1761

JAPAN

PHOTOGRAPHER MAKOTO KANEHARA
TEXT BY AKIRA NISHIHARA

HEATH

X JAPAN DAHLIA TOUR

YOSHIKI

X JAPAN DAHLIA TOUR '95-'96

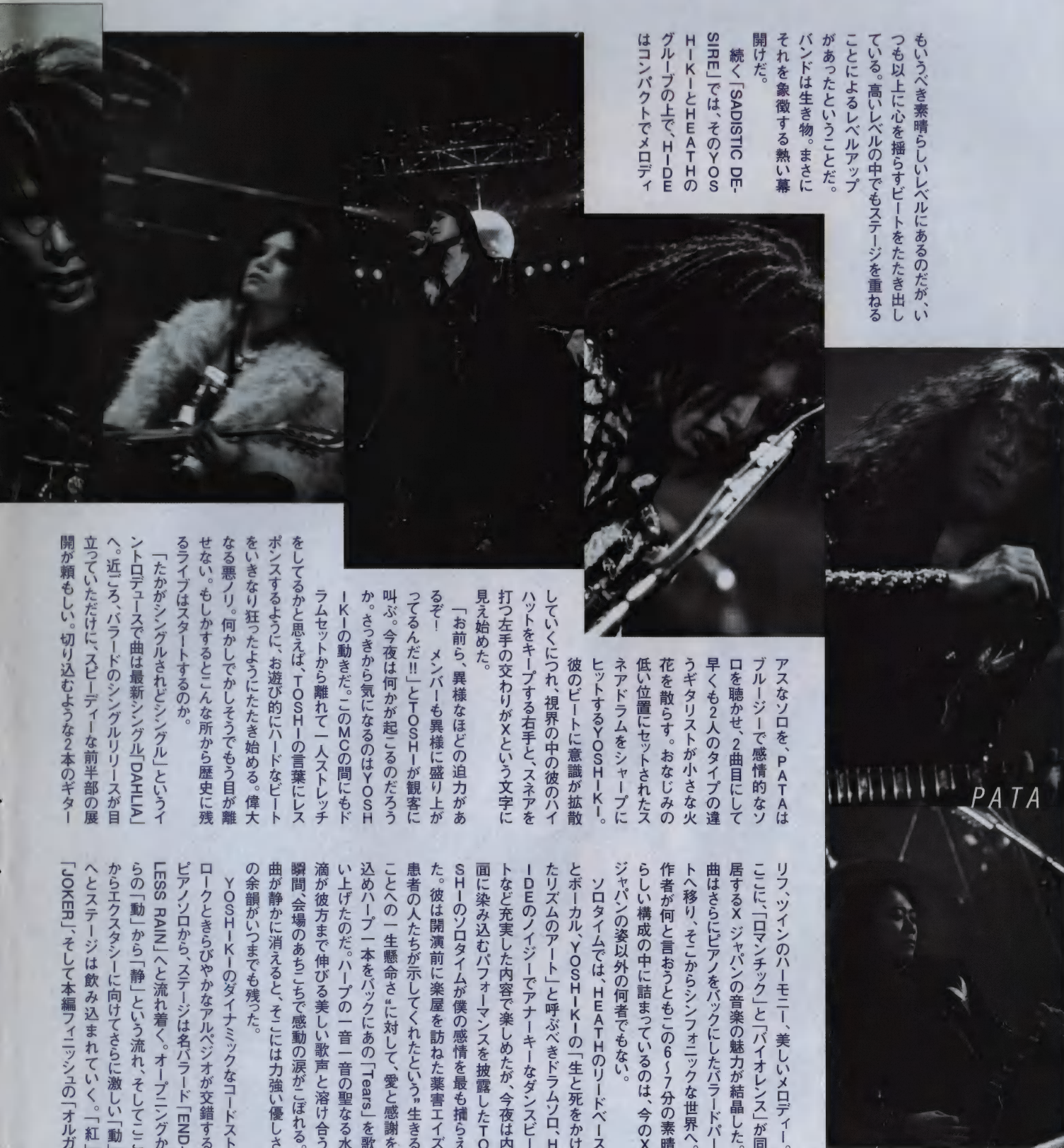
巨大化し続けるX ジャパン ―――

アリーナクラスのどでかいライブを、自らインスピレーションし、表現する音楽で、いともたやすく芸術作品の域にまで到達させてしまう彼らのアーティスト・パワーにはいつも驚かされてきた。それは彼らがバンドとして、常に限界ギリギリのレッドゾーンで勝負しているからこそ実現できることだ。それだけに、メンバーの体調不良、ライブ中の事故を始めとするトラブルでライブが途中で中止されてしまったりと、デンジャラスな要素はつきまとい、極論になるが、ステージの出来においても天国と地獄が表裏一体となっているようにさえ思える。彼らのそんな危うさや過激さに対しては、「これこそロックそのものだ」ってちょっと口にするのも恥ずかしい賞賛が平気で頭に浮かんでしまうほど評価しているのだが…。

最近僕の頭の片隅には、受け手側が勝手にX ジャパンの巨大化したスペクタクル級のライブや、ステージ上のドラマやカリスマに慣れすぎてしまって、彼らが常に発し続けているロックのベーシックなパワーに対しての感覚を鈍らせてしまってはいないか、という危機感が巣くっている。ライブを楽しむのに何をお堅いことをと笑われるかもしれないが、やはり根っこの部分も忘れちゃいけないという思いなのだ。

96年2月24日、大阪城ホールでのレギュラーツアーのライブは、純粋にロックミュージックファンという原点に返って身を正し、ライブハウスに出かけるようなつもりで、そのデンジャラスなライブ空間にジャックインしようとした。

白いライトが過激に点滅する中、スタートしたオープニングナンバー「RUSTY NAIL」。もともとバンドのリズムセクションは鉄壁ともいうべき素晴らしいレベルにあるのだが、いつも以上に心を揺らすビートをたたき出している。高いレベルの中でもステージを重ねることによるレベルアップがあったということだ。まさにバンドは生き物。それを象徴する熱い幕開けだ。

続く「SADISTIC DE-SIRE」では、そのYOSHIKIとHEATHのグルーブの上で、HIDEはコンパクトでメロディアスなソロを、PATAはブルージーで感情的なソロを聴かせ、2曲目にして早くも2人のタイプの違うギタリストが小さな火花を散らす。おなじみの低い位置にセットされたスネアドラムをシャープにヒットするYOSHIKI。彼のビートに意識が拡散していくにつれ、視界の中の彼のハイハットをキープする右手と、スネアを打つ左手の交わりがXという文字に見え始めた。

PATA

「お前ら、異様なほどの迫力があるぞ! メンバーも異様に盛り上がってるんだ!!」とTOSHIが観客に叫ぶ。今夜は何かが起こるのだろうか。さっきから気になるのはYOSHIKIの動きだ。このMCの間にもドラムセットから離れて一人ストレッチをしてるかと思えば、TOSHIの言葉にレスポンスするように、お遊び的にハードなビートをいきなり狂ったようにたたき始める。偉大なる悪ノリ。何かしでかしそうでもう目が離せない。もしかするとこんな所から歴史に残るライブはスタートするのか。

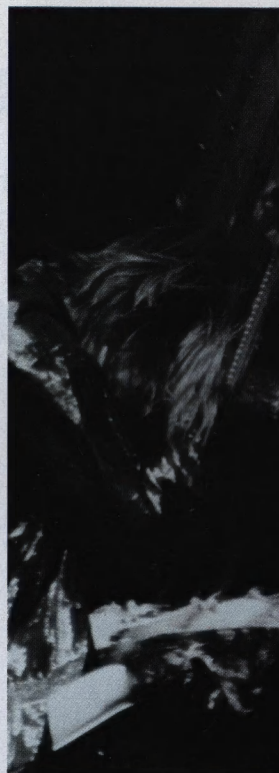
「たかがシングルされどシングル」というイントロデュースで曲は最新シングル「DAHLIA」へ。近ごろ、バラードのシングルリリースが目立っていただけに、スピーディーな前半部の展開が頼もしい。切り込むような2本のギターリフ、ツインのハーモニー、美しいメロディー。ここに、「ロマンチック」と「バイオレンス」が同居するX ジャパンの音楽の魅力が結晶した。曲はさらにピアノをバックにしたバラードパートへ移り、そこからシンフォニックな世界へ。作者が何と言おうともこの6～7分の素晴らしい構成の中に詰まっているのは、今のXジャパンの姿以外の何者でもない。

ソロタイムでは、HEATHのリードベースとボーカル、YOSHIKIの「生と死をかけたリズムのアート」と呼ぶべきドラムソロ、HIDEのノイジーでアナーキーなダンスビートなど充実した内容で楽しめたが、今夜は内面に染み込むパフォーマンスを披露したTOSHIのソロタイムが僕の感情を最も捕らえた。彼は開演前に楽屋を訪ねた薬害エイズ患者の人たちが示してくれたという"生きることへの一生懸命さ"に対して、愛と感謝を込めハープ一本をバックにあの「Tears」を歌い上げたのだ。ハープの一音一音の聖なる水滴が彼方まで伸びる美しい歌声と溶け合う瞬間、会場のあちこちで感動の涙がこぼれる。曲が静かに消えると、そこには力強い優しさの余韻がいつまでも残った。

YOSHIKIのダイナミックなコードストロークときらびやかなアルペジオが交錯するピアノソロから、ステージは名バラード「END-LESS RAIN」へと流れ着く。オープニングからの「動」から「静」という流れ、そしてここからエクスタシーに向けてさらに激しい「動」へとステージは飲み込まれていく。「紅」「JOKER」、そして本編フィニッシュの「オルガ

X JAPAN DAHLIA TOUR '95-'96

PLAY LIST

SE
1 RUSTY NAIL
2 SADISTIC DESIRE
3 SCARS ON MELODY
4 DAHLIA
5 WEEK END
HEATH SOLO
DRUM SOLO
TOSHI SOLO
HIDE SOLO
PIANO SOLO
6 ENDLESS RAIN
7 紅
8 JOKER
9 オルガスム
encore
E1 切望の夜（YOSHIKI 詩の朗読）
E2 LONGING ～跡切れた melody～
encore
E3 X

1996年2月24日　大阪城ホール

スムス」ではYOSHIKIがついにぶっち切れた。白煙を噴くボンベを手に客席めがけてセキュリティーの壁を突破しようとする。彼の乱心は客席最前列の柵の前で玉砕されたが、彼に少しでも近づこうとするファンで客席も大混乱。怖いぐらいにノっているYOSHIKIに大きな声援がぶつけられる。このハプニングで演奏はどんどん熱さを増し、爆発的なエンディングをきめてメンバーはあっと言う間に姿を消した。

さっそくアンコールを切望する声が。客席でもとんでもないことが起きている。アリーナでもスタンドでも自然にウエーブが起き、観客が互いに声援を送り合っているのだ。日本のライブでこんな光景が観られるなんて、今夜は何てラッキーなんだろう。バンドの「とんでもないこと」は客席に、その熱い演奏を通して確実に伝染していたのだ。とんでもなく感動的なシーンに震えながらX ジャパンのファンにしばし感謝。

アンコールの最後に演奏されたのは、おなじみの「X」。その演奏は暴れているが、さ細なあら探しを許さないほどにフィーリングは完ぺきだ。途中ドラムから離れたYOSHIKIに代わってHIDEが一瞬ドラムをたたくとYOSHIKIはドラムを破壊するという儀式で自身の感情の高ぶりと喜びを表現し始めた。それに触発されたようにTOSHIも儀式に加勢する。フロアタムやシンバルがステージ上を飛び交う。そこはもう感情の暴発で無茶苦茶だ。しかし、”行く“時は”行き切る“のが本当に気持ちのいいライブ。

中途半端なロック的ポーズなんてお話にならない。今夜はすべての観客とメンバーの歴史に残るべき”行き切った“ライブだ。

バンドは音楽を吐き出しながら生きている生き物。奴はいろんなことからエネルギーを得たり、いろんなことにエネルギーを消耗したりしながら、走り続ける。そんな身勝手に動き回る生き物を、決まり切ったアングルでいつも眺めてるなんて、なんてつまらない行為なのだろうか。

今夜は、自分の彼らのライブへの接し方を振り返ろうとするのに、これ以上のライブはないという絶好の機会を”何か“が僕に与えてくれた。音楽もスペクタクルもドラマもカリスマも、どれ一つをとっても否定されるべきものではない。今夜のように勢いに任せて暴れ回るX ジャパンにとって、まず大切な核は優れたハードロックバンドであること。そしてそのクオリティーがドラマを巻き起こし、ドラマによってカリスマが完成していくのだから。問題なんてなかった、要はこっちのバランス感覚でしかない。

［文・西原 朗　撮影・金原 誠］